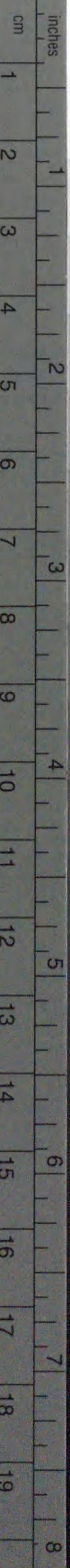
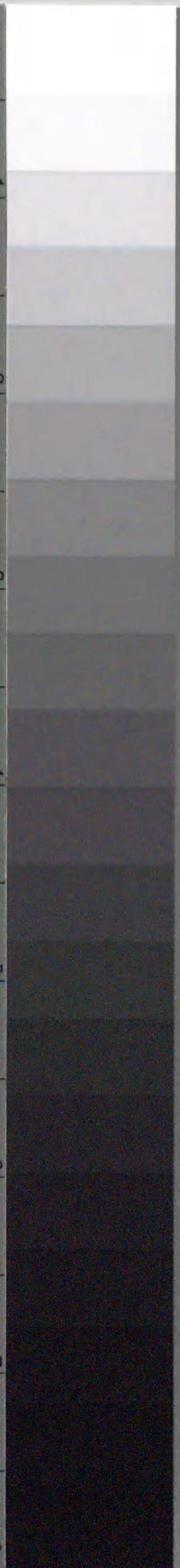


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

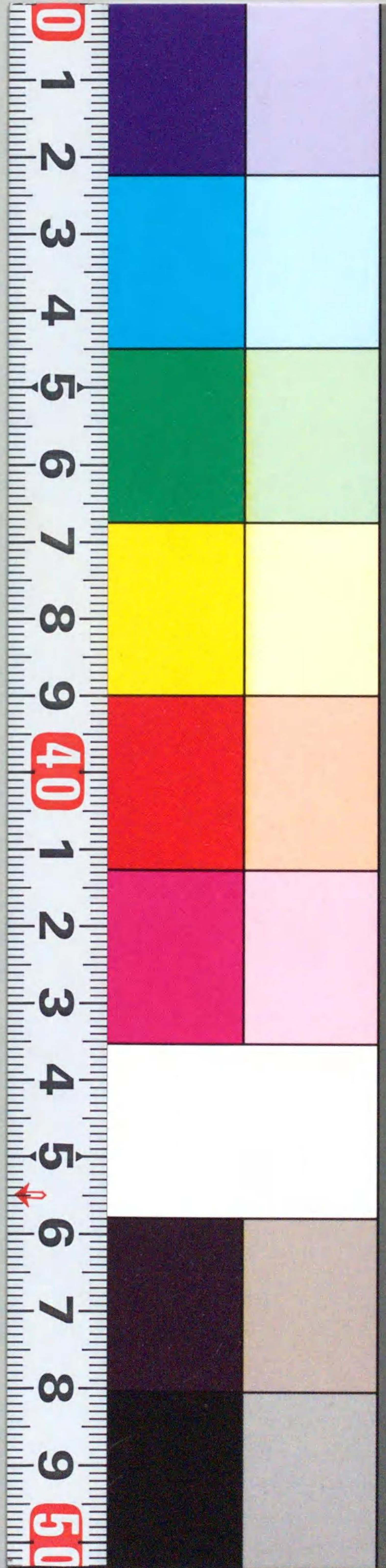
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



210.58
1653d



00229780

19.8.31
977

企畫部



Faint red seal impression, likely a library or collection stamp.

359

大日本維新史料

359

大日本維新史料

210.58
I653d
II



229780

大日本維新史料 第三編ノ三

目次

安政五年

三月

朔	日	老中堀田正睦、書ヲ米國總領事「ハリス」ニ致シテ、歸府ノ期日遅延スベキヲ告グ。……………一〇
同	日	熊本藩、江戸藩邸ニ於テ、洋式銃陣ノ演習ヲ始ム。……………二
同	日	福井藩主松平慶永、川越藩主松平直侯ノ邸ヲ訪フ。直侯、家士ノ武技ヲ慶永ニ觀メス。……………一〇
同	日	佐賀藩、長崎港外ニ於テ、曩ニ購入セシ飛雲丸ノ運轉ヲ試ム。……………二五
三	日	皇妹和宮、雛滿ノ儀ヲ行フ。……………二六
同	日	議奏久我建通、外交措置ニ關スル廟議ノ因循ヲ慨シ、上書シテ職ヲ辭センコトヲ請フ。十六日、慰諭シテ之ヲ留ム。……………三八

目次 安政五年三月

同日 鷹司家侍講三國大學、福井藩士中根鞞負ニ、大將軍繼嗣問題ニ關スル
京地ノ情勢ヲ報ズ。尋デ十八日福井藩主松平慶永、書ヲ大學ニ與ヘ、一
橋家主徳川慶喜ノ擁立ニ斡旋センコトヲ望ム。……………四五

同日 熊本藩主細川齊護、老臣長岡監物ノ軍備整頓・節儉勵行ニ盡瘁セシ功
勞ヲ賞ス。……………五八

四日 高知藩主山内豊信、福井藩主松平慶永ヲ訪ヒ、内大臣三條實萬ノ外交
并ニ大將軍繼嗣ニ關スル建議案ニ對シ、豊信ノ實萬ニ致セシ答書控ヲ
示シテ、互ニ意見ヲ交換ス。……………五九

五日 武家傳奏廣橋光成・同東坊城聰長・議奏坊城俊克、老中堀田正睦ノ旅
館ニ抵ル。正睦、天下人心ノ歸向ヲ一ニスルハ、大將軍力メテ之ニ當
ルベキ旨ノ幕府奉答書ヲ上リ、且、時日遷延セバ紛争測リ難キヲ述
ベ、速ニ條約調印ニ勅許ヲ得ンコトヲ請フ。……………六四

同日 幕府、大目付土岐頼旨ヲシテ道中奉行ヲ、同遠山則興ヲシテ、宗門改
ヲ兼ネシム。……………七四

同日 老中松平忠固・同久世廣周等、越中島調練場ニ步・騎・砲三兵ノ調練
ヲ觀ル。十六日、マ
タ同シ。……………七五

同日 儒役林樵・目付津田半三郎、大坂ヨリ歸京、二月三日是日、京都ヲ發シ、
歸府ノ途ニ就ク。十九日、江
戸ニ至ル。……………七八

同日 米國總領事「ハリス」、幕府汽船觀光丸ニ乗ジテ再ビ江戸ニ至リ、蕃書
調所ニ入ル。……………八五

六日 熊本藩主細川齊護、福井藩主松平慶永ノ申ネテ藩士横井平四郎小ヲ招
聘センコトヲ請フヲ以テ、是日、之ヲ諾ス。……………一〇五

七日 權大納言中山忠能ヲ議奏加勢ニ補ス。……………一一四

同日 權大納言中山忠能・權中納言正親町三條實愛・同正親町實徳・參議八
條隆祐・同中院通富・同橋本實麗・同野宮定功、連署シテ條約調印ニ
對スル勅裁ハ、申ネテ諸侯ノ意見ヲ徵シ、而シテ後ニ決セラレベキヲ
建白ス。……………一一六

同日 前權中納言五條爲定・正五位橋本實梁・左近衛權少將千草有文、各外
交ノ措置ニ關シ、意見書ヲ權大納言一條忠香ニ提出ス。尋デ十日正三位
愛宕通祐、マタ同シ。……………一二一

同日 下手渡藩主立花種恭、石炭拾萬斤ヲ幕府ニ獻ズ。……………一二九

八日 幕府、書院番柴田善一郎・鐵砲玉藥奉行木村董平ヲ以テ、代官管地信濃ト爲ス。……………一三〇

同日 福井藩士中根鞆負・水戸藩士安島彌次郎、一橋家小性平岡圓四郎ノ邸ニ會シ、一橋家主徳川慶喜ノ大將軍繼嗣タルヲ固辭スルノ意アルニ就キ密議ス。……………一三二

九日 權中納言正親町三條實愛ヲ議奏加勢ニ補ス。……………一六五

同日 朝議アリ。關白九條尙忠ノ上奏ニ係ル外交措置ヲ幕府ニ委任スル旨ノ勅裁案ヲ議セシム。左大臣近衛忠熙・内大臣三條實萬、疾ト稱シテ朝セズ。右大臣鷹司輔照・權中納言二條齊敬、忠熙・實萬ノ邸ニ抵リ、其參朝ヲ促ス。實萬、議遂ニ決スル所ナシ。明日、更ニ三公以下納言・參議ニ命ジテ各所見ヲ上ラシム。十一・二日ニ互リ、權中納言中山忠能・同大炊御門家信・同廣幡忠禮・權中納言四辻公績・同正親町三條實愛・同正親町實徳・同三條西季知・參議八條隆祐・同日野資宗・同庭田重胤・同中院通富・同橋本實麗・同野宮定功、連署奉答書ヲ上リ、案文ノ變更ヲ請フ。……………一六七

同日 幕府、勘定吟味役勝田次郎ニ命ジ、江戸ニ於テ箱館・蝦夷地ノ事務ヲ執ラシム。尋デ十一日海防掛ヲ兼ネシム。……………二〇三

同日 盛岡藩士ノ箱館立待臺場ヲ戍ル者、外國船退去ノ際ニ於ケル注進方法ヲ改メンコトヲ箱館奉行村垣範正ニ請フ。是日、之ヲ聽ス。……………二〇四

十日 蘭國領事「クルチウス」、江戸ニ到リ、眞福寺芝愛岩下ニ入ル。……………二〇六

同日 越中國新川郡常願寺川氾濫、被害多シ。四月二十六日、マタ氾濫ス。……………二一五

十一日 老中堀田正睦、米國總領事「ハリス」ノ再ビ江戸ニ來リシコトヲ奏ス。……………二五二

同日 米國通辯官「ヒュスゲン」、蘭國領事「クルチウス」ヲ旅館眞福寺ニ訪フ。……………二五四

同日 佐賀藩主鍋島齊正、藩地ニ於テ、藩士ノ銃陣ヲ閱ス。十四・十七日、マタ同シ。……………二六一

十二日 外交措置幕府委任ノ勅裁案ニ關シ、權中納言中山忠能・權中納言正親町三條實愛・正三位大原重徳・侍從岩倉具視等八十八人、連署シテ陳情書ヲ上リ、且、關白九條尙忠ニ迫リ、朝議ノ變改ヲ請フ。……………二六五

同日 幕府、評定所一座・海防掛・大目付及長崎・下田・箱館奉行等ニ命ジ、日米修好通商條約書板刻ノコトニ就キ、審議セシム。……………二九一

同日 蕃書調所頭取古賀謹一郎、下田・箱館在留米國人ノ提出ニ係ル洋書購入ノコトニ關シ、箱館奉行堀利熙ニ通牒ス。……………二九七

同日 棚倉藩主松井康圭、書ヲ幕府ニ上リ、本月三日、藩地暴風雨被害ノ狀ヲ稟ス。……………三〇一

同日 蘭國領事「クルチウス」、蕃書調所ニ米國總領事「ハリス」ヲ訪フ。七十日、マタ同シ。……………三〇四

十三日 太宰帥熾仁親王、外交拒絕ノ意見ヲ上ル。……………三〇七

同日 非藏人鴨脚相模等三十六人、連署シテ外交措置幕府委任ノ不可ナルヲ述ベ、勅裁案ノ字句ヲ刪改センコトヲ請フ。明日、非藏人松尾出雲等十九人、マタ連署シテ同ジク之ヲ申ス。……………三一

同日 米國總領事「ハリス」、下田奉行井上清直ヲ其邸ニ訪フ。……………三一

同日 淨土宗寺院總代歸命院輝譽・安養院戒譽等、連署シテ書ヲ知恩院宮隆宮ニ上リ、日米條約調印ノ拒絕・邪教取締ノ勵行ヲ、速ニ朝廷ニ歎訴アラシメテ請フ。……………三二

十四日 侍從岩倉具視、時務策神州萬歲策ヲ内奏ス。……………三二

同日 近習・内々・外様三番ノ朝臣、相議リ、誠忠ヲ抽デ輕舉ヲ慎ムベキヲ約ス。……………三五

同日 幕府、箱館ニ大黃栽培及製法所ヲ創ム。是日、水戸藩醫佐藤民之助ヲ雇傭シ、該地ニ赴イテ其事ニ當ラシム。……………三六〇

同日 米國總領事「ハリス」、蘭國領事「クルチウス」ヲ旅館眞福寺ニ訪フ。十五日、米國通辯官「ヒュスケン」、マタ「クルチウス」ヲ訪フ。……………三六一

同日 福井藩士橋本左内景岳、宮・公卿間ニ遊説ノ顛末及京都ノ情勢ヲ在府ノ同藩士中根鞞負ニ報ズ。二十四日、マタ同シ。……………三六五

十五日 名古屋藩主徳川慶恕、參府ニ依リ、徳島藩主蜂須賀齊裕・仙臺藩主伊達慶邦・盛岡藩主南部利剛、就封ニ依リ、各登營ス。……………四二三

同日 幕府、吉田伊豫藩主伊達宗孝ノ歸藩ヲ停ム。……………四六一

同日 蘭國領事參府掛勘定奉行永井尚志、蘭國領事「クルチウス」ヲ自邸ニ招キ、其要請ニ係ル江戸市中ノ遊歩及旅館ニ國旗掲揚ノコト等ヲ協議ス。十六・十八日、マタ眞福寺ニ於テ會談シ、議、略ホ決ス。……………四六二

同日 幕府練習艦日本丸後威臨丸、長崎ヨリ薩摩國山川港ニ入ル。明日、鹿兒島藩主島津齊彬、艦ニ抵リ、乗員勝麟太郎及蘭國士官等ト會見ス。同日、日本丸、鹿兒島ニ入港ス。十七日、麟太郎及蘭國士官等集成館ヲ見ル。十八日、日本丸、鹿兒島ヲ去リ、山川港ニ寄泊ス。齊彬再ビ往訪ス。……………四六二

九日、日本丸、同港ヲ出帆ス。……………四九二

十六日 征夷大將軍徳川家定、城中吹上苑ニ麾下士ノ弓技ヲ觀ル。二十三日、マタ騎射ヲ閱ス。……………五四三

同日 福井藩主松平慶永、名古屋藩主徳川慶恕ヲ訪ヒ、大將軍繼嗣ニ關スル所見ヲ質ス。四月三日、マタ同シ。……………五四五

同日 米國總領事「ハリス」、淺草ニ出遊ス。十八日、王子ニ、二十七日、マタ染井ニ遊ブ。……………五五一

十七日 武家傳奏東坊城廳長、重任ニ堪ヘザルヲ具シテ退役ヲ請フ。十一日是日、之ヲ聽ス。……………五七〇

同日 地下官人九十七人、連署シテ外交拒否ノ意見ヲ上ル。……………五九〇

同日 禁裏附都筑峯重、頓ニ病ヲ發シ、明日、遂ニ死ス。四月六日ニ至リ、峰重ノ死ヲ稟ス。……………六〇五

十八日 皇子祐宮・皇妹和宮ノ世話卿ヲ更ム。議奏裏松恭光ヲ祐宮ノ、同萬里小路正房ヲ和宮ノ世話卿ト爲ス。……………六一六

同日 幕府、飛驒郡代福王三郎兵衛ヲ罷メ、代官多羅尾民部ノ支配所貳萬石ヲ増地シ、同羽田十左衛門・同松永善之助ニ、支配所場所替ヲ命シ、壹萬石ヲ増地ス。尋デ三十日代官増田作右衛門ヲ飛驒郡代ト爲ス。……………六二〇

同日 幕府、大垣藩主戸田氏彬ノ美濃國伊尾川治水ノ功ヲ賞シテ時服ヲ賜ヒ、藩士戸田權之助等十人ニ賞賜ス。……………六二六

同日 箱館奉行村垣範正、越後國水原村忠藏・同國中村濱廣右衛門ニ、北蝦夷地直場所差配人ヲ命ジ、苗字帶刀ヲ許ス。……………六二八

同日 鳥取藩、品川臺場第四戍衛ノ藩兵ヲ交代ス。……………六三〇

同日 鯖江藩主間部詮勝、越前海岸ノ警備ヲ檢分ス。是日、出發、二十日、歸藩ス。……………六三六

同日 福井藩士中根靱負、同藩士横山猶藏ノ上京ニ託シテ、大將軍繼嗣ニ關スル江戸ノ情勢ヲ、同藩士橋本左内景岳ニ報ズ。猶藏、明朝、藩命ヲ受ケ、再上京ノ途ニ就キ、二十九日、京都ニ至ル。……………六四五

同日 萩藩士久坂義助女瑞 京都ニ至リ、是日、書ヲ元萩藩士吉田寅次郎松陰ニ致シテ、上國ノ形勢ヲ報ズ。……………七〇五

十九日 外交措置ニ關スル勅裁案略ボ議定セララル。十八日是日、之ヲ公卿等ニ内示ス。前權中納言五條爲定・同今城定章等八十二名、連署シテ案文ノ潤色ヲ請フ。……………七一九

同日 征夷大將軍徳川家定、始テ越中島調練場ニ臨ミ、麾下士ノ操練ヲ閱ス。明日、老中松平忠固以下講武所員・鐵砲方等ニ賞賜ス。……………七三九

同日 箱館奉行堀利熙、大野藩士早川彌五左衛門ニ、北蝦夷地西海岸「ライ

チシカ」・「ホロコタン」間ノ開拓ヲ許ス。……………七六二

二十日 老中堀田正睦ヲ小御所ニ召シテ、外交措置ニ關スル前日ノ朝旨ヲ宣シ、
猶、三家以下諸侯ノ意見ヲ奏シテ、再ビ勅裁ヲ請ハシム。……………七八七

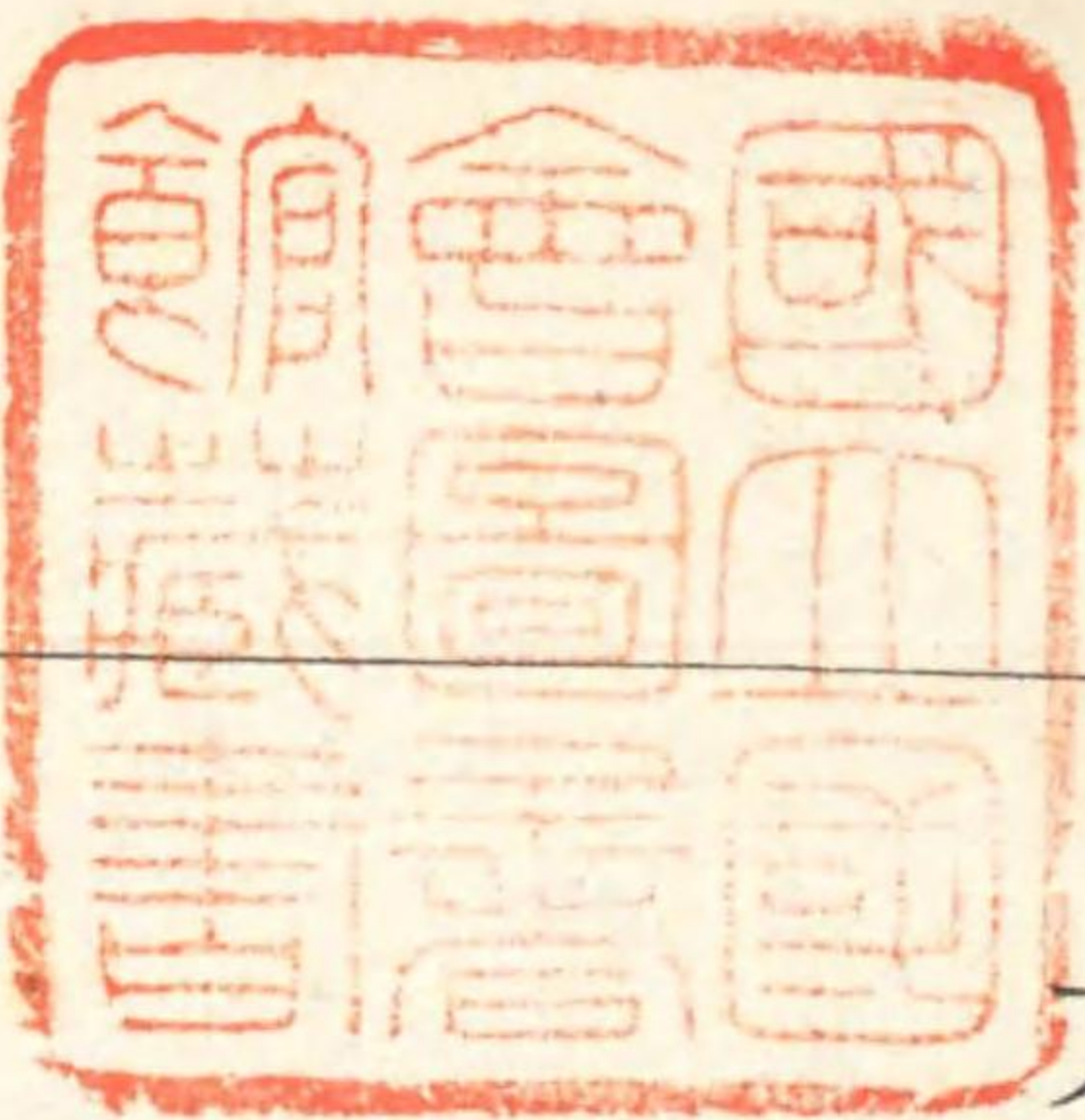
同日 蘭國領事「クルチウス」、淺草ニ出遊ス。四月四日、マダ
王子ニ遊ブ。……………八一

(目次終)

大日本維新史料 第三編ノ三

安政五年戊午 (紀元二五一八年
西曆一八五八年)

三月 小盡
朔丁丑



朔日^{丁丑} 老中堀田正睦<sup>備中守○
佐倉藩主</sup> 書ヲ米國總領事「ハリス」Harris ニ致シテ、
歸府ノ期日遅延スベキヲ告グ。

〔老中堀田正睦書翰〕○米國大使
館所藏本

亞墨利加合衆國全權
兼コンシユル・セ子ラール

トウンセント・ハルリスに

日本と合衆國と假條約爲取替之儀ニ付、京都に、御使を以、

奏聞を被遂候間、歸府迄調判難相成、右と二ヶ月可相掛、其時又々其以前も、調判可致旨
等、當正月五日、書面を以申達置、右日限も相成候間、其許病後押る再出府被致候由等、

安政五年三月初日

日米假條約
京都へ奏聞

堀田ノ歸府
延引ヲ告グ

安政五年三月朔日

委細江戸表より申越、令承知候、然處、其許と委任之者共、初發より對話之趣を勿論、一躰之事情巨細を及

奏聞候に付、相達置候日限迄に難致歸府、約日相違致し候間、一應申述置候、尤此上左迄日數相掛候儀を有之間敷、猶委細之儀を、井上信濃守(備直、下田奉行)より可申談候、謹言、

安政五年三月朔日

堀田 備中 守(花押)

熊本藩、江戸藩邸ニ於テ、洋式銃陣ノ演習ヲ始ム。

〔熊本藩在府家老溝口藏人達〕

○肥後藩國
史料所載

○三月朔日同藩士荒木甚四郎へ

荒木 甚四郎に

西洋法炮術者、屹ト物場之利用有之候由くる、公邊を初諸家様共、此節一般に相開ケ、就中銃隊之儀、列藩打混之操練等有之、盛に被行候儀者、孰淺見聞之通に付、於此方様淺、早々御取起相成、致熟練候様無之候る者、公邊之御趣意を淺叶不申、依之、差寄江戸表之儀、外様足輕者申こ不及、其餘有志之面々者、當代無足之無差別、池部啓太申談、右之藝術致稽古候様被仰付、追る御參府迄に考大概隊列之形出來候程にも有之度旨、御國許より申來候

在府ノ者ニ
洋式炮術ヲ
稽古セシム

條、左様相心得、觸支配方に精々可被相示候、以上、

三月朔日

○附箋

相州表之儀を、外様足輕並御郡筒等ハ申こ不及、其際有志之面々を、當代無足之無差別、大筒手を相加、右之藝術稽古いたし候様及達候事、

〔熊本藩在府家老溝口藏人達〕

○肥後藩國
史料所載

○三月朔日同藩物頭へ

今度及達候西洋法炮術稽古之儀、其筋御役々詰合次第ごと、往々盛衰も可有之、右稽古之盛衰ハ、武備之厚薄を關候而已ならず、平素御願事等之御都合も何程に可有之哉、依之清田新兵衛・吉田平之助儀、屹度公邊之御趣意を奉し、御家中之面々一統振立、年を逐相勵候様、專可致世話旨、被仰付候間、無油斷其向々に咄合候様、及達候條、左様可被相心得候、以上、

步兵操練之稽古之儀に付るハ、御役人様之御内方、先達る極内分御沙汰有之、其末矢張當時之儘なる差置候るハ、往々公邊之御都合も何程に可有之哉、旁今日及達候通なる、委細之儀ハ追る及面話候條、組之者共一統振立相勵候様、重疊可有心配候、以上、

步兵操練ノ
コト

安政五年三月朔日

安政五年三月初日

三月初日

御物頭衆中

溝口

藏人（眞藏）

〔熊本藩在府家老溝口藏人書翰〕

○肥後藩國
史料所載

○三月十二日在藩同役等宛

以別紙申達候、西洋法銃隊稽古之儀ニ付、巨細及御相談置候通候處、利用ニ可有之候得共、近來御出方差湊候末ニ、何分御手ニ難被及、殊ニ御備一統ニ係リ不容易筋ニ、卒爾ニ御取起も出來兼候得共、江戸表ニ諸家様方之御釣合、第一ニ閣老方御勸も有之事ニ付、定府之面々を初メ、組足輕共操練相學候様見込及達、一統振立候様相倡可申旨、委細被仰越候ニ付、別紙他筆御用狀之通、去ル朔日及達候處、御小姓頭・御物頭等別相進ニ、既ニ昨日ニ御物頭不殘足輕召連、池部啓太ニ入門有之、今日方龍口・白金・木挽丁御屋敷ニ教師相分、稽古相始申候、一ト通之手數ニ、各別六ヶ敷儀も無之候間、不日ニ一大隊之練廻位ニ、相整候様相成可申、左候得ニ公邊を初列藩ニ之御面目ニ相成、御參府之上も、諸事御都合可宜、外間定候儀可然と存候、右ニ付ると、是非段々御出方も有之候へとも、時節柄江戸表之儀ニ、別段御見放有之、可然御差圖有之度存候、此段爲申達如此御坐候、以上、

安政五年三月十二日

溝口藏人

藩士一同池部啓太ニ入門稽古ヲ始

御家老殿宛

○是ヨリ先、正月十八日、老中堀田正睦、熊本藩世子細川慶順ト會見シ、洋式銃隊ノ設置ヲ懇願ス。次ニ、ソノ史料ヲ收ム。

〔熊本藩士清田新兵衛等書翰〕

○肥後藩國
史料所載

去十八日、堀田備中守様、御内々若殿様、御招ニ被仰入候こと、當今之御時節柄ニ付、

公邊ニ羨專西洋流御倡有之、御國ニ羨此術彌以御開キ被成候様有之度思召候段、御懇ニ

被仰入、左候、右ニ御間柄ニ付被仰入候間、御差圖之様ニ相成候ると、一統ニ差障も有

之候付、右之段ニ得斗御承知被成候様との御旨ニ付、一體公邊之御振合を始、諸家様方

御倡等之御模様共、巨細承繕、早く可申上旨、御口達之趣奉得其意候、

右考、近年蠻國軍器・航海之術、自在ニ相開、既魯・墨・英・佛等之軍艦、追々渡來、頻ニ質

易等之儀願出、不容易時勢付ると、専ら御軍備筋之儀、御研究ニ相成、當今大炮・小銃等

之術ニ、西洋而已ならず、東西南北・全世界一般ニ熟練、悉實戰を以極意を究たる利用ニ

候得と、中々和炮舊傳之術ニあると、利害得失同等之論ニ無之、加之、軍器・食糧・着替等ニ

至迄、一切身廻之諸道具、一己々々輕便ニ用意いたし、惣勢一万人ハ一万人之筒を以、無

用之雜人等ニ足手纏ニ不相成様一切相省キ、全純粹之練兵を衛り候備立ニ候得と、是又

安政五年三月初日

五

堀田正睦細川慶順ニ洋式銃陣ノ設置ヲ懇願ス

西洋炮術ノ特長

安政五年三月朔日

六

幕府洋式銃陣ノ法ヲ採用ス

古法之御備あるを實戰に至大成ル得失を拘り、既支那あるを古法を泥、我を尊大に相構へ居候付、終敗軍に至、其期に至、俄に西洋之軍制を改革致し、無智不覺之國を悔り、日本未敗前に西洋之法を傳習候故、大に智有りと、蘭人賞候事杯、御聞通り、深國家大事を思召候る、一時に御起發に相成候由ある、四五ヶ年以前、下曾根金三郎様・江川太郎左衛門様御兩家に師範被立置、講武所、并鼠山・土器坂・新錢坐等、操練稽古場御取建、專御倡に相成候得共、初發を傳法相違、區々之儀を爲有之様子ある、古法を泥候向々、尙更振立不申候付、一昨年暫御取疊に相成、勝麟太郎殿御列兩三輩御人選を以、長崎表に被差越、西洋的統之法を皆傳有之、猶又、御變革を御取起に相成、講武所、并江川様御稽古場こそ、御譜代・外様・陪臣等之無差別、玉藥を被渡下、御老若様方御子弟を始、御旗本衆不及申、號令官、并太鼓打方或ハ歩卒之内に被御加り、貴賤之別なく上下一致之御倡ある、追々嚴敷被仰渡も有之候付、一時に人數相増、當時下曾根様ある、外様御大名御藩中、鍛練之歩卒一萬人餘相調候由、講武所、并江川様・勝麟太郎殿杯ある、御譜代家を始、御旗本・御家人等、專稽古繁昌仕候様相成候由御座候、

一右之通、格別之御倡あるも、古法を泥西洋流に進兼候向々、大番頭・御書院番頭・御小姓番頭衆杯之内に被、段々爲有之由之處、總る御組方引連、日々操練稽古場に御出席、御銘

田村四郎兵衛

小十人組以下與力同心ニケベリ銃ヲ交ル付ス

々差圖を以、御倡に相成候様御達に相成、將又、權現様御以來、和流之御鐵炮師範役田村四郎兵衛様御列御三方被、御役々々之御倡御頓着無之候付、別紙寫之通、講武所炮術師範役に被仰付、支配方被御改御組方并御門弟中被、別段御倡之御達に相成候付、先公邊若普く西洋流に御引改に相成候趣に御坐候、

一元來御鐵炮方不拘、小十人組・御徒組并諸組之與力・同心を被、ゲベル筒一挺宛、去秋御渡に相成、何れ被講武所其外調練場に罷出、稽古致出精候様屹と被仰渡候由、右小十人下地弓術を主といたし、且、諸組同心之内に被弓術有之、其外與力・御徒・弓・鐵炮之組に無之面々被、總る右之通御引改に相成候由ある、大略之人數等左之通、

- 貳百貳拾人 小十人
- 六 百 人 御徒組
- 千貳百貳拾六人 諸組與力
- 七千三拾八人 同同心
- 御渡之ゲベル筒
- 九千八拾三挺 (四カ)

一御城内・御門々々御番所向を初、是迄和流之修羅筒御飾付分も、去十月朔日方總る被

安政五年三月朔日

七

修羅筒

安政五年三月朔日

八

ル筒に御引替に相成、芝・上野御成之節、御堅メも右同斷之由、然^レも諸家様御受持目附々々御番所御備筒、總^ルベルに改り候様との御趣意を以、右之通御手許御引改之由、其後目附御番所^レベルに改り候ヶ所、有之由に付、追々とも、一統御引替に可相成哉之趣に相聞申候、

一前件之通專御倡付ると、日々人数相増、是迄之操練講武所等よると治り兼候由、近來於越中島、手廣之大隊操練場新に御開に相成、當時迄之講武所之船調練場に相成、左候る清水御屋形を御潰、講武所御場所替に相成候筈之由、右に公方様御成、御見置爲御辨利、旁、右之所に御移シ替之趣に相聞申候、

一外様・御譜代御大名様方之内に、未一向に不開御向有之由之處、追ると表立西洋流一般に御倡之御趣意に候哉、又信用無之御向と其儘に被閣候哉、海防御掛り御徒目附組頭格田中勘左衛門殿に、内々承繕申候處、當時之御時節に、尙更外様・御譜代之無差別、一統に亘り御倡被成度御事候得と、未御膝本之儀充分御調に不相成故、表立御觸達ハ御斟酌之稜、有之哉、何様當今之時勢よると、追ると必御一統觸之埒に、至可申哉と見込候段、返答に相成申候、

一御譜代家とると、堀田備中守様、御藩中第一番速に御改革に相成、則御觸達之寫、別紙

越中島調練場新設

堀田正睦早

ク洋式銃陣ヲ採用ス

大藩モ洋式銃陣ヲ採用

薩藩ノ洋式採用

相添置申候通、御軍法に至迄、一切西洋流に改り候由、其餘御老若様を初、御役人様方悉勿論、一統に亘り、專御引改に相成居候様子に御座候、

一御大國とると、紀州・薩州・越前・加賀無殘所、西洋法に相成、其外御大名様方悉、厚薄と有之由に候得共、此節に至り一般に相開、尾州・佐竹・長州・因州杯未起發無之由、^{〔附札〕}本行之因州之御兩家、近日少々入門有之、取^{〔起〕}相成候由、下曾根様承り申候事、及承居申候得共、猶近日之様子と急成御向と、夫々承繕候間合、無御座、兼る見聞之趣に取敢申上候事に付、右之内に、現實精粗、且、相違之向有之哉、難計、其段に豫に御斷申上置候、

一外様御大名様とると、薩州第一番に開ケ候由、初發君侯之思召と、和流之筒者玉利をも不宜、火繩・口藥等第一風雨之節用立兼、近年西洋法盛に開ケ候と、其利要雲泥之違と、從來和流之鐵炮、異國に開來候を相學、今新法發明之要器を不用と、軍備古今之時勢不明之至に付、以來若西洋流に御定メ被成候、尤古法相用候共御構と無之候得共、却る不覺之基に付、御出陣之節、不召連との御觸に相成候由に付、忽ち盛に被行候様相成候様子に御座候、其外紀州・加州、發端と和流・西洋と二ツに相成、役方之倡、手不及を、是又、薩州同様君侯之思召と、一般に相成候哉、及承申候、右に私共兼る見聞仕居候趣と、其餘巨細之儀ハ、公邊御役筋諸家様類役等に亘り合、夫々承繕候ハ、現

安政五年三月朔日

九

安政五年三月朔日

實之模様尙委敷相分可申候得共、何分御急キ之事（附テ）不能其儀、荒方前件之通不閣、別紙三通相添、此段御達仕候、以上、

安政五年

正月廿三日

清田新兵衛
吉田平之助

福井藩主松平慶永越前守 川越藩主松平直侯大和守 ノ邸ヲ訪フ。直侯、家士ノ武技ヲ慶永ニ觀メス。

〔昨夢紀事〕

三月朔日、○中略、

一此日、御兼約にて、大和守へ御出あり、

〔川越藩日帳〕○伯耆松平直之所藏本

三月一日、○中略、

一午中（松平慶永）剋、松越前守様御出、表御座鋪に御通り、各共御呼出之旨、御取次々申出之、永山外記罷出候所、時候御見舞被仰述之、兼る御直約（松平慶永）付被成御座候段、御口上をも被仰述候之付、其段申上、

松平慶永松平直侯ヲ訪フ

慶永川越藩士ノ武技ヲ觀ル

起倒流柔術

小筒

殿様御同所迄御出迎、御挨拶被遊、直ニ御先立（松平慶永）こる、表 御居間に御着座、御熨斗・御茶・多葉粉盆・御干菓子差上、引續御焼肉付三菜之御膳差上之、

殿様ニ爲御相伴被遊、相濟、御廣庭御覽所に被爲 入、諸術武藝 御覽、御直御所望等有之、諸流劍術迄相濟、夫々同所御庭内通り表御座鋪に被爲 入、御同所二之間に

御着座、御同所三之間（松平慶永）こる起倒流柔術

御覽、別段御所望等被 仰付之、相濟、猶又御庭内通り御覽所に被爲 入、岩倉鏡三郎小筒手前

御覽、別段鏡三郎并門弟世話詰合之面々八人に角前被 仰付、相濟、表

御居間に被爲 入、御椀盛・御蒸菓子引續御湯漬差上之、酉中剋御歸り（松平慶永）付、

殿様御玄關迄、御送被遊之、

但、御覽中御菓子不差上、御茶計、且、御覽所御椽側に蒲葎引之、各共壹人御椽側に罷

出居候事、

一業順帳、左之通り、

寶藏院當流鎌術

實參請立

元贅請立

安政五年三月朔日

寶藏院流鎌術

安政五年三月朔日

永井權作

高橋賢兵衛

五本替請立

高橋賢兵衛

鹿子田荒尾

仕合

川木鋗五郎

深澤庄作

渥美加六

永井權作

一旨流早鏡

表打太刀

樋口源左衛門

一二

川木鋗五郎

谷貝勇馬

仕合

渥美加六

谷貝勇馬

川木鋗五郎

深澤庄作

仕合

高橋賢兵衛

深澤庄作

川木鋗五郎

永井權作

三本鎗合打太刀

長畑十作

厚木岩尾

五本長刀打太刀

深井鎮平

明石仲之丞

入身

上條與一兵衛

明石仲之丞

山口左右吉

鐘捲外他流

天狗性表討太刀

明石登

堀行造

九學裏討太刀

堀行造

安政五年三月朔日

井内源右衛門

入身

山口左右吉

樋口源左衛門

厚木岩尾

入身

深井鎮平

長畑十作

樋口源左衛門

五段切表討太刀

吉田一之進

大藤善次郎

打合

大藤善次郎

一三

鐘捲流

安政五年三月朔日

蒲生藤兵衛

仕合

行田助之丞

藤井啓次郎

仕合

保田治兵衛

芳賀兔毛

同

印東小平太

明石登

當流兵法

表討太刀

清野治太夫

高島平作

非討太刀

一四

吉田一之進

同

廣田捨三郎

蒲生藤兵衛

同

渡邊仲多

黑田祝兵衛

同

平野十太夫

猿木小十郎

同

三上彦市

高島平作

平野十太夫

同

平野十太夫

高島平作

三上彦市

安光流立合

表打太刀

大島守右衛門

井山鎮平

十文字留身

井山鎮平

大島熟

早川萬造

大島守右衛門

同

大島守右衛門

同

川崎佐太郎

安政五年三月朔日

一五

安光流

兵法

安政五年三月朔日

大 畠 熟

井 山 鎮 平

片 平 小 膳

正釵留身

片 平 小 膳

早 川 萬 造

弘流

弘流釵術

表組打太刀

比留川 彦九郎

野 島 荒 之 助

同寸

鷺 田 太 次 郎

瀨 谷 三 郎 治

同

一六

片 平 小 膳

川 崎 佐 太 郎

早 川 萬 造

同

同寸

梅 津 與 次 郎

野 島 善 之 進

同引入

比留川 彦九郎

本 間 錦 太 郎

同寸

野 島 荒 之 助

比留川 彦九郎

起倒流柔術

表段付請立

池 田 仲 介

有 賀 眞 吾

起倒流柔術

甲冑取着儀

兩勝形請立

安 藤 準 介

池 田 仲 介

兩勝勝負口

大 久 保 才 記

佐 野 銀 平

同

奥 津 勝 平

筒 井 尉 之 介

貳人取

心勝形請立

奥 津 勝 平

秋 山 權 平

同

安 藤 準 介

池 田 仲 介

同

安政五年三月朔日

一七

安政五年三月朔日

有賀真吾
秋山權平

秋山傳太夫

有賀真吾
池田仲介

御所望之分

寶藏院當流鎌術

仕合

高橋賢兵衛直鑓

谷貝勇馬直鑓

深澤庄作

渥美加六

川木綱五郎

川木綱五郎

坤段請立

鹿子田荒尾

高橋賢兵衛

一旨流早鑓

入身

入身

上條直兵衛

深井鎮平

山口左右吉

樋口源左衛門

後鑓合打太刀

前鑓合打太刀

明石仲之丞

深井鎮平

山口左右吉

厚木岩尾

鐘捲外他流

仕合

仕合

渡邊仲多

東小平太

黒田祝兵衛

明石登

小太刀討太刀

蒲生藤兵衛

川石登

當流兵法

非討太刀

三上彦市

安政五年三月朔日

安政五年三月朔日

高 畠 平 作
平 野 十 太 夫

安光流立合

十文字留身

井 山 鎮 平

早 川 萬 造

死合姿

大 畠 守 右 衛 門

井 山 鎮 平

川 崎 銀 太 郎

起倒流柔術

兩勝勝負口

池 田 仲 介
秋 山 權 平

氣力間

秋 山 傳 太 夫

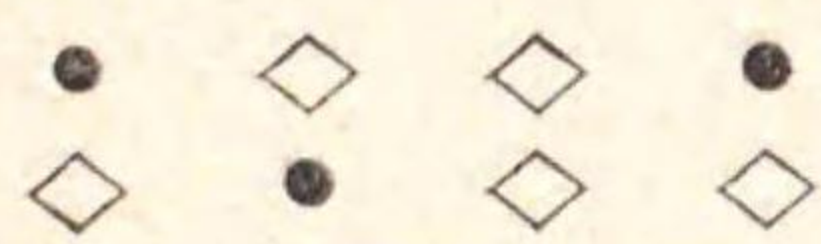
秋 山 權 平

高島流小筒

高嶋流小筒手前

一 ●
五寸角

●
八寸角



安政五年三月朔日

正釵留身

片 平 小 膳

早 川 萬 造

同

有 賀 眞 吾
安 藤 準 介

教師

明 石 仲 之 丞

岩 倉 鐵 三 郎

岩 倉 鐵 三 郎

岩 倉 鐵 三 郎

永 井 權 作

三 上 彦 市

山 口 左 右 吉

明 石 登

◇ ◇ ● ◇ ◇

深澤庄作
谷貝勇馬
有賀真吾
明石仲之丞

一右一統御出掛 御目見可被 仰付之處、御客様ニ付其義無之、各共詰所に諸流一席ツ、相招、左之通り申出之、

今日越前守様被爲入候付、業相勤一統太義思召候、至極業柄出來方宜、

御満足 思召候段、被成下 御意候、

一諸流師元を始、業相勤候面々に、以 思召御餅菓子被下置之、其段相招申聞之、

右兩様御禮謁、各以小納戸申上之、

一業相勤候面々、番頭詰所并御料理之間參上之間、御勝手座敷下之間屏風仕切一流ッ、休息所申付、諸流兼刀番足輕兩人差出之、

一御勝手座敷通庭に陣張申付、業相勤候面々、右場所ニ有支度致し、同所路次口ニ罷出、御廣庭幕張内ニ罷在、順々罷出、業相勤之、尤出掛平伏致候様申聞之、

一師元并師元代り 御目通に罷出不及旨、搦鍵等持出候義、業相勤候者計、餘人不能出様嚴敷申聞之、

一右ニ付、幕張入念申付、覗き不申様、立番足輕兩人路次口に差出置、人別相改、操入之、

一右ニ付、元御廐稽古場御庭内覗き不申様、立番足輕兩人差出之、

一越前守様御供頭、御供士、御勝手座敷上之間、中之間仕切相通し、鮮被下之、御取次罷出、及挨拶候、

一右御同方様御步行以上、同心之間に相通し、鮮被下之、御步行目付罷出、及挨拶、

一其外下供之者、向番所に下宿申付之、

一御同方様御側御用人中根鞞負、爲伺 御機嫌參上、御勝手座敷上之間に相通し、茶・多葉

粉盆差出之、山田辰輔罷出、及挨拶、已後思召を以、諸流業拜見被 仰付、右御場所に横

目坊主案内申付、御覽所御後之方に罷出、相濟、於御勝手座敷鮮被下置之、燒物付懸合之

支度被下之、山田辰輔・永山外記罷出、及挨拶、

一同御供頭・御供士に右同斷、拜見被 仰付、御庭内に陣張出來申付、同所へ横目坊主案内

ニ有罷出、拜見被 仰付之、

一老中好田筑後・年寄山田辰輔、越前守様被爲召、罷出ル、尤、辰輔義老御覽所御後之方に

罷出、拜見被 仰付之、

但、筑後義ハ、諸術御覽相濟候後、被爲召、罷出ル、

一松越前守様に、今日御出被進候所何之御饗應等も無之、甚御失敬思召候、御歸座後、何之御障も不被成御座候哉、御様子被成御承知度、右御見舞御家來迄、各共奉札遣之、

三月二日、○中略、

一松越前守様々、昨日老御兼約ニ付、御出被進候所、緩々

御對顔、殊ニ種々御饗應被成進、御家來へも被下物有之候御禮被仰進之、御家來々各共迄以奉札來、

一松越前守様御側御用人中根鞞負參上、昨日爲伺

御機嫌參上仕候所、武術業前拜見被 仰付、且御懇之御意被成下候御禮謁、山田辰輔以小納戸、申上之、

一廣棧留袴地一下ッ、起倒流師範秋山傳太夫・西洋流師範岩倉鏡三郎に、松越前守様々昨日御出、武術御覽之節、業前出來方宜候ニ付被下之、銘々相招、達之、御禮謁各、

一饅頭六百、寶藏院・一旨流外他流・當流・安光流・弘流・起倒流・西洋流、稽古人之内、昨日

慶永ヨリ川越藩士ノ武技ヲ試ミシ者ニ物ヲ贈ル

業相勤候面々に、

右御同方様々、右老昨日御出、武術御覽之節、業相勤候付被下之、夫々師元相招、達之、御禮師元并師元代謁各、

佐賀藩、長崎港外ニ於テ、曩ニ購入セシ飛雲丸ノ運轉ヲ試ム。

〔中牟田日記〕○佐賀藩海軍史所載

三月朔日、飛雲丸御船、初運用に付、早天より乗込、蘭人檢使等も參り、五ッ比より出帆、伊王島迄乘廻り、風止候に付、神崎前一泊致し候事、

三月二日、朝五ッ時比より碇を揚、神崎邊迄罷出候處、逆風故、無據碇を入れ、蘭人檢使等は歸り相成、右場所致一泊候事、

〔夏雲日記〕○佐賀藩海軍史所載

三月三日、神の島へ引舟手當相成、朝五ッ時頃、例の碇場所迄引入相成候て、夕刻木屋罷歸候事、

〔佐賀藩海軍史〕

正月十四日、近々殿様長崎御越の節、御取入れの飛雲丸にて、御番所其外御逸見被遊の旨、被仰出候に付、御番方へ其段達し相成候事、

飛雲丸ノ初運轉ヲ試ム

安政五年三月三日

三日^{卯巳} 皇妹和宮^{後親子} 内親王 雛滿ノ儀ヲ行フ。

〔和宮様御雛滿留〕

○橋本經子手留
靜寛院宮御日記所載

和宮御雛滿
祝ヲ行フ

安政五年午三月三日、和宮^{後親子}御雛滿御祝、昨年の所なから、御延引にて、今年あらせられ候、御前ひろに、御參 内にて、御所にて、御祝あらせられ候様御さたの所、地震にて、御延引、橋本家にて、此度はあらせられ候様仰進せられ候、

御所ヨリ御
雛ヲ賜フ

三月朔日、御所より御雛壹對、御そく體 御小直衣 壹對、御屏風 一双、右御拜領、杉原よこちらしの御文にて參る、准后^左を御内々思しめしむるにて、御小直衣御雛 壹對、進しられ候、御内々の御文にて、敏宮^左を御内々思しめしむるにて、御直衣五寸 壹對、進しられ候、御内々御文にて、大^{中山經子}すける御はしめより御人形一箱、御臺ひはち壹對、進しられ候、小御人形一箱、橋本宰相中將殿より、中御人形一箱、同お静殿 大夫殿^{橋本實孝}より、小御人形、壽性より、八寸御かり衣御雛壹對、かく影^藤、御金燭 壹對、藤^{土御門藤子}御ちより、御雛御菓子一臺、おみね始より、今日、御雛へ御なりの御膳參る、御所^左を御廻しなり、准后^左を例の御通り、御雛へ 御まき物 御まな一折進しられ候、おちこ人形御使に參る、

御所ヨリ料
理ヲ賜フ

三日、御所より御雛に付、御よせ肴一折 五しゆ御拜領、准后^左より 御よせ肴一

折 三しゆ進しられ候、御所^左を御節句御祝儀仰進しられ、例の御通り、御きぬ御なか御拜領、准后^左より御文斗、敏宮^左より御口上使、和宮^左を例の御通り仰入れられ候、御所へ御雛に付、御よせさかな一折 五しゆ上られ候、准后^左へ御よせ肴一折 三しゆ進しられ候、敏宮^左へ 御よせ肴一折 三しゆ進しられ候、大^{中山經子}すける御始へ御硯ふた肴大一ツ、右^左の宮を御設なり、宮^左に御膳御一通り、こわく御 御重肴にて御祝酒參る、御先つけ 橋本家一とうに こわく御御重さかなにて御祝酒、外^二御鉢さかな三ツ、右の通り進しられ候、右^左の例年の御通り、御所より廻る、御雛^左へも、御節句の御せむ廻る、今日、御雛の御祝につき、御所三仲間三かしらめて度めされ候、申刻比^左參る、右に付、御所より宰相中將殿はしめへ生つくり一臺拜領、宮^左へ三仲間かしらより御臺さかな上申され候、あかへ右京大夫^{關池公卿}參る、宮^左を御對面成、御賑々しく御一こん下され候、橋本家一とう御相伴なり、御いとまの節、金百疋つゝ三かしらに下され候、宰相中將殿・かく影より御禮さかな一ツ御あつもの贈る、右^左今日のもたなしなり、

十二日、御雛に付、大^{中山經子}すける御始へ御雛壹對つゝ進しられ候所、これ迄あらせられ候御雛を御焼失にて、御かすもあらせられずま、此度は御かた斗に、御三頭^左へ御相談の

安政五年三月三日

二七

二六

和宮ヨリ御
雛ヲ橋本家
其他ニ賜フ

安政五年三月三日

二八

上にて、御一とうは御やめと御さしつなから、あまり御さひしく御あいそうあらせられ
すまゝ、御三頭を伊よ殿へ御雛を壹對つゝ進しられ候、御袍御雛壹對、御帖御膳
の具添、大すけをへ御小直衣 壹對、同斷添折、大すけをに 次郎右衛門壹對、同
斷添、長橋をへ (高野房子) 次郎右衛門壹對、同斷添、伊世殿へ御人形一箱つゝ、宰相中將 大
御乳人 (押小路甫子) 越後殿 (鴨野照子) する河とのに (生島朝子) かふしの御人形、御箱へなし、(鴨野照子) のと殿へ右の通り進
しられ候、藤御ち事御使に參る、御直衣御雛壹對、かく影へ 御帖御膳の具添、次郎
右衛門壹對、橋本お静殿へ 同斷添、御人形一箱、東坊城おあい殿へ 御袍御雛壹
對、御帖御膳具添、藤御乳に 小御人形箱なし一つつゝ、三仲間三頭に 小御人形
箱なし一つつゝ、みね始へ 小御人形一箱、壽性へ 御人形一箱、大御七高階安藝 (經世)
守へ 御七に下され候御人形へ、御所より御廻しに相成候、もつとも御有合に御よろし
き御人形あらせられぬ故なり、御用掛に下されなし、御節句を御拜領の御まな、御
用掛始へ下され候、

〔土山武宗和宮様御用掛記〕

○京都府立
書館所蔵本

二月十九日、

一御雛用茶碗貳組・三方貳膳・帖貳帖、藤御乳申出、下掛りに申渡、○中略

上巳祝儀獻
上

晦日、

一來月三日、上巳御祝儀御獻上被爲進等如例、并觀行院殿以下御里方、并御用掛以下御祝御
酒被下取計之儀、尾張へ申入、御祝被下昨年方減有之を付、書付出ス、

- | | | | |
|-------|-----|--------|----|
| 觀行院殿始 | 御七方 | 御伽 | 六人 |
| 御用掛り | 一人 | 非常附御使番 | 二人 |
| 御醫 | 拾壹人 | 下掛り | 二人 |
| 預り | 二人 | 仕丁 | 四人 |
| 仲居 | 二人 | 下部 | 一人 |
| 御里年寄始 | 八人 | | |

一當年御雛滿を付、來月三日御交肴御獻上御同濟之由、御品取計候様、藤御乳ヲ以申出、右
取計之儀、尾張ヲ以申入、
一御雛滿を付、來月三日、三仲間頭々被心得候間、藤御乳ヲ以申出、被下御肴之儀、藤御乳
申談、用意之儀、下掛り與四郎に申渡、○中略
三月二日、
一參上、

安政五年三月三日

二九

一 明三日、准后様へ、昨年之通、御交肴御精進交五種被爲進候旨、藤御乳申出、右御品取計之儀、尾張へ申入、

一 和宮様御雛満こ付、

准后様

敏宮様か、御雛一對宛、被爲進候様被仰進こ付、明日御交肴御精進交五種一折宛、被爲進候様、奥か尾張ヲ以御申出こ付、

准后様に、被爲進御品取計之儀、尾張に頼置、藤御乳ヲ以申上、

敏宮様へ、被爲進御品用意之儀、下掛りへ申渡、

一 御所より御雛貳對被爲進、

准后様

敏宮様か、御雛壹對宛被爲進、觀行院殿か、御雛壹對獻上有之旨、藤御乳申聞有之、

朔日事、

一 御雛茶碗四組・三方四膳・疊四帖上候様、藤御乳申出、下掛りへ申渡、取寄上ル、且御皿

拾・御盃貳・御猪口貳・雛干菓子品々、是又前同斷、

三日、

一 當日御祝詞、藤御乳ヲ以申上、

一 菱餅 一臺獻上

一 干鯛 一箱

右、上巳御祝儀御獻上、御使武宗相勤、御文箱申出、奥へ尾張ヲ以上ル、御祝酒・吸物・臺肴被下、御禮當番へ申上、御返事被出、藤御乳ヲ以上ル、

一 御交肴五種

右御雛満こ付、御祝儀御獻上、御使非常附御使番、

一 御重詰雛小倉野 百六拾、同草の玉子 貳百五拾、

右、御獻上如例、御品尾張取計、御賄へ御頼こ相成、

一 雛干鯛箱、同昆布箱、同大樽一荷、御獻上如例、

准后様

敏宮様に

右、當日御祝儀御口上、御使非常附御使番相勤、

一同上、

御交肴一折宛、五種宛、御文箱添、

安政五年三月三日

三二

右御雛滿御祝儀被爲進、御使非常附御使番、

但、准后様一折に之、御交肴三種前段例之通被爲進、

一同上、

御雛用
二種一荷宛、被爲進、如例、

一宮様夕御膳、例之通 御所方相廻ル、御祝も同斷、

一御交肴五種一折

右 御所方被爲進、

一御交肴 二折

右 准后様方被爲進、

一御祝赤飯・御酒・臺肴・鉢肴五種被下、藤御乳ヲ以御禮申上、閑合御醫・高階典藥少允・山口薩摩守・山科加賀守等(元御)にも、前同斷被下、右何レも、御所方相廻被下、

一觀行院殿始六方、赤飯、大盛一折敷、重肴、鉢肴三・鯛一對、橋本殿・年寄始五人、赤飯同斷、臺肴・鯛一對、藤御乳始五人、赤飯同斷、鉢肴三・臺肴・鯛一對、御使番二人、赤飯同斷、御酒・

臺肴、下掛り・預り・仕丁・中居・下部等、赤飯一包ツ、肴・鯛、御酒無之、宮様ニ取計被下、

右之通被下、御所方相廻ル、

御雛飾拜見

但、橋本殿雜掌へ、赤飯・臺肴・御酒等、取計相廻ス、

一御所方、生作り壹臺、橋本宰相中將殿始へ被下候由之、

一御雛御飾拜見候様、藤御乳ヲ以御申出、御場所へ參り拜見、非常附御使番も拜見候事、

一鯛一尾、鱸一尾、魴鯉五、海老貳、

右御拜領御肴之由、御用掛り以下下々迄、頂戴候様藤御乳ヲ以御申出、御禮、同人ヲ以申上、夫々配當頂戴、

一御硯蓋肴五種むくい 巻いッ うま板 椎茸 うど

右、典侍殿御始、女中方一同へ被下、

但、例年御雛硯蓋凡臺八寸計リ、こる被下之處、御雛滿こ付、右硯蓋肴こる被下、

一御臺盛肴凡臺八寸計リ、 鯉生作り 海老 生貝 里芋 うど ーそ

右、御世話東坊城殿に被下、御文箱下使之、

但、關白不參之、

一同上、

右 敏宮様方被爲進、

一御硯蓋肴五種 御鉢肴三鯛作り 切替も 吸物鯉赤さし 同松露すまゝ すすり芋一鉢 心こり

安政五年三月三日

三三

安政五年三月三日

三四

一鉢、右何レも凡十五人前、
 右何レ後奥へ上ル、
 一さばき夢も、凡貳十人前、是を御内中へ被下、
 一御雛御膳を、朔日・今日 御立之日等、都る 御所を相廻如例、
 一御所を、おろかへ、右京大夫申廻比を參ル、御酒・御肴等被下、湯漬も被下、臺之物獻上之
 由之、子半廻比歸り、御菓子たままん五拾、
 一御酒肴被下、亥廻過退出、
 一橋本殿雜掌以下に、
 御上り合御肴三種被下、
 一何つ物著しきゆりね 酢物赤貝 鯛煎上 生貝生う酢 右御有合こる臨期出來、奥上り、
 四日、
 一昨日御祝儀無御滯被爲濟候恐悅、藤御乳ヲ以申上、○中略、
 七日、
 一御雛滿を付、被下を相成御雛、對、
 御所を御廻しを相成候旨、御匙へ被下候御人形も御廻しを相成、右御箱、桐こる申付候

様、藤御乳申出、下掛に申渡、○中略

十九日、

一○中略、御雛滿御入用等、取調差出候様、過日下掛り被申渡、傳次郎が書付差出、○中略、
 御雛滿御入用
 銀五百八拾七匁余

内

百五拾目余 御獻上物 御賄渡

四百三拾七匁余 賣人渡

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

三月三日、己卯、雨、上巳佳節、幸甚々々、退出之次、申上當賀、次、殿下・大閣・准后等參上、
 同上、西園寺亭向、又同上、八條・東坊城等同、今日 和宮御雛滿御祝を付、予・靜子・實梁等、
 人形一箱ッ、獻上、賜御祝酒、又召内女房、三仲頭、但二人參上、賜御祝酒、子斜事了、今日實梁鬮鷄、三羽、
 令獻上如例、又今日 和宮御祝を付、從禁中内々賜御肴、御臺之物、

〔雅俗日簿〕○山科書成日記 宮内省圖書寮所藏本

二月三十日、晴、○中略

安政五年三月三日

三五

和宮御雛滿
祝

安政五年三月三日

三六

御難調進

一自禁中雖被召設、未廻可參云々、依所勞不參了、(山科書細)少將參番宿令番代退出云々、退出之後、語云、今日予御用召之儀、全躰ハ、予少將等雖可被召、少將參番之由故、別段不被召云々、其儀、今度新調御難、和宮、被進御料云々、束帶衣紋、予少將等兩人申合、於御前、可奉仕、叡慮之由、然處、予不參之間、少將一身可令奉仕、議奏万里小路亞相被示云々、且於御前難令奉仕、不便ニ被存、自御内儀申下、於御學問^(マ)間令奉仕云々、万里小路亞相并兒等、手傳云々、紺地平緒、蒔繪太刀云々、裾、雛頭ニ取置云々、於雌雛ハ、於御内義、衣裳女房衆被着云々、雄雛計令奉仕云々、

〔中山續子日記〕

三月三日、

御き嫌よく參賀御對面、御すゑ御さうは、近衛左府を御小座敷まで、御對面よると此御間、御夕御膳後、またくめし、せうきいけいこ、七ッ過ふ仰出され、くれくこ濟、局もいさ御覽ニ成、夜ニ入御一覽まで、入御、今年和宮を御むるあきて、こなたを、御さいこう此五ツきぬ御をしあきと、出來合の御ひるあと二對進しぬ、こなたへを、御よせさの折一折、毎も此御重組も上ぬ、

和宮ニ御難進上

○附録

〔議奏徳大寺公純通達〕

○内閣記録所蔵本
武家書翰往來所載

○二月二十四日禁裏附大久保忠良等へ

來廿九日未廻、和宮御參被 仰出候、仍爲心得申入候、以上、

二月廿四日

大久保 大隅 守殿

郡 筑 駿 河 守殿

徳大寺 大納言

〔議奏久我建通通達〕

○武家書翰
往來所載

○二月二十七日大久保忠良等へ

來廿九日 和宮御參 内御延引被 仰出候、仍爲心得申入候、以上、

二月廿七日

大久保 大隅 守殿

郡 筑 駿 河 守殿

久我 大納言

〔土山武宗和宮御用掛記〕

○京都府立
書館所蔵本

二月廿四日、

一來廿九日未廻、

和宮様御參 内被 仰出候旨、同役當番方以書面申來、則出仕右被 仰出候儀、傳奏月番雜掌へ以書面申達、

宮様ニ參上藤御乳ヲ以申上、御献上以下如例取計候様、同人ヲ以申出、

御醫供奉表使ヲ以、奥へ相伺候處、御七御斷ニ付、中山攝津守へ被 仰付旨、御申出ニ付、以書面申達、御醫筆頭も、

安政五年三月三日

三七

和宮參内御延引

安政五年三月三日

右之段直達致度、以書面申達、

右宮様へ申上、御參 内ニ付、御献上之儀、尾張ヲ以相伺候處、例之通五種御交看御献上有之様申出、取計之儀、尾張へ頼置、女中方ニ被下物之儀、尾張へ申入候處、猶承合可返答旨申聞、右藤御乳へ申入、

一御參 内被 仰出候ニ付、例之通取計候様、御世話東坊城殿雜掌方、書面ヲ以申來、

一御參 内被 仰出、修理職・番頭・仕丁頭ニ申渡、下掛りにも申渡、供奉書付番頭方差出、

廿七日、

一來ル廿九日、
和宮様御參 内御延引被 仰出候旨、同役當番方以書面申來、則參上申上、出仕修理職・番頭・仕丁頭・下掛等へ申渡、傳奏月番へ以書面申入、供奉御醫、并御醫筆頭へ以書面申達、御世話東坊城殿御面會御延引之儀被仰渡、尾張へも申入、

〔橋本實麗日記〕

○東京帝國大學藏本

二月廿四日、庚午、雨、○中

來廿九日未起、和宮御參被仰出之旨、從議卿 建通卿 被示了、御世話卿同上被示了、

廿七日、癸酉、小雨、○中

從議卿 公純卿 御世話卿等、來廿九日未起、和宮御參之事、御延引之旨、以書狀被示了、

議奏久我建通 權大納言 外交措置ニ關スル廟議ノ因循ヲ慨シ、上書シテ職ヲ

辭セシコトヲ請フ。十六日、慰諭シテ之ヲ留ム。

〔議奏久我建通願書〕

○維新史料編纂會所藏本
伏見宮侍御牧家監留所藏

○三月三日武家傳奏へ

〔朱書〕
午三月三日、久我大納言殿辭表、

一昨年來、依病再三御役辭退之事歎願候處、厚蒙

仰、深恐奉存候、實ニ暗愚之質恐懼之至ニ候、然処、今度之事不容易儀、柔弱之身中々思慮之不及所ニ候、此節又候願上候も恐入奉存候得共、方今之御所置因循苟且之姿ニ相見エ、廟算も義理明白之辺、如何被爲在候哉、見融シ付兼候、誠ニ天下之安危存亡、人心不折合ニ至候も此時と奉存候、如此重大之御用向、微力之身日夜心配且嘆息仕候、何卒此度と、是非共議奏御役申度奉存候、決る及此時安逸之志ニ無之、退役候も報國之心底如鐵石候、何分行末之見込無覺束存候間、誠ニ嚴重之御役、虛位ニ相成候も深恐入奉存候、偏ニ以

御憐愍、退役之儀願度存候、速ニ被 許候ハ、此上之鴻恩不堪感泣候、此上恐入候得共、辭退被 聞召候ハ、以中山大納言忠能卿、議 奏之列ニ被 仰付候ハ、急度御用ニ立可申候、此儀も伏る奉願候、何卒此旨宜預御沙汰候之、

三月三日

建 通

傳 奏 宛

安政五年三月三日

三九

外交措置因
循廟算義理
明白ナラズ

議奏ヲ辭セ
ント請フ

中山忠能ヲ
議奏ニ推舉
ス

安政五年三月三日

四〇

○次ニ掲グル久我建通辭職ノ願書ニハ、中山忠能ヲ議奏ニ推舉ノコトヲ載セズ。後勁槐記(廣橋光成日記)三月三日ノ記事ニヨリ考フレバ、此ノ文面ニ就キ問題ヲ生シ、或ハ訂正セシニ非ズヤト思ハル。參考ノタメ附記ス。

〔議奏久我建通願書〕

○宮内省圖書寮所藏本
尙忠公記所載

○三月三日武家傳奏へ

一 昨年來、依病再三御役辭退之事歎願候處、厚蒙

仰、深恐入奉存候、實ニ暗昧之質恐懼之至候、然處、今度之事不容易儀、柔弱之身中々思慮之不及處ニ候、此時節又々願上候モ恐入奉存候得共、方今之御所置因循苟且之姿ニ相見

江、廟算モ義理明白之邊、如何被爲在候哉ト、見融シ附兼候、誠ニ天下之安危存亡、人心之不振

ニ至候モ此時ト奉存、如此重大之御用向、微力之身日夜心配且歎息仕候、何卒此度者、是非共議奏御役辭申度奉存候、決而及此時安逸之志ニ而者無之、退役候テモ報國之心底ハ如鐵石候、何分行末之見込無覺束存候間、殊ニ嚴重之御役、虛位ニ相成候モ深恐入奉存候、偏ニ

以 御憐愍、退役之義願度奉存候、速ニ被

許候ハ、此上之

鴻恩不堪感泣候、伏奉願候、何卒宜預御沙汰候也、

三月三日

建 通

廣橋前大納言殿

前菅大納言殿

〔德大寺公純日記〕

○臨時帝室編
修局所藏本

三月二日、雨下、

一 内府行向、有示談事、其後歸華、

一 權(久我建通、願書)亞相御役辭退邊之事、有談、

三日、雨下、

一 早朝久我亭行向、說話了、今朝辭退被附于廣橋云々、○中

一 左府・内府召 御前、公純・万里小路等同上、○中

六日、雨下、

一 當番參 朝巳斜、

一 久我辭退一紙、有披露、

安政五年三月三日

四一

久我建通辭
表ヲ廣橋光
成ニ提出ス

安政五年三月三日

四二

七日、晴、○中略

一 中山亞相、加勢被仰出了、

一 入夜召御前、万殿 公純、○中略

十一日、雨下、

一 右府亭行向、有示談事、

一 殿下參入、

一 久我大將一件、有談話事、○中略

十二日、陰、○中略

一 巳斜出門、權亞相亭行向、其後參朝、戌刻許退出、○中略

十六日、晴、○中略

一 久我以狀、異船一件有談、久我押て出仕被仰下了、

十七日、晴、○中略

一 子半許久我入來、有要談事、

〔後勁槐記〕○廣橋光成日記
孝明天皇紀所載

三月三日、參殿下、申次鹽小路今朝久我亞相議奏辭退之願書被差出、九條尚忠卿曰殿下ニハ御留ニ候得共、何

建通辭表文
面ニ如何ト
思ハル、所
アリ

レニ願度旨被示、右願書一覽候處、文面之中如何哉ト存候所有之候故、得ト本人之趣意相尋候上、可入内覽候、若自他被聞召、ムサト抑留ニテ、不内覽様ニ相成候テハ恐入候間、此段申上置、○中略後刻久我へ書狀、今朝被差出候一紙得ト一覽候、明日ニテモ被參朝候ハ、一應面會之上、可入内覽旨申遣了、風邪不參、兩三日ハ不能參仕旨被答了、

六日、建通卿退役願書披露、

七日、議奏御無人ニ付、中山大納言加勢、久我永斷

十六日、久我出仕之事、此節御用多御時節、被召止候旨、殿下被仰傳、武傳へ被申渡、

○本書中「右願書一覽候處、文面之中如何哉ト存候所有之候」トアルハ、中山忠能ヲ議奏ノ跡役ニ推舉ノコトヲ指ス。

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本
中山忠能履歷資料所載

三月三日、

建通辭役差出、予ヲ舉申由ノ事、

十六日、建通卿へ、忠能奉仰行向、辭退之趣意ハ尤ニ思召候得共、此頃ハ、一件ニ付、三公

モ度々參集、御時節柄故、何分早々可有出仕、御沙汰之旨、殿下傳仰ニ候、即日出仕、

〔璞記〕○一條忠香日記
宮内省圖書寮所藏本

安政五年三月三日

四三

建通ノ辭職
ヲ抑留ス

安政五年三月三日

三月十六日、壬辰、○中略

久我大納言今日ヨリ出仕朝參、所意書モ被出候様子也、

〔中山續子日記〕

三月十六日、

御かり床、いし伺有、弥御よろ敷、御々し被遊候、關白互御參り、御小座敷にて御對めん成、

〔庭田嗣子心托得る〕○伯耆庭田重行所藏本

三月十六日、

御くり床、一寸御くし被遊候、關白互御參り、御小座敷にて御あいめん成、久我殿儀奏御役

召と、めりて、今日御出勤の由、

〔平安戊午光景記〕○維新史料編纂會所藏本

一久我様、三月三日、御病氣にて御退役御願被成候處、三月十六日、出仕被成、其後今度一

件にて御繁勤之由、

○參考

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本

二月廿四日、參番中、

建通留任

忠能ノ傳奏
加勢任命ヲ
取消ス

武傳光成卿、壽長卿ハ依正忠能參、於議卿役所、光成卿被申渡候、亞米利加國一件ニ付、備中守上京彼是不容易事件ニ付、

右御用多、武傳加勢被 仰下旨也、忠能申云、愚昧之質、不容易御用被 仰付、甚以恐入候間、御理申上度由申入處、被定

天氣之上ハ、直御受可然由、重被示、右之上ハ、不及是非申御受之旨、在大將殿御參申屆申、

一久我被示之旨有之、兩役ハ御用ニ預之旨、但多議卿ハ上三人之旨、被示之、

一及夕、於同所、同卿更示云、先時申渡、加勢之事、光成全承違之儀有之ニ付、不申渡分ニ可心得、被示之、承之旨申了、

此事件、輕卒之至、 朝政以之可知之、但當時之形勢、不如非居要路、於停止ハ予本懷也、唯 朝議之龜忽、可救世

也、

廿五日、依命向久我家、昨日時宜内話有之、一昨兩役行向廣、久徳之處、東坊違兼約、以表向之儀、爲内談之取計有之、

逆鱗、殿下同大怒、依之止出仕、忠能可爲加勢殿命申渡濟之處、太閣へモ無御沙汰、且東坊城先年加勢之時、武邊打合セ

有之由心付、宥御沙汰、間違之分取計ト云々、一笑々々、以不談勢利爲樂、以寵辱不驚爲樂、一予赤心漸露顯云々、

鷹司家侍講三國大學直準○福井藩士中根靱負師質○二、大將軍繼嗣問題ニ

關スル京地ノ情勢ヲ報ズ。尋テ日十八福井藩主松平慶永越前守書ヲ大學ニ與

へ、一橋家主徳川慶喜刑部卿ノ擁立ニ斡旋センコトヲ望ム。

〔鷹司家侍講三國大學書翰〕○昨夢紀事所載

○三月三日福井藩士中根靱負宛

桃花之佳節奉敬祝候、先以

君侯益御機嫌克恐悅不斜候、次ニ貴所様彌御壯實被成御勤務奉南山候、然ハ、先月廿八日、

安政五年三月三日

近藤了介二
面晤

呈一書候、定る此節ハ相違、夫々御承引可被成下と奉存候、然處、此度近藤了介子上京、一(編者註)昨夜森賢次郎を以面會之義被頼越、昨二日、遂晤言候處、同人事ハ、横山生と違ひ、貴藩細(續)作タル事分明、且君侯之思召、

天朝御崇奉之御次第篤承之、不堪雀躍、漸述愚衷掛候得共、畢竟之處ハ、矢張横山生申處と同一ニ飯し、全彼阿蘭甲比丹申立候趣意ニ相合候様相見得、一向不得其意、猶隔靴の搔痒之爲思候、依之能々熟考候處、初る心付候儀有之候得共、近藤氏へ可申譯柄も無之ニ付、乍恐再述鄙言候、抑

一橋君を以て、

西御丸ニ御立被成、薩州より陽明府云々之始末、元來君侯も、御加談の御一人と承り及候、左候へハ、右御一條御成就迄ハ、平穩之御處置被爲在候儀必然之御勢かと存上候、既ニ正月下旬、水府老公々、太閤殿へ御文通之次第も、結歸スル處、横山生申居候御趣意と同轍ニ奉窺候、至此る疑團氷釋、今日迄、右氣付不申事、小生之闇劣、今更慚愧之至奉存候、扱就夫極内申上度儀有之候、其譯は右之御一條、既ニ堀候も略承伏之義故、速ニ其場ニ相運ひ候筈之處、無其儀、是全一片之浮雲障得致候故に御坐候、其障得を拂去候上策は不乏候得共、

一橋慶喜ヲ
將軍繼嗣ニ
擁立ノ件

慶永ノ意見
ニ從ヒ斡旋
セシ

君侯之思召不承候るは、手出し難致候、彌思召之處無御腹臆御發被下候ハ、乍不肖幾重凡粉骨仕度、猶又禁密之次第、御心得之一邊も可相成義、追々叩兩端可申上候、併右愚見相違有之候時は、甚以不敬之至、多罪難遁候得共、寔に生國之

舊君、且文武兼備英明之程、乍恐奉感戴候故、不顧恐愚蒙之赤心申述候義ニ御坐候、不惡御憐恕之程偏奉希上候、何卒不苦候ハ、此趣御取繕、一應御披露之程、伏る奉庶幾候、今也天朝之神威を不汚様、

幕府之根元を堅固とし、列侯一致不挾私心、内乱を未萌ニ消滅し、外夷之覬覦を一掃スルヲ、六十餘州之人物、孰其不欲之、僕亦大日本國之一裸蟲、杞人之憂不能忘、區々之盲見申上候義ニ御坐候、實ニ可恐ハ外夷之憂より、内乱之禍に有之候、不相替取急乱書御高免被下度、勿論御覽後火中奉願候、以上、

重三

直 準 拜

雪 江 君

坐 下

(橋本左内全集)

〔福井藩主〕松平慶永書翰

○橋本左内全集所載

○三月十八日三國大學宛

安政五年三月三日

安政五年三月三日

四八

先日來、家賴伊織(備末左内)より申談候通り、西城之義は、實に幕府之急務要策と存込候得共、以德川之家事、奉汚(讓司政通)殿下之清聽候も恐縮之次第故、是迄致猶豫居候へ共、近頃之風聞にては、南紀より執柄家へ先入有之候由、當今之御時節、右等之義により、萬一英明之獨梁卿(一浦俊信)を差置、此選外人に歸候ては、列藩之失望は不及申、乍恐皇國の御爲に不相成、於我等も、奉對天朝申譯無之仕合に可相運かと存付候故、不顧小嫌、愚衷并事情爲及陳啓候處、其許より小林筑州方へ被及談判、筑州方格別之厚意にて、早速配慮を被盡吳、殊に殿下御含に相成御沙汰に御坐候條、爲天下致恐悅候、今後は、何分殿下回天之御盡力を奉仰望候より外は無之候間、右南紀之先入を解候は勿論、所要獨梁公西城御養君に被成候様、我等報國之赤心、年來懇願之趣、無漏落御披露之程、尙又厚頼入存候、此頃外夷之御所置一條云々に付ても、此一策速に不相定候ては、衆論無所歸、難有 睿慮も疎外へは相達申間敷哉と、深重苦心致居候、尙小林筑州方へは、段々不一方御勞心之條、厚申謝給候様頼入存候、要事のみ早々、不具、

三月十八日

御名 御花押

二陳、時下保重是祈、扱追々前文之光景に相成候も、畢竟爲故國盡忠歎候條、殆拭感涙申候、不一、

將軍繼嗣問
題ニ就キ鷹
司太閤ノ幹
旋ヲ懇望ス

〔福井藩士〕中根靱負書翰事所歌

○三月十八日三國大學宛

本月重三之華書相達、反復拜誦、先以愈御安健爲神州御盛務之段、拊賀之至御坐候、來諭中、一片之浮雲遂々滿天ニ及ひ可申哉と縷々懇歎、和魂奮勵之至論ハ不及申、爲故國舊君被盡誠赤候條、早速清聽にも相達候處、感悅不啻候得共、一片之浮雲遂々滿天ニ及ひ可申哉と殊之外懸念ニある、一掃之運籌、賢兄を勞申度と被決、已ニ明日ハ、從此表、一价可被差出取調之處、豈圖らんや、今曉寅刻御添切紙ニある、桃井伊織方之一書相達、掲起挑燈て及披封候處、賢兄回天之力、無毫遺一掃之手段、已ニ垂成功之條々、具ニ狀陳有之、驚喜雀躍、拂曉臥内、草々呈覽之處、吾公之感慨喜亦不可言、紅旭未昇、窓紙猶暗シ、引燭把筆、忽裁一書、被投與賢兄、公之感謝紙上難罄候得共、粗無限之情を表し、併て今後之依頼を托候事候間、此段御亮察宜御執達之程所伏冀候、嗚呼

殿下之盛意ハ、恐多候得ハ措る不論、賢兄之和魂忠愛、筑州林氏之忠肝義膽、共是神州之正氣凛々と云へし、小臣之悦ひハ御付度を仰き申候、急便取調等多務粉亂不能詳悉、早々閣筆、

三月十八日辰中刻

雪江

安政五年三月三日

四九

一片ノ浮雲
滿天ニ及ブ

三國ノ周旋
ヲ謝ス

安政五年三月三日

三國老兄

〔三國大學書翰〕

○春繼文
庫所藏本

○三月二十一日福井藩士橋本左内宛

大急用御直覽、

然者、去る十八日辰半刻出、關東より唯今登着に付、豚兒一學へ爲持差上候、御落手可被下候、彼御直書有之候は、直に倅へ御渡可被下候、若又御他出御留守中に候得ば、右狀は持歸り候間、當方へ向早急御入來可被下候、以上、

三月廿一日午刻

三國

桃井様

〔三國大學書翰〕

○昨夢記
事所載

○三月二十一日中根靱負宛

去ル十八日之御染翰、今廿一日相達、再拜奉薰誦候、先以

清體倍御機嫌克被爲在候條、恐悅之至奉存候、偕へ、御紙上之趣、早速〔慶司致通〕大閣殿へ及披露候處、委細御承知相成、御尤之次第被存候、尤是迄も御疑念と申事ハ無之候得共、今日は彌以御確信御安堵相成候旨、御沙汰御座候、猶巨細ハ、別紙認置候間、此段宜御披

關東ヨリ早
便至ル

大閣ニ慶永
ノ趣意言上

五〇

露之程偏奉希候、先ハ右乍恐御請奉申上度如斯御坐候、誠々惶々、謹白、

三月廿一日

三國大學

中根靱負殿

直準〔花押〕

附啓、

小林筑前守へ御加筆被成下、早速申聞候處、大ニ難有狩、宜御禮奉申上度旨、私迄申出候、又御端書之趣、直準身取、何共可申上様も無之、冥加至極難有仕合奉存候、是亦乍恐宜御取繕御披露之程奉願候、

〔三國大學書翰〕

○橋本左内
全集所載

○三月二十二日中根靱負宛

十八日辰牌之貴書昨日二十一日午刻相達、忝拜見仕候、彌御清泰被成御勤奉壽候、然者、御書中段々の御稱揚唯縮入斗りに御座候、扱是迄の事情は、伊織○どのより夫々御承知可被下と奉存候、元來御直書無之内、大閣殿始め夫々申上候義、甚不當之義に御座候得共、櫻閣出立の跡に相成候ては、噫臍之後悔目前と奉存候事、且は伊織どの御密使の的證も相見へ候旁、不顧萬事、斷然果決及言上候處、

天日未墜地、徳川家御中興之前兆相顯れ候哉、存外御都合能相運び、速に經

安政五年三月三日

五一

繼嗣問題ノ
斡旋ニ着手

宸慮、遂に執柄家へ 太閤殿より御達に相成、櫻閣御暇之節、英傑、人望、年長の三件を以て、選舉可有之様被仰渡候事に御治定、誠に以て喜悅雀躍仕候得共、伊織子より被申上候義、

君侯御聞取如何可有之哉と掛念無量、夫故飛檄往返相濟候迄は、寢食も難安位に御座候處、昨日拜接玉章、歡天喜地、胸宇忽如洗、即刻參殿之處、折節太閤・右府兩公御對話中に付、御一緒に右御直書展覽被致候、兩公共急速之飛札往返驚感被致候、大に滿悅、早々直筆へ一通之寫を被命、直に陽明府へ被送進候、御本紙は手元に被留置候、何れ其内、可入

叡覽筈に御座候、右御使等萬端小林筑前相勤、即左府公にも、大に御安慮之趣に御座候、其譯は過日歌橋より 台命を借て 御臺所を動し、獨梁卿の事を支候様、陽明家へ御頼文通有之、其外浮雲搖動仕候處、今度

御直書之當着に付、筑前小生共勇氣百倍揮舌頭候處、 太閤殿より陽明府へ被仰進候は、當時御外戚之御續柄を以て申ても難被捨置、御養君と申も御孫君之事、別て天意飽迄 徳川家を篤被爲

思召、何れにも獨梁卿を以中興改革被爲遊度義に候得ば、早々御臺所へ御文通、右聖慮之次第、大樹公へも申上、又閣老中へも急速御相談有之様可被成旨、 太閤殿より小

慶永ノ書ヲ
太閤ヨリ天
覽ニ供セシ

慶喜擁立ニ
盡力ノコト

筑御使にて陽明府へ被申進、何れ一兩日の内には、右御狀御發しに可相成運びに御座候、又左大臣より執柄家へも御使にて、前文の次第被仰進、今日直に轉奏へ被申含、本能寺旅宿也へ行向申達候事に治定相成候、尤年長と申ては尾藩之嫌疑可有之哉に内評有之、此二字は相止み候筈、乍去英傑人望と申し候はゞ、何れ獨梁卿に限り可申候、且又、陽明府より

京都ノ運策
ハ是迄ナリ
此上ハ關東
ノ輕謀ヲ專
要トス

の御交通には、南紀杯の年少にては、逆も天慮に叶不申段、決然被仰進候事に相成居候、左候へば、當地之運策は是迄に御座候、其上は、錦地之御輕謀專要と乍恐奉存候、猶又、當地より箇様の仕向にも被成度と申義御座候はゞ、被仰聞被下度、幾重共全身の氣力を盡し苦慮仕見可申候、猶又、今日櫻閣の返答振等は、明便桃井より出狀の由に候間、同人迄密授可仕候、此書簡、昨日直に差立候積りに候得共、飛脚休日、其上今の次第も申上度、態々今日迄見合候儀に御座候、延緩之義、宜御憐恕被下度奉願候、先は前文之仕合御安心被遊候様、乍恐御披露願上候、

櫻閣一件、追々桃生迄申述候故、夫々御達と奉存候、彼黃白の私謀發露、縉紳・諸官人・非藏人迄、追々群起、連署之上表有之、其内八十八人の堂上は、内實血判も仕居候位、依之、遂に東坊城退役、都筑は頓歿、就夫、乘掛りの勢、矯弱過強之義も有之、種々紛亂如何と煩悶仕居候處、漸く一昨々夜評決、二十日堀閣・所司兩人、參

公卿連署血
判東坊城退
役都筑頓死

堀田ヲ小御
所ニ召シ朝
旨ヲ賜フ

安政五年三月三日

五四

内、小御所において、關白・三公・議奏・傳奏列座、關白沈黙、左府公より被渡候書付寫、左に、

墨夷之事

神州の大患、國家之安危に係り、誠に不容易、奉始 神宮御代々へ被爲對、恐多くも
思召、東照宮以來の良法を變革之儀は、闇國人心之歸向にも相拘り、永世安全難量、深
被惱

叡慮候、尤往事、下田開港の條約不容易之上、今度假條約之趣にては御國威難立被 思
召候上、諸臣群議にも、今度之條々殊に御國體に拘り、後患難測之由言上、猶三家以下諸
大名へも被下 台命、再應衆議の上、可有言上被仰出候事、

右之通りに御座候、扱夫より虎之間に移り、議奏・傳奏斗りにて、櫻閣・所司談話有之、櫻閣
何角歎願申出掛候得共、所印是を打消し引取申候、昨二十一日には、閣老より議傳を招請
候得共、議奏は堀閣を呼寄せ候了簡、夫に付、又々紛争有之候得共、程能申宥め、今日議二
人、傳一人、本能寺へ參り、堀閣願出候事を聞取候儀に御座候、今度は如何可相成哉、堀侯
も都筑之跡を追候事は好申間敷、されば逆、右之御書下け江府へ持歸り候事も如何有之
哉、朝議は確定不動六ヶ敷次第に御座候、何れ右御書下け、今度は列候へ觸出し無相達と

兩役堀田ノ
旅館ニ赴キ
意中ヲ聽ク

外國一件ノ
タメ繼嗣問
題延引ノ恐
アリ

奉存候、先般の次第には參不申候、唯々此一件に付、

西城延引に相成可申哉と、是のみ苦心仕居候、何卒亞夷一件に拘らず、獨梁卿御治定之程
祈斗りに御座候、又桃生より承候得ば、餘り御謙遜に過候様相見へ候、自然一條御發の節、
固辭被遊候時は、宮嬪付込之手段出來可申哉と、杞憂仕居候、此處宜御配慮之程、偏に奉希
上候、其外申上度事は如山に候得共、又々奔走之時節に相成、乍殘念閣筆候、

乍毎度、不暇淨書より失敬御免々々、
御覽後火中奉願候、

三月廿二日夕

大

學

雪 江 老 君

(昨夢紀事)

〔三國大學書翰〕○香嶽文
庫所藏本

○三月二十三日中根鞞負宛

昨夕、町便に呈一書候、如例繁雜、匆卒執筆、前後錯亂、定る御分り被成兼候哉と恥入候、扱
其後之次第、廿二日、本能寺にて、

傳曰、西城の事、英傑、人望、年長の三件を以て御選舉、早々御治定可有之様との、天意に御
座候、

但し、年長二字除き候筈之處、又々論判、尾の恐は無之、紀の恐甚くと申事にて、年長

傳奏ト堀田
ノ對話

安政五年三月三日

五五

二字相加り候事、

(堀田正勝、老中)
堀曰、難有奉畏候、此儀は關東にても承居候義に御座候、右は幸便に可申遣哉、急便にて可申遣哉奉伺候、

又曰、廿日に被仰付候義、早々持下り候筈に候得共、亞使より催促致候事必然故、甚た迷惑可仕と奉存候、依て右早々江戸へ申遣し、三家以下存寄爲書出可申候間、夫を御覽の上、和戦之二字、御聖斷被下度、左候へば、直様歸府、御聖斷取計可申候、但列候在國の者へ申遣候ては日間取可申、是は如何可仕哉奉伺候、右に付、御暇之義は不被仰付様奉願候、

廿三日、朝議、

○西城の事は、急便を以て可申遣事、

此一條、唯今治定に相成候、先々御安心可被下候、

在國大名へ申遣候事と、

御暇之事と、

此二箇條、何れ在國へも申遣候筈に可相成候、

御暇も願之通りに可相成様子に御座候、只今廷論最中なり、何れ夜に入り不申ては退出有間敷被存候、

朝議ト繼嗣
問題

右の通り早々御案内申上度、吳々西城一決難有事に御座候、何れ明廿四日、傳印より堀へ申達候間、明夕か廿五日には、飛脚出立可申と奉存候、先々御安慮可被下候、

此後之 聖斷申迄もなく候得共、縦ひ戦争に相成候共、開港開市は御差留なり、左候へば、戦に決し候より外無之候、何卒 君候にも、十分の御英斷、御上表所仰望に御座候、

一、ハルリス、蘭領事官と出合候御咄、桃井より承り候に付、一寸書出し候處、直に 朝議の席へ右書付相廻り、大に大果斷の一助に相成候、就夫何卒右應接之様子、御禮席も亞使と同異如何、何卒早々御聞取の上、早便爲御知被下度奉煩候、不思議の事にて、右御咄大に御間に合喜入候儀に御座候、先は右吉兆申上度如此御座候、頓首、

三月廿三日申刻

碌

々

雪 江 中 君

不相替亂書塗抹、御仁免可被下候、

○附 録

(福井藩士伴圭左衛門書翰) ○福本在內
全集所載

○三月十八日三國大學宛

安政五年三月三日

中根ノ書翰
落手ヲ報ズ

安政五年三月三日

五八

過刻は、辱貴墨候處、折節出勤留守中、只今歸宅拜見仕候に付、御報延緩御高恕可被下候、中根氏書簡御傳達正に落掌、御面倒恭奉謝候、書中之儀は、如仰一介書生之論、採用不致様之義而已御坐候、又如御察、君侯御赤心は、今度勅問に言上に相成候趣、左候へば、因循之御所置にては無之事奉恐察候、併右書狀は、八日出之處、矢張右様被申越候位にては、今度關東よりの御答は御承知無之事か、疑敷事に御坐候、尤委細は後便と申事に候間、小生上巳出之狀并貴所様之急報相違候上は、萬縷細答可有之と奉存候、先は右御請迄、草々不乙、

三月十八日

伴 圭 左 衛 門

三 國 大 學 様

尙々、御封箱還壁、御落掌可被下候、以上、

熊本藩主細川齊護越中守 老臣長岡監物是ノ軍備整頓・節儉勵行ニ盡瘁セシ功勞ヲ賞ス

〔熊本藩主細川齊護申渡〕○鄂築待次郎所藏本 郡築四郎記録所藏

○三月三日家老長岡監物へ

長 岡 監 物

長岡監物ニ
刀一振ヲ賜
フ

其方儀、平素節儉を用、組方に之親と厚、別る近年軍備筋ニ深心を用、武備之手當を初、家中之示方も行届候様子、尤之事ニ候、依之刀一腰遣之、

三月三日

〔安津免久佐〕○本田典所藏本

右御刀ハ、京國廣（イセ）ニ有、御拵ハ鯨鞘、御縁頭ハ後藤細工之鷹之御目貫、三所物之由、

〔小橋元雄手記〕○肥後藩國史史料所藏

○上、是容、感激、則ち歌を詠して曰く、

御劍を、身にさしそへて、つかの間も、わするへきかは、君の恵みを、

四日辰 高知藩主山内豊信土佐守 福井藩主松平慶永越前守ヲ訪ヒ、内大臣三條實萬ノ外交并ニ大將軍繼嗣ニ關スル建議案ニ對シ、豊信ノ實萬ニ致セシ答書控ヲ示シテ、互ニ意見ヲ交換ス

〔昨夢紀事〕

三月四日夕、土佐守殿御出ありて、先比三條殿（實德）御廻し有之前内府公（前一字寄カ）の建議に對し、昨日、御答書差出されし由にて、公へも御覽に入られ、猶御意見の程を被爲問、御書面左の如し、

先日呈密書候處、御獻策御内々御示、一々奉拜見候、御確論奉問然候處無之、尤其中ニケ條計心付候儘、左に申上候、

其一、已後無據被仰談候儀被爲在候ハ被仰遣、手輕ニ上洛可有之云々、此儀道理を以推候時ハ、君臣上下之分御座候上ハ、如何にも當然、且又、大猷（家光）・有徳（信吉）之如き、賢明之主にて手輕に上洛ハ宜敷御坐候得共、今之徳川家宿疾有之候ハ、雖三尺童子周知仕居候、然る

安政五年三月四日

五九

山内豊信來
訪三條實萬
ヘノ答書控
ヲ示ス

將軍上洛ヨ
リモ賢才建
儲ノコト急
務タルベシ

安政五年三月四日

六〇

處、已後、

朝廷 思召被爲在候時々、手輕ニ上洛被 仰出候るハ、自然諸侯之内ニモ、徳川家を輕侮仕候様ニ相成、難制ニ至可申、夫方ハ西城に賢才之方建儲之義、速ニ被仰出、依舊萬端關東に御任セ之方、皇國之御爲、却ル可然哉と奉存候、

但、建儲之義、閣下御建白中ニモ御坐候、

其二、御政事向、已後無御伏藏可被 仰遣、猶又、自關東も、無遠慮可有言上云々、

政令多門ニ出候ハ、一國之上ニ亦決不宜、況天下大政、暫時ハ啓沃之姿ニ候得共、不待數年、意外之大害生可申、是必然之勢に御坐候、

今上御英斷ニ有、一時御憤激之餘、右様之

政令多岐ハ
元弘ノ覆轍
ヲ踏マン

叡慮被爲在候共、縉紳輔佐之方、御遠慮被成候處と奉存候、此儀強ル被仰出候時ハ、殆元弘之朝に髣髴タルと奉存候、此條ハ陪隸之徒、殊に積惡之家、朝野所怨望、乘此時御中興之御志ニ有、天下と共に御征伐被爲在候上ハ、所謂摧朽挫枯之勢ニ可有御座候處、御艱難不少、是一旦 王權之武門に歸シ候弊ニ御坐候、積惡之陪隸ニ有、猶如此、當今徳川家邊事之處置、且御國體之大義を失候、其責ハ御坐候得共、積惡北條之如きニハ、決至リ

不申、又堂々源家ニ御坐候、幾重も御深戒不被爲在候るハ、一層大ナル困難生シ可申、後醍醐帝之御覆轍之御商鑑歟と、乍恐奉存候、

右、因循苟且之迂論ニ可有御坐候得共、四夷覬覦之折柄、禍亂内ニ生シ候時ハ、天下之御一大事ニ至可申、日夜苦心不得止、肺肝吐露仕候、區々之忠、不能緘黙、御海涵奉冀候、

公御熟覽之處、素より御同意之御事にて、京師の巨擘たる三條公へ、天下の御爲、如此切直に答諍し給へる土佐殿の盛意を、御感激ありて、猶時勢の歸する處なと、種々御討論ありて、更關けて、御退出なりき、

〔昨夢紀事〕

二月十三日、三條内府公御建策、内々御廻しニ相成由ニ有、土佐守殿方御覽に入れられたり、左に記して、縉紳家の識見を示す、

此一紙ハ、一策に書付試候迄にて、申出ハ不致候間、必々御秘し置可被下候、格別御精誠に感し、密々吐露之事に候、

墨夷申立之事件ニ、過日所存可申上旨蒙仰候ニ付、短才寡聞勘辨も無之、不束之儀申上

實萬ノ建策
ヲ豊信ヨリ
慶永ニ示ス

安政五年三月四日

六一

外交問題ハ
熟慮朝裁ア
ルベシ

夷人來住セ
ハ皇國ノ美
風ヲ損セン

置候處、實ニ一大事に候得ハ、其後迪も熟思仕候得共、可足御採用良策も不存付事に候、乍去、御勘考中之御一助にも可相成哉と存候義、包藏候ハ、不本意之至と存候間、猶又不顧恐懼申上候、此度御決答、御許否共、實ニ大義之所係、治亂安危之際候得ハ、何分公武之衆議委細被聞召之上、叡斷勿論と存上候得共、篤と相勘、但々優柔不斷之御返答ニハ、國害難測は勿論、人心不居合候ハ、彌發禍端、一概に正論御差留、或打拂など、容易に被仰出候ハ、是亦大事と存候、何分兩端能々末々之處迄、御思惟被爲在候様、更に申上候迄も無之候得共、猶又、言上之 英斷之方候得ハ、十分御考究之上可被仰出、或ハ又、此度之處關東へ爲御任被遊候旨、可被仰出歟、但事々件々、

勅許と相成不申様にと存候、左候得ハ、隨時運國威を伸候勘辨も可有之と存候、いつれにも、豫防之儀、夫々關東に被仰出候様可然と存候、條々心付之分ハ申上置候、其分可被仰出事にも候へハ、猶又機密之人々加除共、勘考可被 仰付義と存候、先左ニ申上候、
一、此後、夷類彌中國へ立入候事候得ハ、自然 皇國懿風相失、蠻夷之風俗に化し候ハ、不容易之至ニ有之、既西洋發行之時節、右は、知彼知是之儀ニ、格別猥ニ捐本朝之舊制、專彼之奇器淫巧を取林し候様成行候ハ、人心自然と相靡可申、夫々大害を可發候間、被據舊制、諸國に混亂無之様、屹度可有下知、右は、先達て梵鐘之官符被下候通、准據

を以可被仰出哉、但、梵鐘之義は、不服之向も有之哉、難被行ハ其儘ニ被聞候歟、右は、無餘義子細ニ可有之哉ニ候得共、此度之儀ハ、國家之大義ニ候間、必墮滯無之様、可被仰候哉、

阿片邪教之禁、是又可被加之哉、

右、舊例管見之所注左候、

類聚國史、卷第百九十、 俘囚部、

桓武天皇、延曆十九年五月己未、甲斐國言、夷俘等狼性未改、野心難測、或凌突百姓、奸略婦女、或掠取牛馬、任意乘用、自非朝憲不能懲暴、勅、夫招夷狄以入中州、爲變野俗以靡風化、豈任彼情損此良民、宜國司懇々教諭、若猶不改、依法科處、凡厥置夷諸國、亦同准此、
一、兵備之事、先年已來、厚指揮候趣ニハ有之候得共、因循と同様之姿ニハ無之哉、且諸國疲弊之趣も相聞候間、此段ハ屹度立嚴制候様被仰下哉、

一、此度之次第ニハ、實ニ不測之變可發も難量候間、急ニ西丸賢明年輩之人を撰ミ、養君治定可有之被仰下哉、

寛永之頃ハ、大樹上洛毎々有之儀候得共、近代一切無儀、其已後無御據被仰談度御儀被爲在候ハ、被仰遣手輕ニ上洛可有之様可被仰下哉、

一、開市以下之事、京師大改革ハ勿論、可成丈、 皇都近之處ハ、精々不被入様、可被仰下哉、遊歩旅行同斷、

賢明年長ノ
者ヲ將軍繼
嗣トスベシ

安政五年三月五日

六四

神事興隆ノ御沙汰アルベシ

一、今度墨夷申立之内、堂舎を建候事等も有之、右等許容ニ相成候るハ、追々邪教ニ推移可申も難量、左候へハ、本邦之神社を尊重之儀、自然と薄く相成候るハ、本末心得違候無智文盲之者も出來可申儀難計候間、先神事興隆之思召可被仰出、其廉々は、追々可被仰出旨、可被仰下哉、

一、華夷之差別、禮分事情等、國史等にも顯然之事ニ候間、第一其儀萬端ニ付、疎意無之、急度其分榮然と相立候様、可被仰下哉、

應接中にも、親友或同盟など、申語も相見候歟、右混亂候は、實ニ國體之大義ニ候、即申迄もなく、國史等ニ、以失禮之狀、放卻など、有之候事情、厚可心懸、被仰出哉、

一、是迄御政事向之儀は、關東へ被托候上之御事、

禁裏思召之儀被爲在候共、多ハ御斟酌にて不被仰遣候得共、向後ハ無御覆藏可被仰遣、猶又、關東よりも、無遠慮可有言上、彌公武被仰合、國家太平、皇國之御美政を被施候様、可被仰下哉、

右等之條件、此他彼是も可有之哉、猶建白も有之候ハ、御取捨御勘考を冀候、

五日辛巳武家傳奏廣橋光成前權大納言・同東坊城聰長前權大納言・議奏坊城俊克權中納言・老

公武覆藏ナシク談合スベシ

中堀田正睦備中守ノ旅館ニ抵ル。正睦、天下人心ノ歸向ヲ一ニスルハ、大將軍力メテ之ニ當ルベキ旨ノ幕府奉答書ヲ上リ、且、時日遷延セバ紛爭測リ難キヲ述べ、速ニ條約調印ニ勅許ヲ得ンコトヲ請フ。

老中堀田正睦通達○維新史料編纂會所藏本
伏見宮侍御牧家諸留所藏

○三月五日武家傳奏へ

三月五日、堀田備中守殿旅宿ニ兩役御行向之節、備中守殿被相渡候書付、○伏見宮侍御牧家諸留所藏

三月四日、三日半之急便にて京着、翌五日、備中守方傳奏へ被相達候書付、○水野忠

三月五日、從關東返答書寫、○備中守

三月五日、堀田侍從殿方被差上候書付寫、○備中守

三月五日、堀田備中守殿方差出候書付、○新幕

三月五日、御行向之節被相渡候書付、○平安

午三月五日、堀田備中守殿より差出候書付、○備中守

三月六日、從關東返書到來、昨日兩役行向于備中守旅宿請取之云々、借見候之便寫、○野宮

去月廿三日被相渡候御書付之趣、則關東に申入候處、別紙之通被仰出候間、其段御心得、

奏聞可被有之候、且又右一條、追々時日相延ヒ候内、亞墨利加掛合向差縫候疑、或は英吉利

安政五年三月五日

六五

堀田正睦幕府奉答書ヲ上ル

安政五年三月五日

六六

船等渡來致し、如何様之混雜を生し可申哉難計、左候るを、國家之御爲甚以不可然候間、可相成を、早々御沙汰有之候様願度候事、

○別紙

幕府奉答書

今度爲御使上京之上、委細傳 奏を以被及

奏達候處、去月廿三日、兩卿并議奏衆御自分旅宿に被行向、此度之儀、深被惱

叡慮候、至此期候るを、人心之居合國家之重事之候間、御三家以下諸大名之赤心被

聞食度 思召候、今一應被下 台命、各存所被書取、入

叡覽候様、關白殿(九條御也)・太閤殿御沙汰之趣、書付被相渡候之付、右書付差越到來候、則及言上

候處、

叡慮之趣、御尤之御事之被 思召候得共、人心居合方へ、如何様共、關東之御引請被遊

候間、被爲安

叡慮候様被遊度旨、被 仰出候間、此段傳 奏衆へ早々可通達候、恐々謹言、

脇坂 中務大輔

安宅 花押

三月朔日

久世 大和守

廣周 花押

松平 伊賀守

忠固 花押

堀田 備中守殿

内藤紀伊守儀、病氣中ニ付、連名不仕候事、

老中奉書一通、并堀田口上書一通等、

右三月五日、光成卿・聽長卿・俊克卿等、於旅亭受取、○中山忠能 願書資料

(水野忠德雜錄 尙忠公記 聞集錄 新家雜記 平安 戊午記事 國事記 野宮家文書 中山忠能履歷資料)

德大寺公純日記○臨時帝室編 修局所藏本

三月五日、晴、

一今日未刻、俄備中守 亭行向之事、武傳被示旨、万里小路以狀被示、予坊城兩人内、可行向旨也、坊殿一人可被行向旨、以狀示了、

一夕景、以狀坊殿備中守迄老中奉書ニテ、人心折合之處へ、如何様共於關東被引受候間、御

安慮被爲在候様ニとノ返事由也、堀田ニも、早夕歸府願度由申居旨也、尙明日拜上、可被

示由也、

安政五年三月五日

六七

幕府奉答書
ヲ上ル

安政五年三月五日

六八

〔後勤槐記〕

○廣備光成日記
孝明天皇紀所載

三月五日、巳刻頃、駿河守用人來、今日行向之事、同役被打合、未刻狩衣行向于備中守、同役

坊城同伴、○中歸路同伴參殿下、

六日、辰刻參殿下、同役并坊城同伴申請御面會、昨日、備中守申條委細申上、

〔坊城俊克日記〕

○孝明天皇紀所載

三月五日、武傳兩卿・予等、俄ニ堀田備中守旅館へ行向、墨夷一件、過日關東へ被仰遣候返

答有之、省略了、

〔曇華院日記〕

○維新史料編纂會所藏本

三月五日、辛巳、晴、○中略、

一堀田備中守殿に、關東方御返答有之由今日奏聞ニ相成、猶又諸卿、御評定有之由、

〔佐倉藩記録〕

○伯耆堀田正恒所藏本

三月五日、

一八時過、繼御上下被爲 召、於御書院本多美濃守様（出典、京都所司代）に御逢有之、引續傳 奏衆御兩人様・

議奏衆久我大納言様御行向ニ付、諸事例之通相濟、七時過、御歸被遊候、

一御歸後、引續又候於同所、御役人様方に御逢有之、

〔川路聖謨都日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

五日 （三月） くもり 五ツ半時頃。江戸比宿次とや。備中守殿に參る。備中守殿御旅亭と左衛門尉の家とあり之故に門前を通る

來共。そりやと申候。直ニ供揃出來。御旅亭へ參る。傳 奏議 奏も被參候。存外ニ

早くすと候。七半時歸宅。

〔老中松平忠固等書翰〕

○伯耆堀田正恒所藏本
堀田正睦外國書中書類所載

○二月晦日同役堀田正睦宛

松平伊賀守

久世大和守

脇坂中務大輔

堀田備中守様

（三月二十五日條ニ收ム）御別紙拜見仕候、然と、去ル廿三日、傳 奏衆・議 奏衆行向之義被申込候ニ付、廿五日、御

出會、段々打明候御談判被及候處、縮り

主上とと、鬭争と勿論、今般之御所置振、別段

叡慮も不被爲 在候様子こそ候へとも、只々御心配被成候間、何とどの被爲安

宸襟候様いとし度趣ある、件々之次第、委細表狀ニ被仰越、則被差越候草案之趣ヲ以、一同

安政五年三月五日

六九

幕府ノ宿次
奉書至レ
兩役堀田ノ
旅館ニ臨ム

坊城俊克等
堀田ノ旅館
ニ赴ク

安政五年三月五日

七〇

評議之上、

思召相伺候處、別段

思召不被爲 在趣被

〔上ニ揚ケル三月朔日付、堀田正陸殿書翰ヲ相ス〕

仰出候間、今便表狀ニ委曲申進候、右ニ御承知可被下候、尤伺相

濟、即刻急使差立候ニ付、御答不能詳、大略之段、御海恕可被下候、貴答迄勿々如斯御坐候、以上、

二月晦日

脇坂中務大輔

久世大和守

松平伊賀守

堀田 備 中 守 様

尙以、時氣不同、折角御自重專一奉存候、各無異罷在候間、御放念可被下候、吳々後餘慶之御手數ニ移し、時日を移し、嘸御痛心之義と、一同深く御察し申候、以上、

老中書翰

〔堀口貞明筆記所載〕

○三月九日堀田正陸宛

三月九日、次飛脚ニ遣ス、

備中守殿へ申遣候趣、

幕府ノ奉答
書ヲ堀田ニ
送ル

堀田へ返
翰

去ル朔日、早便を以申進候宿次、同五日、到着ニ付、則傳 奏衆御自分旅宿へ行向之義、御附を以御申入候處、同日未刻、被行向之積ニ相成候旨、委細之後便御申越可有之候得共、先此段御申越候旨、致承知候、以上、

三月九日

連 名

堀田 備 中 守 様

〔老中書翰〕

〔堀口貞明筆記所載〕

○三月九日堀田正陸宛

三月九日、次飛脚ニ遣ス、

備中守殿へ申遣候趣、

去ル朔日、連判之奉書、刻限附を以、東海道・中山道兩道差立候處、中山道之方、去ル五日辰刻相達、追々時日も相後レ候處、心配候ニ付、直様御附之者を以、兩卿行向之儀申入、早々被奉入

叡聞候様可被致と被存候、右ニ付、

勅答被 仰出候ハ、御自分持參歸府之上、被及言上候ると、遅々ニ及び、亞墨利加使節假條約調判之差支と被存候間、

安政五年三月五日

七一

勅答被 仰出次第、早便を以、御申越可有之候間、言上之後、假條約爲取替候様取計可申旨、致承知候、東海道刻限附之方、未到着不致候間、到着次第追御返却可有之旨、是亦致承知候、以上、

三月九日

連

名

堀田 備 中 守 様

〔海防祕聞集〕

○維新史料編纂會所藏本

京都來狀

午三月八日付、京都來狀之由、

二月廿三日、堀田侯に傳奏を以、兵庫開港不相成旨、諸侯之赤心爲書、右可入 叡覽候旨等、御渡云々、廿四日之應接を以、堀田侯前之御書面一條段々被仰述候得共、傳奏

叡慮之通、取計吳候様被申立候付、廿五日、急飛脚江戸表に參り候由、廿八日こと、太閤殿も外夷一條を付、子細有之内覽御辭退御申上を相成候由、朝廷御内向とも、段々御混雜を相成候由、叡慮へ、彌御手強之御様子、堀田侯と、進退維谷之場合有之、餘程愉快之場に至り掛有之処、當月五日、關東へ御返答參候由を、傳奏、堀田侯旅館に御出、應接有之処、關東へ之御答を以、兵庫開港一條へ、夷人と應接相濟候上之儀を候得と、今更相斷候義

傳奏堀田ノ
旅館ニ赴ケ

關白ノ態度
一變幕府ニ
加擔ス

も難相成を付、是非共御聞濟を相成候哉之事、京都御警衛へ、諸侯に手厚被仰付候様ことの事、人心折合方之儀へ、如何様共關東を御引受被遊候間、被爲安 叡慮候様之事、關白殿へ、是迄卓絶する正論を有之、至極御模様御宜候を、如何之譯を候哉、此節俄に御模様相替、關東申上之假條約之通、御聞濟も被成度哉との御積を相見申候、勿論傳奏も御同腹と相見申候、此間關白殿へ、非職之徒者、何事も國家之議論を致義、不相成旨杯被仰候由、太閤殿、御内覽御辭退御申立中故、壹人なる大權を掌握被致、此度之一條取定度との御勢及と相見申候、右を付、有志之縉紳家奮激を、大議論を相成、此節又々建白も被致候由、昨日も禁中を、五攝家始有志之御方、段々御評論有之由、關白殿へ、挫ケ候得共、

主上御英明を被爲在、且有志之御方も御座候事故、關白殿被思召通を相成不申哉之旨相察候、如何ふる 勅答を相成候をも難計候得共、何分關白殿之模様替へ大歎息仕候、青蓮王とも、當時參内不相成様被爲成候由、是又歎息仕候、其後へ、朝廷之御様子段々轉變仕候間、相定不定種々入組候義御座候を、中々紙上を難盡候、此上へ、何分とも御手強 勅答有度様仰き上申候、堀田侯も、殊之外御急を有之由、近日御沙汰も御座候哉を奉察候云々、

三月八日

安政五年三月五日

七四

幕府、大目付土岐頼旨守丹波ヲシテ道中奉行ヲ、同遠山則興正隼人ヲシテ、宗門改ヲ兼ネシム。

〔安政年録〕○内閣記録
課所藏本

三月五日、

道中奉行

御留守居次席
大目付

土岐丹波守

宗門改

大目付

遠山隼人正

右、於新部屋前溜、紀伊守申渡之、

〔溫恭院殿御實紀〕○續徳川
實紀所載

三月五日、道中奉行、○宗門改、

御留守居次席
大目付

土岐丹波守

一 道中奉行

同

遠山隼人正

宗門改

土岐頼旨ニ
道中奉行ヲ
遠山則興ニ
宗門改ヲ兼
ネシム

右、被 仰付旨、紀伊守申渡之、

老中松平忠固伊賀守○
上田藩主・同久世廣周大和守○
關宿藩主等、越中島江戸
深川訓練場ニ步・騎・砲

三兵ノ訓練ヲ觀ル。十六日、マ
タ同シ。

松平忠固日記○子爵源
榮一所藏本

三月四日、

一四ツ御太鼓こゝ出宅、

一登 城、四半に貳寸前、○中
略、

一明日、越中島訓練場に、自分・大和殿〔脇坂安宅〕・中務殿〔本多忠徳〕・越中守〔遠藤胤純〕・但馬守〔土庄道直〕・安藝守相越候旨覺書、以相模守上ル、〔御奉行取次聲川親賢〕

一右こ付、三人登 城御用捨被遊候旨、丹波守〔御奉行取次平岡弘道〕方申聞、御禮直以同人、申上之、越中守・但馬守・安藝守こも、御用捨被 仰出候旨、但馬守方申聞之、

一御用濟使遣、一同退出、

一歸宅、

三月五日、

一今朝登 城前逢、自分初越中島に相越候こ付、無之事、

安政五年三月五日

七五

老中松平忠
固久世廣周
等越中島調
練場ニ至ル

安政五年三月五日

七六

一五半時出宅、自分・大和殿・中務殿・但馬守・安藝守同道、越中守ニ後、可相越處、昨夜方不
快ニ付不相越旨案内手紙來、乘馬ニ深川越中島調練場に相越、野羽織、小袴
但、大和殿初、同道之衆、自分出宅に附人被致候事、
一近習七人、馬役壹人乘馬ニ召連、其外押口之者、草り取等相越、外供方ハ、不召連候
事、

一大和殿前文之通ニ付、(老中内藤信親、村上海主)助月番紀伊守殿被心得、

右ニ付、同人方に出宅案内、以手紙申遣ス、

一今日登 城御用捨、昨日被 仰出候事、

一調練場惣門ニ下馬、出役之者先立ニ相越、見分所に上り、三人一同ニ罷在、爲先番、部屋
遣シ、御取次丹波守其外諸役人ニ後、乘馬ニ先相越罷在、組頭・御右筆等も相越居候、

一三兵人數割性名書付三枚、(奥右筆佐藤)清五郎方差出、持歸之、

一夫方宜旨ニ、大砲隊・騎兵隊・歩兵隊順々見置、相濟、畫辨當
相用又候右三兵組合セ調練見

置畢一同退散、如初、出役之者先立、總門外ニ乘馬、三人同道歸宅、七打貳寸廻、但、此
若年寄ニ、
同道無之、

但、歸宅案内、助月番に以手紙申遣、

三兵調練ヲ
見ル

〔石川成章日記〕

○西丸裏門番之頭石川左内日記
維新史編纂會所藏本

三月五日、○中
略、

一榮吉儀、今日越中嶋御老中方御廻りニ付、六ツ時罷出、八時過歸ル、此度組合袴トハのヘ
候、

〔安政年録〕

○内閣記録
課所藏本

三月五日、○中
略、

一本多越中守不快ニ付、今日登 城無之、

〔松平忠固日記〕

○子爵澁澤
榮一所藏本

三月十五日、○中
略、

一登 城、五半に二寸前、○中
略、

一明日自分・紀伊守殿・中務殿・但馬、越中島調練場に爲見分相越候旨、以相模申上之、

一右ニ付、三人明日登 城御用捨被 仰出候旨、相模守申聞、御禮直以同人、申上之、但馬

守も御用捨被 仰出候旨、申聞之、

一御用濟、(老中久世廣周、關宿藩主)月番計使遣、一同退出、

安政五年三月五日

七七

松平忠固等
越中島訓練
場ニ赴ク

地雷火水雷
火三兵合併
訓練ヲ觀ル

安政五年三月五日

一 歸宅、

三月十六日、

一 今日、自分・紀伊守殿・中務殿、越中島訓練場に爲見分相越候に付、今日登 城御容捨之
義、昨日被 仰出候に付、乘馬に、宅之四時出宅、野服、小袴、

但、場所に爲先番、部屋番之者壹人差遣、近習之者九人、乘馬に召連候事、

一 途中に、紀伊守殿・中務殿・若年寄但馬守同道に相成、乗切に越中島訓練場に相越、
門前より下乗、役々出迎、見物所に相越、

一 地雷火見分相濟、三兵合一之訓練并水雷火見分、都る去ル五日之通、相替儀無之候、

一 夫より、紀伊守殿・中務殿に及挨拶、直退散、門外に乘馬、淺草茅町中屋敷に相越、夜に
入歸宅、

〔御城書海防部〕○水戸藩記録
公爵徳川昭順所藏本

三月十六日、

一 松平伊賀守・内藤紀伊守・脇坂中務大輔・遠藤但馬守・本多越中守・酒井右京亮、今朝登城
御用捨に、深川越中島訓練場に爲見分相越申候、

儒役林麿大學頭・目付津田半三郎正路○後
近江守 大坂ヨリ歸京二月三
十日、是日、京都ヲ發

シ、歸府ノ途ニ就ク。十九日、江
戸ニ至ル。

〔禁裏附大久保忠良等書翰〕○東京帝國大學所藏本
九條家記録所藏

○三月五日武家傳奏廣橋光成等宛

廣橋 前大納言

東坊城前大納言

大久保 大隅守

都 筑 駿 河 守

以手紙啓上仕候、然者、林大學頭・津田半三郎儀、當表御用相濟、今五日、發足仕候之旨申越

候間、此段爲御承知申上候、以上、

三月五日

〔土浦中田正誠雜記〕○大谷正
藩士 道所藏本

安政五戊午年二月廿八日出る大坂狀來著る 御書付御書取等之寫相廻候寫

一 堀田様之茂、今以御在京之由、段々御永ク被爲成、萬々御心配之儀奉恐察候、此地に茂、

林様・津田様御兩人、當十七日御著坂、十八日に、於御下屋敷 御逢御用談、廿日に御兩

人様、御城内御拜見御序旁於御上屋敷再御用談、廿一日・二日御兩人様、兵庫・西宮邊

海岸御巡見に御出、廿三日御歸有之、又廿四日御上屋敷に御出御用談有之、其節 上方

御書取御渡候處、尙再三種々御議論も有之候得共、此方様御見込御決斷に付、右御書取

安政五年三月五日

七九

林津田兩人
ノ京都發足
ヲ稟ス

林津田下坂
後ノ行動

七八

安政五年三月五日

八〇

御持歸りて相成候、然ル處、翌廿五日尙又町奉行様に御頼出有之、何分右御書取而已て
るに、堀田様に被仰上方に後御差支との事付、又別に御書取壹通廿六日に町奉行様迄
被遣候處、廿七日至、最早御用談を相濟候得共、今一應御暇乞に御逢被成度と御願有之
に付、上へ御答こと、御用談候へ、何ヶ度あるも御逢可被成候得共、御私事あるを
御斷被成候、

京地たる後定る御用後可有之、備中守様を後御待可被成候間、旁御私事ある御面會被成
候儀、當時柄如何に付、被及御斷候旨、被仰遣候處、御兩所様こと、明廿九日御出立御
上 京と申旨に相成申候、

○林麿・津田半三郎ノ大坂ニ於ケル行動ニ關シテハ、二月二十四日ノ條ヲ參看スベシ。

〔川路聖謨日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

○本書ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆本ノ態ニ從ヘリ。

二月卅日 晴 備中守殿御旅亭へ罷出候。御不快宜候得共。御押被成候るハ如何と。御逢
之義に。不申上候。林家并津田半三郎大坂へ歸來る。

〔中山忠能手記〕

○宮内省圖書寮所藏本
中山忠能歴歴資料所藏

一 林大學頭・津田半三郎、三月五日、御用濟發足、歸東、

林津田京都ヨリ歸府ス

〔邊蠻雜纂〕

○公香徳川
因順所藏本

一 林・津田兩人、三月五日京都發足にて、十九日歸着、翌日登 城、○中

一 林家歸府後之話に、京師之模様を、後醍醐帝之御時と等しく、以後ハ何くとも、御政
事之御察當も出可申と申候由、林家へ出入之者之説と云、

〔國事記〕

○水戸藩士墨田亮手録
公香徳川因順所藏本

三月廿日、手跡ヲ以考るに山國書狀に、

一 昨十九日、林大學頭下着、右に付聖堂勤問梅林金四郎と申者、昨日林家へ下着之祝儀に
罷越、大學頭へ對談致候處、堀田京師之首尾至極宜敷、公卿衆之處々に被招、馳走に相成
候由、物語有之候、

内裏に御能舞臺出來不申居候處、此度堀田上京、直に相達出來候由、右様之扱も有之候
故、御取用至極宜敷との物語有之由、堀田も廿九日方迄へ、下り可申との嘯有之と申
候、右に梅林去ル廿日、須賀井浮菴と申之醫者之宅に罷越、直談致候由、浮菴が申聞に御
坐候、

梅林之外にも聖堂勤之者罷越、對話致候との沙汰御坐候、然ル處、井上信州之公用人
に對面、承り候へハ、林の下り候儀ヲ不致承知との由に御坐候、信州が公用人に申聞

安政五年三月五日

八一

林麿歸府京都ノ情勢ヲ語ル

安政五年三月五日

八二

こハ、京地も交易之儀御聞濟ニ相成候、乍去五畿内を除キ候る、相濟候との事ニ申聞候よし、

〔水戸藩士横山甚左衛門書翰〕○公爵徳川園順所藏本
御城書拔書拾遺所載

○三月二十一日同藩小姓頭取宛

〔朱書〕
御本殿頭取迄申上候書面之寫、

御小姓頭取様

横山甚左衛門

林大學頭・津田半三郎兩人、京地ハ罷下候由之處、いつ比歸府致候哉、御尋被爲 在候付、否可申上旨奉畏候、右者一昨十九日歸府、昨日始メる登 城仕候事ニ御座候、此段申上候、以上、

三月廿一日

端書寫、

堀田備中守儀者、いつ比京地發途可相成哉、未タ相分り不申候、林家等歸宅ニある、京地之模様更ニ相分り不申候、

〔仙臺藩士橋本九八郎日記〕○維新史料編纂會所藏本
發會所藏本

三月廿一日、晴、

一過ル十九日、林大學・津田半三郎歸府、昨日登城、是迄之事狀申上、御分ニ相成候ニ付、歸府仕候由、備中殿御用濟之義也、未見留無之由、例向方申來、

〔飯泉喜内書翰〕○維新史料編纂會所藏本
飯泉喜内書翰集所載

○上、林大學頭・津田半三郎も、堀田上京ニ付ると余計ものと相成候ニ付、二月十六日下坂、十九日兩川口見分之處、小雨ニある見合ニ相成、廿日ハ西ノ宮・兵庫邊見分、廿三日ハ大坂沖手見分、并兩川口等見分、夫々堺邊も見分之處、一旦歸京三月五日京地出立、中山道旅行、同十九日歸府、何之咄しも一切無之、大それた故、咄しもならぬ事計と相聞申候、
○中、
略、

右草々御返事旁申上度如斯候也、

四月八日認

〔飯泉喜内書翰〕

内

浩 藏 様

〔水戸藩士御城書拔書拾遺〕○公爵徳川園順所藏本

御目付津田半三郎等、京都ニ爲御用罷越候処、歸府日限左之通、

御目付

津田半三郎

三月十九日

安政五年三月五日

八三

林津田大坂ヨリ歸京尋テ歸府ス

安政五年三月五日

八四

御徒目付

中臺信太郎

右之通之有之由、御城附申聞候書面之寫、

〔如坐漏船居紀聞〕○松代藩士山寺源大夫雜記
久保來復所藏本

江戸來書抄、○中略

一御目付津田半三郎様親敷衆の咄、林家一同
舊冬上京、神武以來世々御記録被爲在、夷賊取扱夫々

舊例有之儀、逐一相弁ひ取計候哉、夷賊之儀を打拂候が古來よりの國法之、然処諸夷通

信通商杯と申儀を一切不相成、尤諸大名存慮上書爲致、和戰之決着多分を任せる、征

夷之號如何相心得候哉、將軍征夷職勤り兼候へ、其職を當ル者を見立、徳川家相續爲

致可申、徳川家ヲ潰儀を無之杯申噲之由、津田氏ハ去月十日林家一同飯府、八百兩

程借財出來、林家ハ千五百兩も借財出來、一向御用弁も不相成、飯府後 御目見計を

る一向御賞も無之、勝手向甚難澁之由、

〔安政年録〕○内閣記録
課所藏本

四月朔日、○中略

一今已上刻、御表に 出御、月次之御禮相濟、

津田等ノ上
京失敗ニ終
ル

林津田登城
將軍ニ謁ス

御白書院

御勝手方

京都表御用仕廻罷歸候、

林大學頭

御目付

津田半三郎

○溫恭院殿御實紀・高麗環雜記・幕府沙汰書・御城書海防部ニモ、マタ本書ト同一内容ノ記事アリ。

○參考

〔續通信全覽〕○外務省
所藏本

戊午三月十八日、

一林大學頭・津田半三郎・其外支配向共、今日京師より歸府、

〔鈴木大日記〕○内閣記録
課所藏本

四月三日、

此夜、○中略佐賀藩深川門作ニ面會、話ニ云、○中略

一林大學も、彌三月十八日、江戸著相成候、

米國總領事「ハリス」Harris 幕府汽船觀光丸ニ乗ジテ、再ビ江戸ニ至

安政五年三月五日

八五

安政五年三月五日

リ、蕃書調所ニ入ル。

〔老中達〕

○内閣記録所藏本
安政年録所載

○三月六日大目付等へ

三月六日、〔老中松平忠固〕伊賀守殿御渡御書付、〔安政〕年録

三月六日、伊賀守殿御渡、〔高麗〕環雜記

三月六日、伊賀守殿御渡御書付、〔高麗〕環雜記

三月六日、伊賀守殿御渡御書付、〔高麗〕環雜記

三月六日、左之御書付寫壹通、〔仙臺藩主伊達慶邦〕松平陸奥守様衆より、持廻りて到来、〔外務〕月録

三月六日、大目付遠山隼人正方、〔前興〕松平伊賀守申渡、

諸向に相達候よしなる、御城附共は爲心得爲見申候書付寫、〔御城書〕海防部

亞墨利加使節先達より下田表に中歸致し候処、猶又觀光丸御船拜借、昨五日、再出府致し候、

此段爲心得、向々に可被達候事、

三月

〔高麗環雜記〕水戸藩記録御城書海防部
温恭院殿御實紀 近世秘稿 外務用録

〔大目付回達〕

○侯館池田仲博所藏本
公儀御觸留所載

○三月六日福井藩等江戸留守居へ

三月六日、大目付中の方之御達書、阿州様衆が到来に付、津山様衆に致順達候、

米國使節觀
光丸ニ乗シ
再ビ江戸ニ
至ル

松平伊賀守殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意、無遲滯早々順達、留より土岐丹波
〔上二載之〕
守方に可被相返候、以上、

三月六日

大目付

松平越前守殿

松平阿波守殿

松平薩摩守殿

松平三河守殿

松平相模守殿

松平兵部大輔殿

右留守居

〔佐伯藩記録〕

○子爵毛利
高範所藏本

三月七日、

一御留守居宮本又左衛門申聞候、松平伊賀守様が被成御渡候御書付寫壹通、大御目付土岐
〔上二載ル老中達ヲ指ス〕

丹波守様が御同席觸、昨夜分部若狭守様が御到来之旨、右寫出之候段申越候、

〔新谷三橋久治雜記〕

○内閣記録
課所藏本

安政五年三月五日

安政五年三月五日

八八

三月六日、亞墨利加使節、尙又昨五日再出府致候旨、同觸、

〔松代藩御條目〕○伯爵眞田幸治所藏本

三月七日、

一亞墨利加使節先達る下田表に中歸致し候所、猶又觀光丸御船拜借、昨五日再出府致し候、此段爲心得向々に可被達候事、

三月六日

右之通、從

公義被 仰出候、

右之趣、御家中に可有演說候、

三月七日

御目付中

〔柿崎村名主日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

三月二日、辰巳風、雨天、亞人出府に付今日觀光丸御船へ乗船、并に御付添役々様御乗船被成候處、荷物玉泉寺に持出人足拾貳人、并亞人曲録持四人、都合十六人相勤候、村役人名主并に久四郎・忠右衛門・新左衛門・又二郎・權兵衛等相勤候、

「ハリス」等觀光丸乗船

風浪ノタメ港口ヨリ引歸ス

一同日、玉泉寺御詰所小使人足壹人ツ、之處、今日ハ御用多に付貳人相勤候、

尙、右御船九ツ時出帆仕候處、湊口迄出行、日和惡敷候に付、八ツ時頃又々直し入津仕

候、依之亞人又々玉泉寺へ上り候付る者、荷物陸上ヶ仕候に付、漁舟壹艘水主人足六人

出し、御舟々荷物貳度としけ候、又右荷物磯崎より玉泉寺へ持込、人足拾人相勤候、

猶又、亞人玉泉寺へ曲録にる持込、人足四人相勤候、

一次に御詰役人中様御辨當是迄貳人前ツ、之處、昨夕飯々今朝迄、御兩人前ツ、晝喰ハ

御乗船に付無之候、然ル處、直し入津に付夕飯御兩人前差上候、

三月三日、西風、晴天、九ツ時々風、今朝亞人御船へ乗船致候に付、陸人足八人、としけ舟貳

艘、此水主人足拾貳人、都合貳拾人相勤申候、尙、小でんま船壹艘出し候、四ツ過頃行方

様御乗船被成候、并に四ツ半時頃脇谷様御乗船被成候、役人久四郎・新左衛門・權兵衛相

勤候、

〔代官竹垣直道日記〕○維新史料編纂會所藏本

三月三日、昨夜々風雨、

一朝五時過登

城、○上巳御禮申上ル、四半時過退出、○蕃書調所に相越、亞人今日着府之積候處、風雨

米人着府延引

觀光丸出航

安政五年三月五日

八九

安政五年三月五日

九〇

こ付延引相成、詰合善四郎八時過歸宅、

一役所休日、

同四日、晝方晴、

一朝五半時出宅、蕃書調所出勤、亞人延着、四時過退散、詰合彌惣右衛門、略、○中

同五日、晴、○中略、

一九半時過出宅、蕃書調所に出勤、(ハリス)亞米利加官吏・通辯官・支那人三人、昨日、下田出船い
と、九半時過着いと、詰合、大助・善四郎、下田方其外共出勤有之、七時比歸宅、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

三月五日、

一亞米利加使節再出府、

但、三日、着可致之処、大風雨こ付延引、及今日、

〔宮信涕泣輯書〕○維新史料編纂會所藏本

安政五年三月三日、大風雨こ付、使節ハリス、五日江戸着、蕃書調所こいとる、

〔湯蠻雜纂〕○水戸藩記録 公爵徳川昭順所藏本

三月五日、墨夷又々出府、通辯官等ハ、馬上こて通行す、此度ハ、通辯官之外、清人三人召連

「ハリス」一
行着府蕃書
調所ニ入ル

來り候との事、

〔續通信全覽〕○外務省所藏本

○米使波兒里士於江戸廢舊約更交易條約結定一件

戊午三月五日、

一ハリス再江戸ヨ來り、假條約調印之遷延を責め、速ヨ調印之條約書爲取替之儀を及督
促、

〔鈴木大日記〕○内閣記録課所藏本

三月六日、

此日、南狀着こ云、○中略、ハリス彌江戸へ五日着之趣、申來候事、

〔盛岡藩士山崎忠吉江府詰合私録〕○維新史料編纂會所藏本

三月七日、○中略、

一正月廿一日發足下田表まで退去致候亞墨利加使節、尙又出府、一昨五日、蕃書調所に着
こ相成候由、

〔町奉行伊澤政義打合書〕○帝國圖書館所藏本 外國事件書所藏

安政五年三月五日

九一

「ハリス」再
出府

安政五年三月五日

九二

○三月朔日同役跡部良弼へ

〔朱書〕 午三月朔日、向方へ、翌日、下ケ札來、

美作守殿

跡部甲斐守

甲斐守殿

伊澤美作守

〔ハリス〕銀座通行ニ就キ露店取締ノ件

明後三日、亞人出府ニ付、尾張町往還床見世雜店之義、別紙之通、町役人共願出候間、相糺候處、右ニ、通行中見世爲仕舞置候得ニ、場廣之往還ニ付、強ニ通行之障ニも不相成旨申立、差向爲取拂候ルニ、際物見世之義、難澁も可致哉に候間、書面之通相心得、不取締之義無之様可申渡ニ存候、依之別紙相添、此段及御打合候、

午二月

〔附箋〕

御書面之趣致承知、別紙をも一覽致し候處、御見込之通被御申渡、拙者儀存寄無之候、依之右書付返却、此段及御挨拶候、

午三月

跡部甲斐守

米使出府取扱掛目付鶴殿長銳通達

〔外國事作書所載〕

○三月朔日町奉行へ

〔朱書〕 午三月朔日、差越、

〔朱書〕 當

番

町奉行衆

亞墨利加使節再度出府ニ付、明後三日明ケ六ツ時、觀光丸御船々、江川太郎左衛門調練所ニ上陸、即刻蕃書調所に着之積ニ候、此段申達候、以上、

三月

鶴殿民部少輔

〔下田奉行井上清直上申書〕

〔外務省所藏本續通信全書所載〕

○三月三日老中松平忠固へ

戊午三月三日、

亞墨利加使節并通辯官等、支配向之者差添、昨二日、下田湊出帆致候積ニ付、今曉迄、江戸着可仕處、昨夜以來之暴風雨にて、着無御座候間、町奉行へ申談、廻船方へ相達、押送船品川迄差出、洋中模様爲及見候積、佐藤清五郎を以申上置候處、其後猶風雨烈敷相成候間、蕃書調所ニ詰合罷在候町奉行組同心へ申談、日本橋肴問屋共へ、風聞爲相糺候處、別紙之

安政五年三月五日

九三

米使芝濱江川調練所ニ上陸ノ件

〔ハリス〕延着ニ就キ押送船差遣ノ件

安政五年三月五日

九四

通申立、前書押送船品川沖出船相成間敷哉之趣、治定之否と、猶可申越候得共、先奉入御聽候爲、別紙相添、此段奉申上度如此御座候、已上、

三月

井上信濃守

松平伊賀守様

猶以、本文之趣、魚船問屋共押送船品川沖出船仕候共、急速模様之相分申間敷候間、右否之明朝奉入御聽候様可仕候、以上、
(沿海紀聞)

〔下田奉行井上清直掛合書〕

○外國事
件書所載

○三月四日町奉行伊澤政義へ

〔朱書〕
午三月四日夜來ル、即刻下ケ札返達、翌朝尙又再下ケ札ニ差越候處、魚船問屋方届出候趣も有之付、其段申遣、

井上信濃守殿

伊澤美作守

伊澤美作守殿

井上信濃守

昨日於 御殿御談判および候通、亞米利加使節碇泊等之儀模様等取調、廻船問屋共に被御申渡、押送船御差出有之候事与存候、右否いま何とも不申出候哉、御左右次第、直に伊賀守殿にも申上候積に付、承知いゝし度、若前書之積之様子、未相分兼候儀も候ハ、乍御

手數御組之者、日本橋魚問屋共等之風聞爲御糺有之候ハ、昨夜より今朝之模様可相分哉と存候間、其段被御申渡候様いゝし度、勿論蕃書詰合御組之ものに、先刻支配向之者より談判いゝし置候儀に候得共、此段御問合旁及御掛合候、以上、

三月四日

御書面之趣致承知候、昨日御談も有之、伊賀守殿御沙汰之趣も有之候に付、無油斷支配向にも、申付、既今日漁船之者共にも、嚴敷申付、入津之船人見留候次第なる候届出候様、其筋に申渡、否之儀速に拙者御役所にも申出候様、申渡置候間、何と歎可申出事も可有之哉相待居候間、届出次第御達可申、夫共此上下田表迄、急船可申付候方と淺可有之哉、猶可被御申聞候、尤支配向にも、聊無油斷心付居候儀と候得共、御掛合之趣も有之事故、此段及御挨拶候、

午三月四日

御下ケ札之趣致承知、入津之船見留次第、糺方有之候とも、事實を得候儀、何分無心元被存候間、下田表迄急舟御差立有之候様いゝし度、依之中村出羽守〔時義、下田奉行〕に、書狀壹封相添候間、右急船乗組之もの持參、彼地着次第、下田表御役所に、右書狀差出、返書受取次第、直に同所出帆、江戸着、其御役所に相届候ハ、委細被御申聞候様致度、尤右之趣

安政五年三月五日

九五

漁船ニ命ジ
「ハリス」ノ
乗船見留次
第届出シム

安政五年三月五日

九六

ハ、今日伊賀守殿に可申上置と存候、此段尙及御掛合候、

三月五日

井上信濃守

魚問屋ヨリ
異船碇泊ノ
届アリ

再御下ケ札之趣、委細致承知候、然ル處、今朝魚問屋カ、異船造之船滞碇之様子見留候旨申出候間、其段及御達候處、使之もの行違相成候事を相見申候、右之通ニ有、最早今日中ニハ、入津も可致哉ニ被存候得共、夫共急船可申付哉、猶御勘辨之上、被御申聞候様致度、依之中村羽州ニ之御書状と致返却、此段及御挨拶候、

三月五日

伊澤美作守

〔江戸魚船問屋上申書〕○外國事
日本橋 作書所載

○三月五日町奉行へ

伊豆國網代村彌八舟、昨四日夕七ツ時頃、猿嶋沖に、異船造之船、碇ヲおろし候様子見受申候、此段奉申上候、

午三月五日

魚船問屋

〔朱書〕
卯ノ下刻過届出候付、即刻寫、伊賀守殿公用人迄申遣、向方并亞人掛喜多村彦右衛門へ達、但、井上信濃守にも、以帳面達、

觀光丸品川
沖ニ至ル

〔江戸町名主上申書〕○外國事
作書所載

○三月五日町奉行へ

乍恐以書付御注進奉申上候、

一亞墨利加使節乗船候觀光丸御船、只今品川沖に入津仕候、不取敢此段御注進奉申上候、以上、

午三月五日

辰中刻過、

高輪町

名主

權左衛門

御番所様

〔朱書〕
右之通申出候間、伊賀守殿公用方へ申遣、亞人掛へ達、

但、自分登 城候る、向方并下田奉行にも不申遣候、

〔町奉行支配組與力同心上申書〕○外國事
作書所載

○三月五日町奉行へ

亞墨利加使節再度出府ニ付、私共并廻方一同出役仕候處、今晝九時過、芝新錢座江川太郎左衛門調練場に着船いとし、無滞蕃書調所に着仕候、此段申上候、以上、

三月五日

中村次郎八

安政五年三月五日

九七

〔ハリス〕
蕃書調所到
着テ上申ス

安政五年三月五日

九八

中田郷左衛門
仁杉八右衛門

向方

秋山久藏

下役同心

双方拾人

右之通申聞候、

〔采使出府取扱掛勘定奉行土岐朝昌等書翰〕

○宮内省圖書寮所藏本
川路聖謨京都表御用留所藏

○三月六日勘定奉行川路聖謨等宛

〔採書〕
午三月十日、京地に到來、

以書狀致啓上候、然老、亞墨利加使節并通辯官とも、昨五日、蕃書調所に參着に候、病氣も大きに快様子之趣に候、昨日之處に候、別段申立候義も無之、其外相替義無之候、依之下田表出帆、并江戸着迄之手續、別紙壹通差進申候、右に候御承知、備中守殿にも、可然被仰上候様奉存候、右可得御意如斯御座候、以上、

三月六日

井上信濃守印

「ハリス」
再出府ヲ報
ズ

鶺鴒殿民部少輔印
永井玄蕃頭印
土岐攝津守印

川路左衛門尉様

岩瀬肥後守様

猶以、使節病後出府之儀にも有之候間、櫻・□・海棠・藤・万兩等、鉢植物五鉢被下候処、殊之外相歡候趣に御座候、此段も爲御心得申進候、以上、

○別紙

三月二日、

一 巳半剋頃、下田出帆に候処、風雨烈敷、港口出離兼、無餘儀乘戻し、同日に玉泉寺へ止宿、

三日、

一 下田出帆、相州真鶴沖迄走參候処、逆風に付乘戻、豆州網代に碇泊、

四日、

一 今曉卯剋頃、網代出帆、武州小柴迄候処、風勢甚敷候に付、申上剋過浦賀港へ入津、碇泊、

安政五年三月五日

九九

「ハリス」
盆栽ヲ贈ル

安政五年三月五日

100

五日、
一寅下刻、浦賀出帆、巳半剋過、品川沖に着船、迎船に乗替、芝新錢座方上陸、未上剋過、蕃書調所に着、

前掲書翰ノ返翰

〔勘定奉行川路聖謨等書翰〕○川路聖謨京都表御用留所職

○三月十一日米使出府取扱掛勘定奉行土岐朝昌等宛

御書狀致拜見候、然之、亞墨利加使節井通辯官とも、去ル五日、蕃書調所に參着、病氣も大之快様子之る、先別段申立候義も無之、其餘相替儀無之旨、依る下田表出帆井江戸着迄之手續、別番壹通被差越、委細承知いゝ、備中守殿にも申上候、右御報可得御意、如斯御座候、以上、

三月十一日

岩瀬肥後守印

川路左衛門尉印

土岐攝津守様

永井玄蕃頭様

鶉殿民部少輔様

井上信濃守様

229780

猶以、使節病後出府之義こも有之候之付、鉢植物被下候處、殊之外相歡候由、爲心得御申越之段、承知致し候、以上、

〔水戸横山甚左衛門書翰〕○公爵徳川頼順所藏本
藩士横山甚左衛門書翰
御城書狀書拾遺所職

○三月五日同藩飯田總藏宛

飯田總藏様

横山甚左衛門

亞國使節今朝品川着船相成候處、鹽合不宜、上陸致兼候由之處、今夕迄之者、蕃書調所に到着可相成与之趣之御坐候、依之此段申上候、以上、

三月五日

尚々、昨日、〔松平頼胤、高松藩主〕直筋、彦根藩主〕松平伊賀守殿御宅に御呼出之振之承込候之付、申上置候處、今日營中之る、篤与承候得者、全く井伊殿より申込候御逢与申事之る、讚州様御出等無之との取沙汰之御坐候、此段御心得迄し申上候、以上、

〔横山甚左衛門書翰〕○御城書狀
書拾遺所職

○三月六日飯田總藏宛

飯田總藏様

横山甚左衛門

安政五年三月五日

101

制足輕 沓之様之もの

下供 同 同

此間五六間程

制足輕 革袋長柄

御徒

御侍

草履取

箱

御徒

御徒 御鑑 井上信濃守様

長柄

箱

御徒

御侍

長柄

箱

沓籠 下供 同 同

一使節通行之道筋、前日其筋々達有之、見通之小路々々迄掃除等入念、屋敷々々こと、立固
棒突之足輕差出一、辻番所こと月番放年番之家來貳三人ッ、肩衣等着用相詰、通行之
節、制足輕先拂、同所こと横小路より群集こと見物を留切、行懸之ものを片寄せ候なり、
一町方も同斷、横町々々之木戸こと、制足輕馳廻ルと、べさせ、人を留ル、鐵棒引數人差出、行

「ハリス」通
行ノ際ノ取
締

懸之往來を片寄、町役人袴羽織こと東西こと奔走、下こと居口、冠りものを取レ、と言ふぬ計
の勢こと御座候、
(近衛家書類)

六日^{壬午} 熊本藩主細川齊護^{越中守} 福井藩主松平慶永^{越前守}ノ申ネテ藩士横井

平四郎^{時存小楠}ヲ招聘センコトヲ請フヲ以テ、是日、之ヲ諾ス。

[熊本藩主細川齊護書翰] ○肥後藩國
史料所載

○三月六日^{癸丑} 松平慶永宛

横井平四郎事付る、先頃御斷、得貴意候通御座候處、其後右京大夫に御噂之趣、委細申越、
(細川慶順、熊本藩世子)
猶又縷々貴翰も被下、具こと承知仕候、強る御懇望之譯こと付、重る及御斷候も、却る失禮御座
候間、任御望其沙汰仕、平四郎儀用意濟次第差立、直こと福井表に罷出可申候、御用相立候ハ
、大幸之至御座候、何れ御心を被附、御試こと相成、御模様次第こと無御遠慮可被成御差返
候、無程着府、萬々御面話可仕と、草略御許容可被下候、以上、

三月六日

[松平慶永書翰] ○肥後藩國
史料所載

○安政四年十二月二十五日細川齊護宛

陳啓、扱者其御家來横井平四郎儀、弊國學館子弟輩教訓筋世話相頼度こと付、來冬迄拜借之

安政五年三月六日

横井平四郎
招聘ノ請ヲ
諾ス

儀、先鴻以野牘及懇願候處、逐一御承知被下、速に御許容被下候筈に候得共、同事人、教官之場を考至り兼候故、尙又厚御家老共へも評議被仰付候處、是以同様之趣申上、折角弊國へ罷越候も、用を相立不申御見込之者を被遣候も、重疊御不本意に付、不得止御斷之趣被仰下、猶又奥へも被遣候御書面も拜見、(辨口實、御本家老)藏人も屋敷へ罷出、錦地巨細之事情申達、是亦委縷承知、段々不一通御評議有之、御厚志之至、千萬奉感謝候、右様事を分ケ被仰下候儀を、押る及再願候洵如何に候得共、當今弊國學館生員、先達る呈書之折より考餘程相増、教官盡繁劇に堪兼、其上是迄教授申付置候高野半右衛門儀古稀餘之高年にて、逆も勤續出來兼候段頻に申立候に付、右平四郎儀も、必御許容、是非北行可相成儀と相心得、半右衛門先達る遂に願ふ任せ隱居申付候、爾來へ兼る乏敷教職に候得と、彌増繁務に候得共、平四郎北行而已を心樂みに待居候折柄、御斷之趣、段々無御據義とハ乍申、當惑之次第、國許家老共へも申越候處、愕然失望之至、且館中子弟迄洵、平四郎拜借之儀、粗傳承相待居候趣に候處、今般之義是切に相成候も、教訓之世話行届兼候と勿論、自ら子弟輩嗜方も薄く相成、館中之衰微、便國家之基業に關り、至重之儀も、憂勞之至に御座候、今度無據御斷、且御垂示之趣致承知候も、最早此上を強る可相願筋も無之哉と候得共、前顯之通、弊國にても實に無據次第故、何分此儘相止候と不相濟譯柄に付、被仰下候旨趣ハ篤く相心得

横井招聘ノ
コト成ラズ
大ニ困惑ス

居候條、平四郎儀御借し被下候も、學館子弟之引立方而已委任仕候積こる、學政向之議を、總教之家老共始、夫々役人共、爲取懸置候事故、決る朋黨相分れ候學論致蜂起候様之儀より至り不申、此儀を、小子始、惣教邊に深く相心得、定見も有之事に御座候、其上も萬々一、御懸念之筋へも可相運兆映も有之候得と、其儀を兼る十分心得居候得と、未發之處に平四郎之職務如何様にも一轉仕候も、其筋へ關係不仕様之所置も萬々有之、其内折能及返上候得と、自然教職之見込致相違候も、平四郎令名を墜候様之儀よと決る及せ申間敷、尤國家之妨害可相成候様より可相運様も無之候得と、此邊之議を、小子へ爲御任、御降心可被下候、何卒素願之趣、御聞届被下候様伏る奉希候、且又平四郎在留之爲、學館近隣土屋一軒爲明、待受之支度迄も相調候位故、今も相成無御據譯と乍申、御斷に願意不相違候も、卒爾に相願候小子之不明も相著れ、殆迷惑之次第、前書之通り關係も不輕候間、右等之邊野子心中御亮察被下、申上兼候得共猶又御再考被下、平四郎北行之儀御許諾之程、一向に相願申候、則先日白金へ參上之節、世子君へも委曲御咄申候、定る被仰越御承知と存候、右に再應勝手ケ間敷自由之儀相願候哉に御承知も可有之歟に候得共、實に不得止事情に候間、渴望之願意、幾重も御汲察被下、托る御容諾偏奉伏希候、右御頼如斯に御座候、謹言、

申不テ横井
招聘ノ承諾
ヲ請フ

安政五年三月六日

十二月廿五日

越中守様

御直披

越前守

一〇八

〔熊本藩家老書翰〕

○肥後藩國
史料所載

○二月十九日肥後藩溝口藏人宛

委細被仰越、御端書之趣共致承知、御本文之儀付るを、若殿様方御書被進置候處、越前様より上に巨細之御直書被進、此節ハ御除引不被爲成様之御文面に付、最早御借被進方に可被爲在哉之御沙汰に有、御返書振咄合候様被仰付候付、段々咄合、願曰ハ御斷之方可然と、兩議に取らへいいたし候へ共、未窺等之身に至り兼、此節迄ハ、逆も御返書出來被兼候、然處、彼方様にハ御急之事に付、自然ハ御催促躰之儀も難計候付、御手元之御取計に有、先頃猶又、太守様に御直書被進候處、御腫物に有被遊御難儀、御執筆も御難澁に付、定る此節之御使迄に、御返書出來可被兼段、程能〔中根、福井藩士〕靱負迄被仰向置候歟、又に彼方より之御模様に應、御返答に相成候とも、御不都合無之様御取扱被下度、自然、若殿様御對話等被爲在候とも、右之趣を以、御程能御取合被爲置候様、彼是宜敷様御周旋可被下候、已上、

横井招聘ニ
就キ福井藩
へ返答ノ件

二月十九日

〔熊本藩家老〕平野九郎右衛門申渡

○肥後藩國
史料所載

○二月二十九日横井平四郎へ

其方儀、松平越前守様より依御頼、御國元福井表に被差越候條、早々用意相仕舞候様、尤彼表學館御取建候る、諸生教導筋に付る御借受、當年中も御留被置候御模様に候條、此段も申聞置候様、御奉行所より申來候間、可被奉得其意候、以上、

二月廿九日

横井平四郎殿

平野九郎右衛門

〔熊本藩家老〕長岡監物書翰

○肥後藩國
史料所載

○三月十四日肥後藩原田八兵衛宛

一翰を呈申候、愈御精康恭賀仕候、小生義、無異御放慮可被下候、去秋以後ハ、絶る尊翰も不達、萬一ハ御異例共にハ無之哉と案勞罷在候、御老人様彌以御全快とハ相考候へ共、是又爲天下過憂仕候、扱墨夷登城以後之儀、實に不堪切齒儀而已に有、何共難盡筆紙、彼是御憂慮之程拜察仕候、最早堀田侯以下歸府に相成候哉、其後之光景如何哉と、所詮此節兩條之願に被差許に可致決着、何共恐入候事共に御座候、

横井チンテ
福井藩ノ請
ニ應ジ赴任
セシム

安政五年三月六日

一〇九

横井平四郎
福井ニ向フ

安政五年三月六日

一一〇

横井ハ英才
驕慢ノ人物

兼る御聞及も被下候徹藩横井平四郎、此度越前々御招き相成、一兩日跡之發足仕候、勿論同志之者之候へハ學論合兼、終之彼方不^(其方)□之罷成、近年ハ疎遠之御座候、於小生ハ、深キ存意も有之事之有、其儘之推移申候、此男ハ、徹藩までハ先傑出之人才之有、識見氣力ハ拔群之御座候、然共、長あれハ必短ある習ひ之有、甚行末を案勞仕候、此節之御招キ、徹藩之爲ハ申迄も無之、爲天下之過憂仕候處より、既に西郷杯にハ内話仕置候筋も御座候へ共、夫等ハ凡る跡事之相成、加様之相成候へ、只々寸分よるも越藩へ御有益を祈申候事之御座候、英才之癖之有、人を愚人と見、甚以驕慢なる男よる御座候間、一旦ハ必定越藩も大之興起可仕候得共、末ハ深く氣遣申候、何分橋本^(左也)列も能々心を附吳られ候様、御序も御座候へ、御密話可被下候、當時ハ専ら和之説を主張いたし居候由之御座候、尤加様得貴意候儀、當人承知仕候へ、却る不宜候間、其處ハ御含可被下候、小子も疎遠之相成候者、却る都合宜筋も有之、^(約四字不明)□□□何卒徹藩之有雲霧散し、同人被用候様有之度、種々心配もいたし居候處、此度之御招之應候へ、彌上下之人心之被疎候筋之相成、最早同人徹藩之有ハ、開運ハ實之覺束なく、遺憾此事之御座候、併し此上ハ、是等之事ハ無用之儀之有、只々しきを着て歸郷仕候日を祈居候事之御座候、定る御地よも出府可仕、何卒御面會被下、論説も御聞取被下候、彼是御教示をも相願申候、尊藩御内輪之儀者、去秋以後如何哉、彌奉卦

横井ハ熊本
藩ニ用ヒラ
レズ

之至候哉、此儀深く爲天下奉案勞候、右尊藩之御内情と、方今廟堂之光景、日夜過憂罷在候之付、何卒密之御志らせ被下候様奉希候、先々右要用迄得御意度如是御座候、猶期後日候、謹言、

三月十四日

長岡拜

原田君玉机下

二白、御老父様之ハ、別段書翰呈し不申候間、吳々宜奉願候、西郷着府之義も未承、定る壯健と奉察候、是亦書狀日夜相待申居候得共、未達過憂仕候、御面話之節、宜敷奉願候、以上、三白、當地極々不順之季候之御座候、御地も同様と相考申候、爲世道折角御自愛祈申候、以上、

〔福井藩士〕中根鞞負書翰

○橋本左内宛
全集所載

○三月十八日

略、昨十七日、細川侯之執政溝口藏人罷出、小拙及應接候處、申述には横井平四郎儀御所望に付、御斷り被仰上儀も有之處、再應之御直書に、段々の御趣意、且平四郎爲人篤と御承知にて、不都合に相成候節の御取計方迄、委細被仰進、且白金へ被爲入候節、右京大夫様へ被仰入候御口上と申、何分無御據御次第に付、此上被任御所望御貸被進候段、申上候様被仰

安政五年三月六日

一一一

安政五年三月六日

一一二

相越候、御直書にても御返答可被仰上筈に御座候、且又、同役よりも諸事篤と御承知御斟酌之上、被仰進儀に候へば、此上御斷り被仰上候ても、却て御不本意の御儀に付、被任御所望候へ共、吳々申上候人物の事に候へば、萬端御目長に御見直し被下、不都合の儀は如何にも御教誨之上、御叱被下候様相願候趣申上候様、申越候段も申述候、右之付、早速申上之上、押て御願之所、被任御所望、御満悦御本懐之段、御挨拶之趣申聞罷歸候、箇様にもろくは參るまじくと存候處、思ひの外速に御承引、平四郎儀は當月下旬熊本出立、福井之方へ罷越候由に御座候、仕宜により、於錦地御面會にも可相成哉とも被存候、付釣に大鯰かゝり候心地にて、御國表へも早速可申遣と奉存候、何にいたせ、錦地の埒早く付候はねば不都合のみ有之候、○中略、

横井招聘ノ
コト成リシ
ヲ喜ブ

三月十八日

雪 江

景 岳 老 兄

○三月二十三日橋本左内宛
〔福井藩士近藤了介書翰〕○橋本左内全集所載

一筆啓上仕候、暖和之節御座候處、先以

上々様益御機嫌能遊御座奉恐悅候、隨る彌御安剛被成御盛務奉恐賀候、次に小生無爲消

光仕候間、乍憚尊慮易被思召可被下候、扱過日上京中は段々御懇命被成下、御影にて首尾能御用途相辨、誠に以て難有奉深謝候、則、去る十八日、無難歸郷仕り、御用狀直様相達、委曲演說仕候間、御放慮可被成下候、其後廿三日、道中六日振にて、飛脚被指立筈に御座候、且、御留守様へも參上仕、則、御母公様へ御對顔の上、始終御傳言申上、御狀等指上候間、御安堵可被思召候、然る處、當廿三日發途にて、又々上京被仰付、則、今晝着仕候處、其御表へ御首途に相成、當惑仕候、併、廿八九日頃には御歸洛之由承り安堵仕候、尤、急々拜謁可申上、外御用途にても無御座候、先御手續之義に御座候、此度も御用狀二通、御留守様よりも御宿狀、並に御品物等御座候得共、何事も御歸京之上と、業と指扣居り申候、尤、御留守へも參上仕候處、御尊母様益御健に被爲渡候間、吳々御安心様に奉存候、且又、横井先生去月廿八日頃御暇にて、當月十一二日頃彼地發途にて、廿七八日頃大坂へ着岸の趣、村田様・(三郎)悌藏氏連名にて申來、則村田様御含にては、一旦京地へ御滞留爲致、此度の一條御相談有之候て可然の御傳言に御座候處、幸に貴君には其御地御首途之義にも候へば、於其御地御面會有之候て可然と奉存候、何れ横井公には牧村清左衛門方へ被罷越手筈に申來有之儀に御座候間、則清左衛門方へも、野生よりも右之御都合に取計ひ候様申遣置候間、左様御思召可被下候、且御國表よりも三岡石五郎殿、當廿五六日出立にて、關東の方へ被罷越、其

横井ト京都
ニテ面會ヲ
希望ス

安政五年三月六日

一一三

節京師へも爲立寄候様、是又、村田様より御傳言に御座候、右等委細之義は御用章中に可有之御儀と奉存候、右は任急便不取敢大略申上候、委曲之儀は、拜謁之上萬縷可得貴意と、文縮如茲に御座候、恐惶謹言、

三月廿三日

近藤了介拜

橋 左 内様

侍史中

七日癸未 權大納言中山忠能ヲ議奏加勢ニ補ス。

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

三月七日、癸未、晴、議 奏當番萬里小路大納言殿宿退出、加勢中山大納言殿其外參集、久我殿・坊城

坊城殿等、傳奏兩卿、參侍、

一 左府公・内府公・左大將殿・二條大納言殿等、御參、

中山大納言

一 議奏加勢被 仰出之旨、奉行西洞院殿被申渡、令壁書畢、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

三月七日、癸未、晴、當番議奏萬里小路大納言殿宿、加勢中山大納言殿其餘參集、久我殿・坊城

中山忠能ヲ
議奏加勢ニ
補ス

殿不參、傳奏衆、參侍、

中山大納言

一 議奏加勢被 仰出、

〔菅葉〕○五條爲定日記
宮内省圖書寮所藏本

三月九日、乙酉、晴、○中自竹屋三位、回文到來、中山大納言議奏加勢被 仰出之旨、萬里小

路大納言被申渡、一昨日、冷泉宰相被演說之趣、被示、○中觸出于相番中、

〔廻文備忘〕○伯耆橋本
實顯所藏本

三月十一日、從高松到來、

中山大納言

從今日議奏加勢被 仰出候旨、萬里小路大納言被申涉候趣、冷泉宰相被演說候、尤番々

且小番未勤之親族中ニ淺、可申傳由之候、仍申上候也、

公（武者小路） 香

三月七日

竹屋 三位 殿

右到來之儘、入見參候、御回覽、、、也、

同 八日

光（竹屋） 有

右之通被示候、仍入見參候、、
、
、
、
、
也、

同 九日

(五條)
爲 定

權大納言中山忠能議奏加勢・權中納言正親町三條實愛・同正親町實德・參議
八條隆祐・同中院通富・同橋本實麗・同野宮定功、連署シテ條約調印ニ
對スル勅裁ハ、申ネテ諸侯ノ意見ヲ徵シ、而シテ後ニ決セラルベキヲ
建白ス。

〔權大納言中山忠能權中納言正親町三條實愛等建議書〕

○公卿徳川慶親所藏本
防海雜誌所載

○三月七日武家傳奏へ

夷族申立之件、誠以 神國重大之變異ニ付、愚昧之者共恐入候得共、先日兩度以書取申上
候、右追々御評定之御事ト存候得共、實者晝夜憂苦忘寢食候間、亦々令言上候、

一天照皇大神宮以來、赫々タル 神國、當御代ニ而、蠻夷ノ國ト伍ヲナシ候而者、神國之
汚穢御瑕瑾、被奉對

皇祖、何共恐懼歎息之至候、近年連々天災、偏ニ 神慮ヲ可被尊信儀ト存候、

一堂々タル 皇國トシテ、蠻夷ノ猛威ニ驚嚇シ、彼ノ驕傲不禮ヲ捨置キ、申條ニ隨從シ、禮
待應接奔走ニ暇ナク、天下萬世ニ恥辱ヲ遺シ、萬王一系ノ神國ヲ、一漁落販叢ニヒト

蠻夷ト伍ス
ルハ神國ノ
瑕瑾

幕府ノ措置
當テ失ス

シク心得候征夷家ノ所置、イカナル狂妄ノ徒ノ商量ニ候哉、今度

叡慮伺ノタメ、面々上京ニ付、御沙汰之趣ニモ不應カ、一切意味難解、若 京都御同意之

趣ヲ以テ、列國ノ大小名以下萬民ヲ押候積カト被存候得共、眞實 御同意不被爲 在儀

ハ、何レモ不貫徹、却テ關東之爲メ、衆心ヲ破ルノ基歟ト不審ニ存候、

一 墨夷一使者ノ應接スラ、強情不容易由ニ候ニ付、尙更心苦仕候、子細ハ、此上諸蠻追々來

集シ、表ニハ互市利潤ヲ説キ、實ハ所欲ヲ極メ、拒メハ、大砲軍艦ヲ以テ、恐嚇セシムル

ノ夷情、本ヨリ 日本ヲ併呑シ、國人ヲ籠絡ノ結構ニテ、追々姦謀遠慮ニ陥レ、夷族所々

ニ散居シ、好言利欲ニテ、吾國民ヲ誘ヒ懷ケ、彼方ノ教法ニ從ハシメ、能ク人氣ヲ察シ、

地理要害ヲ知り、方々ニ巢窟ヲ構置キ、終ニハ許カタク難題ヲ設ケ、兵端ヲ開キ、 皇國

ヲ押領スルノ時ニ至リ、何ヲ以テ敵對スヘク哉、タトヘ兵端ヲ不開トモ、右之通ニテハ

所謂不奪不厭ノ夷情、廣大ノ猛威ヲ張リ、隨意ニ 皇國ヲ脅制スルノ時ハ、不戰シテ降

參ノ場ニ至ルヘク、 神國ニ生レテ、匹夫ト云トモ、口惜次第ニハ無之哉、況從來大祿ヲ

領スル諸藩、至誠之赤心承度事ニ候、且右之場合ニ及フ節ハ、 乘輿ヲ何ノ地ニ奉安、大

樹公以下致條約候輩モ、亦何ノ地ニ逃レ、被安居候心得ニ候哉、關東始諸大名之見込、詳

ニ被 聞食候上、御返事御沙汰肝要ニ存上候、

安政五年三月七日

外夷ノ野心
恐ルベシ

更ニ諸大名
ノ意見ヲ徵
スベシ

安政五年三月七日

一一八

右等毎々恐入候得共、奉爲國家存候間、不願忌諱言上仕候事、

三月七日

忠	實	實	隆	通	實	定
能	愛	德	祐	富	麗	功

(墨夷一條書留 高麗環雜記 遇
得卽錄 海防秘聞集 風說書)

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕

○橋本實麗手記
伯喬橋本實麗所藏本

三月六日、壬午、雨、依他事、中山爲面會、未剋計參內處、去月廿三日、被仰遣候御返答、昨日到來今日披露之處、意外之返答、或卿內々被爲見、○中

七人連署建
白ノコトヲ
談ズ

(二月二十五日、條ニ收ム)右二紙、從或卿內々被爲見、文體意外之儀之、依之先日以來兩度及建白之輩七人同心連署ニテ令言上之條示談、且又、有志之面々有之由相聞之間、(一條家)桃花御門流人々江も於有之者被差出候様可達旨中山亞相被示之間、予、清水谷・大原・飛鳥井等之亭向申入、從大原又夫々

可被申入旨、申示了、入夜、從三條黃門書狀到來、右一件ニ付、明日辰半迄ニ可參之旨被示了、

三月七日、癸未、晴、辰斜參內、同時參上人々、中山亞相・三條黃門・正親町黃門・八條相公・中院相公羽林・予・野宮相公羽林等示談之上、連署一紙附屬武傳兩卿、又別段同文一紙內々附屬于議卿、此儀有子細、文體讀左、

夷族申立之一件、誠以神國重大之變異ニ付、○中

右差出シ候處、被落手、議卿示談之上、左候ハ、今度關東江被仰遣候書取案、銘々所存之通書付可出旨被示之間、三・四通書取差出、

〔橋本實麗日記〕

○東京帝國
大學所藏本

三月六日、壬午、雨、○中次參內、今日中山亞相當直之間、於彼卿爲謁桃花御拜賀一條之、之、然而、墨夷一件ニ付、去月廿三日、被仰遣候御返答、昨日到着、今日披露之処、意外之事之、此儘ニ而者、彌不容易ニ付、過日已來、兩度建白之輩申談、乍不及、同心ニ而又々言上之儀令談合、且又、有志之人々可有之間、門流迄差出、殿下江被達候様之事、示談相調、夫々可通達ニ付、予、清水谷・大原・飛鳥井等行向、申入、各承諾了、酉剋計歸家、從三條黃門、明日辰半剋比、可參內之様、中山被催促之由被示、承了、右、墨夷事件別記、

安政五年三月七日

一一九

關東ヘノ勅
答案ヲ提出
ス

七日、癸未、晴、辰斜參内、同時被參之人々、中山亞相・三條黃門・正親町黃門・八條相公・中院相公羽林・予・野宮相公羽林已上七人、各建白及兩度之輩、等同心、所存注一紙連署、附屬于兩役、亦演舌ニ及之処、兩役評定上、今度關東へ被仰遣之文意所存、云々草稿書取之樣被示、各存意書取、武傳卿へ相渡了、退出、次花山院亭向、酉剋計歸家、實梁卿同上存意、桃花へ差出了、傳聞、陽明御門流四五輩、同上云々、傳聞、權亞相議奏御役被上表、云々、

〔野宮家文書〕○子爵野宮定毅所藏本

三月七日、去月下旬、川路左衛門尉・岩瀬肥後守演舌書、并條約和文下案等、武傳ヨリ回覽ニ付、再應所存一紙、附屬武傳之處、今以無披露旨傳聞、仍右人々、忠能卿・實愛卿・實德卿・隆祐卿・通富卿・實麗卿・定功等七人、申合、更所存一紙連名書整、今日附武傳、

○參考

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本
中山忠能願歷資料所藏

二月廿五日、○中略

- 一 依命、向三條家、内府面會長談、
- 一 西城人休事、一橋、座主方 上へ申上、殿下へ之事、
- 一 夷種拒絶、不得止 叡旨書追加事、附、是、最初ノ毛、其密々方申大名事、
- 一 武傳二人止ノ事、

一 夷族へ再掛合之節ハ、輕重共、必大々名へ京都警固示事、

二月廿七日、大般若經轉讀了、依示向萬里小路家、實愛、同席、有内話之旨、依宗典存書付、廿六日朝、亦廿三日、 叡旨書取如左、且兵庫之事、京警固之事、行々見込之事等、有掛合由被示、兵庫以下之事、甚不可然、唯大名建白之事計、可有御沙汰存之旨、再應申合了、

二、廿八、萬馬家へ送、

蠻夷下條約締結ノ件

蠻夷依申立和親之上條約下案等 叡覽被爲在候ニ付、猶又三家始諸大名之所存更被 聞食度由、去廿五日、以書取申入候處、於諸大名ハ、舊冬於關東被開糾候處、、
、
、之外ハ、夷情ニ隨從之方同意ニ付、再御尋有之候共可爲同候旨被示聞、一應言上候處、右之次第ニ候ハ、可爲同斷哉ニ候へ共、元來夷國之儀者、御先々代ヨリ、深被惱 叡慮、毎々關東へ御沙汰之次第も有之、全体之處、皇國を輕蔑致候譯ニテ、神國之耻辱、神宮を始、神武天皇以來、御代々エ被奉對、誠以歎 思召候 叡念ハ深重之御事ニ候、依之三家始諸大名、是迄存念建白も可有之候得共、實ニ國家之大事此時ニ候間、先文深以歎 思召候 叡慮之趣、夫々江委細被申聞、爲國家各不憚忌諱、眞實之存念、書取ニテ 叡覽被爲在度、御沙汰候事、

但、最初和親不承知、追々發明會得之輩、當時十二八九ニ相成候由、尤固陋之論ニ被爲泥候儀ニハ、一切不被爲在候へ共、何分 神國重大之事件、當 御代ニ被改革候儀、深被惱 叡慮候間、本文之通被 仰出候事、

前權中納言五條爲定・正五位橋本實梁・左近衛權少將千種有文、各外交ノ措置ニ關シ、意見書ヲ權大納言一條忠香左近衛權大將ニ提出ス。尋日十正三位愛宕通祐、マタ同ジ。

〔前權中納言五條爲定意見書〕

○宮内省圖書寮所藏本
菅葉所藏

○三月七日權大納言一條忠香へ

近年亞墨利加使節毎々渡來、追々申立有之、諸港開發一條應接不容易候、元來外國通信交易之義被差止候者、當時之人心ニ相叶可申、若時勢不得已儀ニ候共、兵庫一港者、是非被相止度、縱止不止之義ニ差置、何分 皇居御手薄之義ニ付、國躰ニ相拘り可申候間、分諸大名之半、京師ニ爲致參勤、皇居警衛堅固ニ無之ると眼前不安心之義存候、此義も難相成候者、總林開港之義被差止度存候、此旨可令言上于 〔一條忠香〕 左大將殿給候也、

三月七日

爲

定

一條 殿

諸大夫中

〔正五位橋本實梁意見書〕

○伯耆橋本實梁所藏本
橋本實梁手記所藏

○三月七日權大納言一條忠香へ

墨夷條約一條ニ付、嗚呼ケ間敷、且恐多キ儀ニ御座候得共、微志言上仕候、抑嘉永六年、和親條約相整、於下田テ被開港候節、從東武言上有之候得者、其節既ニ公卿建議ニモ可被爲及之處、其儀不被爲有候ヲ以相考候得者、言上無之儀与被推察候、全躰大樹公ヲ始メ諸役

幕府ノ朝廷ニ對スル態度當テ失ス

外國ノ野心

人共、如何様所存ニ有之候哉、御國內之御政事者、元來御委任之事故、如何様共所置可有之歟ニ候得共、此度之儀者、蠻夷各國ニ相拘リ、誠ニ國家之一大重事ニ候間、不依事之巨細、一々言上、被伺 叡慮候上、取扱可有之儀与奉存候、將又、今度數港開置之儀、略條約爲相濟、調印之場合ニ至リ、御國內人心不居合候而者、内外如何様ノ禍端ヲ引出シ候哉モ難計杯、驚シケ間敷言上、殊ニ從最初、堀田備中守ニテモ可被差登之處、林大學頭・津田半三郎如キ者ヲ以言如何様之心術ニ有之候哉、甚不當之儀与奉存候、且又、此度今一應三家以下諸國士共赤心以書取可言上、被下台命候様被 仰遣候由ニハ、候得共、當時之形勢差支有之候トテ被拒候哉モ難計、自然被相拒候者、何卒再應推而被 仰遣候様仕度候、其上ニモ相拒候テ、最早御直ニ 勅問被爲有候而モ不苦儀与奉存候、何分今ニ至リテハ、諸國士之居合方肝要之儀ニ御座候間、是非共、爲書取 叡覽被爲在度候、且又、傳承リ候ニハ、墨夷計略、先交易ヲ階梯トシ、要所ニ港ヲ爲開置、兩三年四五年之間、專ラ利ヲ啗ハセ置、吾國人怠緩ヲ生シ候時節ヲ待合セ、追々彼港々ニ要害ヲ構ヘ、遂ニハ併吞之志氣顯然候之由、殊ニ外國ニテモ、ケ様之先蹤近ク有之候趣、前車之戒可恐儀ニ御座候、且又英吉利人モ、日本ハ小國ナレトモ足溜リ無之候而者、容易ニ手指難相成由申居候趣、近年相渡リ候蘭書ニモ記シ有之候由、又彼條約文中ニモ、往々 皇國輕蔑仕候意味モ相見ヘ候得者、從

安政五年三月七日

一一三

幕府開港ノ
請ヲ斥ケ下
田港モ閉ツ
ベシ

安政五年三月七日

一一四

神國ノ威風
ヲ顯スベシ

東武如何様言上有之候共、一港モ開ク間敷、最初相開候下田ヲモ閉候様、急度被 仰遣候
様仕度、當時吾國人心、上下共賄賂ヲ要トシ、貨幣ニ不飽氣合ヲ、彼夷能知察シ申立候儀、
誠ニ笑止嗟歎言語ニ盡シ難ク候、何分東武年來之治平ニ相泥ミ、是迄大炮・軍艦等用意、并
ニ軍法・訓練之儀敢無之、是比之場合ニ至リ、皇國年來ノ兵法・軍學ヲ不被用、西洋流之
炮術等訓練・教習等專有之候由、是乃本ヲ外ニシ、末ヲ内ニスル之弊共可申候歟、既ニ是
迄ニモ、諸蠻一變之形勢ヲ察シ、古來之御制度而已ニ不被爲泥、何卒攘夷之御備專被爲在
候様申出候者モ、度々有之由ニ候處、夫等之忠言ハ、不被採用、奢侈聚斂而已ヲ專一ト致シ
來候情弱臭族ニ被爲泥候而者、諸國士之 朝廷ヲ敬崇仕候意薄ク相成、 皇國御復之期、
彌被爲在間敷、東武之爲ニモ却而不宜儀、内亂ヲ引出シ候基歟与深ク痛歎苦心仕候間、不
顧恐言上仕候、何卒 神國之御威風、彌相顯シ、且東武征夷之本意益相立候様、偏ニ 聖斷
奉仰願候事、

實 梁

〔左近衛權少將千種有文意見書〕

○維新史料編纂會所藏本
伏見宮侍御牧家諸留所藏

○三月七日權大納言一條忠香へ

墨夷交易之儀、從先年度々相願立居候處、彼是應接も有之候趣風聞承候る、愚昧之於 有文
淺、如何と心痛仕居候折柄、過日何者之所業於、壁内に投書仕、不計披見仕候處、意外之文

投書ニヨリ
人心ノ不穩
ヲ知ル

通商拒絶ノ
聖斷アルベ
シ

体驚入候、併、全之虚言とは被存候得共、何分是与申淺、兎角世上之人氣不穩故起候儀と
被存候、是彼存合候こと、何分右交易之儀、不被許方專要候哉、尤深意と不存候得共、先
年於下田被開港候所、無間も、亦此度諸港願立候條、聊るも於有御聞届と、後々追々強情
相募、且何行邪法、引入人氣、終ると異國之風儀と押移らと候様儀も相成候ると、實
に歎敷、乍蔭日夜手こ汗を握存續居候、既今度夷人願意通と相成候ると、後患如何計於
難計、且世界之人氣淺不應哉、扱亦不被許候と、忽發兵端候儀候哉、誠こ以、御大事之場
所、不容易儀、被惱 叡慮候御事、何共恐入申上方無之、乍去何と共治り不申候儀候へ
と、速不被許方、 神國之御威德并 聖決之程一同奉仰、畏可奉存候、種々
聖斷淺可被爲在候處、無左と蝸牛之身こる越樽ケ間敷ケ様之儀申上候段、誠こ以不顧恐之
至、深心痛仕候得共、余り心中不穩候と付、申上試候、何卒御勘考被爲在候様偏相願候事、
追件之投書と、久我家に直と差出置候事、

三月七日

有 文

一條 殿

諸大夫中 言上

〔菅葉〕

○五條爲定日記
宮内省圖書寮所藏本

安政五年三月七日

一一五

一條家門流
ニ外交意見
アラバ一條
忠香へ提出
スベキ旨ノ
内達アリ

三月六日、壬午、晴、深更雨、當番依所勞不參、源三位重德來、今度亞墨利加一條不容易儀
付、參議以上現任之人に御尋有之、所存被申上候得共、前官并散三位以下に御尋も
無之故、所存不被申上候、乍去面々歎ケ敷ク存儀候間、一條殿御門流之中、所存有之人
に、以書取明日午剋迄、一條殿に可差出旨、中山大納言噲之由、被傳了、清岡・桑原等
來、

七日、癸未、晴、墨夷一條愚存、以爲榮差出于一條殿、小奉書四折、以濃紙封之、

○意見書ハ上ニ掲ゲ
ルヲ以テ之ヲ略ス。

前式部權大輔長材・桑原新三位爲政等來、亞墨利加一條書取之義被談、

〔橋本實梁手記〕

○伯備橋本
實顯所藏本

三月七日、是度、亞墨利加使節國書ヲ呈シ、和親通商ヲ乞フニ因テ、大樹ヨリ 叡慮ヲ伺ヒ
申サル、國家ノ大事タルニ依リ、先日現任ノ參議已上ノ所意尋下サレ、各不可許之由答へ
申サル、而シテ、朝議猶決セス、故ヲ以テ、桃花門流之中、所意アルノ人ハ、書付桃花へ差
出スヘク中山亞相噲之由、昨夕、家君示給、予愚昧ノ質、事理ヲ辨スルコト能ハス、且弱冠
ノ身、嗚呼ノ恐不少トイヘトモ、聊所意ナキニシモアラス、因テ愚意之分書付、本書四ツ折、與
乃紙ヲ以テ表ヲ封シ、參桃花リ、雅樂頭則賢朝臣ヲ以テ申入之處、只今御參朝ノ間、然リトイ
左ノ下ニ名ヲカケ、

外交意見ヲ
一條家ニ提
出ス

ヘトモ、於彼儀ハ、預メ命シ置カル、早々殿下ニ進スヘク答示、依一紙附屬シ畢、又此御方
ヘモ、寫一通進スヘク示ス、明朝可差上答畢リ、直ニ歸家、即一紙左ノ如シ、

○意見書ハ上ニ掲ゲ
ルヲ以テ之ヲ略ス。

傳聞ク、先日 仰遣サル、處ノ、神宮御始御代々へ對セラレ深ク恐レ思召シ、且人心居
合ノ處如何ト思召スニヨリ、今一應三家已下諸大名赤心被聞食度トノ儀ニ付、關東ヨリ返
狀申サル、其文、神宮御始メノ事、何共御請申サレス、三家已下諸大名赤心被 聞食度
儀、御尤ニ候得共、人心居合方ノ儀ハ、於關東如何様トモ引受ラルヘキ云云、如此ノ返狀、
誠ニ不敬驕慢ノ甚シキカ致ス所、憤恨切齒シテ不止モノナリ、然トイヘトモ、暗將奸夷所
意左モアルヘキ事歟、無論、

幕府ノ奉答
書不敬ヲ極

〔六角博通雜記〕

○子爵東園
基愛所藏本

三月六日、晚、野宮相公羽林（東園基愛）方東羽林（東園基愛）へ被示、則以回文 家君（六角博通）に被申上、今度亞國一件、風
聞も可承居哉、付るハ前官且殿上人あり共、存念可申述旨中山亞相被示由、所存於有、
桃花に差出、明日午剋迄可差出旨之、誠火急、風聞も睨与無承知義故、何も申上様無之
旨、野宮に御答之、

安政五年三月七日

一一八

〔高辻以長日記〕○子爵高辻 宣騰所藏本

三月八日、晴、巳半比方曇、○中略、

一異國異乱ノ企ニ付、

先日殿下以下近衛殿御門流公卿計ハ疑攝家何レ方被蒙仰疑ニモ、又一兩日前、中山大納言ハ、

傳奏東坊城前大納言聰長卿・五條前中納言爲定卿・清岡式部權大輔長熙卿・桑原新三位博士爲政卿等へ、又候異國追討否之事、今一人、博士在光卿、不被仰下哉、

勅問之旨傳承、尙有違哉、深恐有異矣、

〔正三位愛宕通祐意見書〕○伏見宮侍御 牧家隆置所藏

○三月十日權大納言一條忠香へ

墨夷使節交易之儀、從先年每度種々願、既ニ此度願出候趣意風聞承候處、誠ニ以不容易儀、殊ニ所々ニ開港之儀ニ、

皇國汚穢、神慮之程恐懼嘆息之至ニ候、若被任其儀候時、莫大變異奉重 御國候衆心不和混亂難量、自然被惱

叡慮候期ニモ移行候ルニ深奉恐入候、從來任 御國給候大小名之建議備被爲 聞召候上、聖斷被爲在候ニ、諸國彌堅固靜謐ニ相成、 皇威倍可奉尊信ト乍恐奉存候、愚昧通祐不願恐

諸侯ノ意見ヲ徵シ聖斷アルベシ

謹奉申上候事、

三月十日

通 祐

〔條思等〕權 大 納 言 殿

下手渡藩主立花種恭出雲守 石炭拾萬斤ヲ幕府ニ獻ズ。

〔安政年錄〕○内閣記録 課所藏本

三月七日、

石炭十萬斤

立花 出雲 守

右、以使者差上之、於檜之間、謁〔本莊宗秀、宮津藩主〕松平伯耆守、

〔水戸 御城書海防部〕○公爵徳川 昭順所藏本

三月七日、

石炭拾萬斤

立花 出雲 守

右、以使者差上之、於檜之間、謁御奏者番松平伯耆守候、

〔湯蠻雜纂〕○水戸藩記録 公爵徳川 昭順所藏本

三月七日、

石炭拾萬斤、

立花 出雲 守

右、以使者差上之、云々、

安政五年三月七日

一一九

立花種恭石炭拾萬斤ヲ獻ズ

八日^甲申 幕府、書院番柴田善一郎・鐵砲玉藥奉行木村董平ヲ以テ、代官
信濃 管地 ト爲ス。

〔安政年録〕<sup>○内閣記録
課所藏本</sup>
三月八日、

御代官

御書院番
酒井壹岐守組
柴田善一郎
御鐵砲玉藥奉行
木村董平

柴田善一郎
木村董平ヲ
代官ト爲ス

右被 仰付旨、於御右筆部屋椽頰、老中列座、大和守申渡之、若年寄中侍座、

〔松平忠固日記〕<sup>○子爵遺澤
榮一所藏本</sup>

三月六日、

一四ッ御太鼓^{○中}ある出宅、

一登 城四半に貳寸前、^{○中}略、

一廻り出懸、松溜に列坐、御留守居に自分々左之通相尋、

御鐵砲玉藥奉行木村董平、御代官杯に場所相應之もの^{○中}候哉、 答

代官任命ニ
就キ證術ス

病身^{○中}こと無之哉、

答

心障之義無之哉、

答

承置候旨申達、同席御書院番頭酒井壹岐守に自分々左之通相尋、

其許組柴田善一郎を御代官に被書出候、場所相應之もの^{○中}候哉、 答

病身^{○中}こと無之哉、 答

心障之義無之哉、 答

承り置候段申達、夫々廻り、詰衆伺御機嫌相濟、一同引、^{○中}略

八日、

一四ッ御太鼓^{○中}ある出宅、

一登 城四半に二寸前、^{○中}略、

一廻り出懸、^{○中}略、御右筆部屋椽頰に列坐侍坐、

御代官

御書院番
酒井壹岐守
柴田善一郎
御鐵砲玉藥奉行
木村董平

安政五年三月八日

一三二

何淺勤候内、並之通、御足高被下、

右月番申渡、略、中畢る月番を外席有之、外を引、

福井藩士中根靱負師質。水戸藩士安島彌次郎信立。一橋家小性平岡圓四

郎中ノ邸ニ會シ、一橋家主徳川慶喜刑部ノ大將軍繼嗣タルヲ固辭スルノ

意アルニ就キ密議ス。

〔昨夢紀事〕

三月八日、略、中

一、此夕、平岡圓四郎か許へ招かれたり、此ハ安島彌次郎か、徳川慶喜、水戸藩主當納言卿の簾中の御迎とし
て、近き程に上京せる故、餞別之宴を開けるよしにて、彌次郎ハ、師質に先立て往て居れり、
兼る彌次郎か上京せる後、水府の機密を談すへき人を申おくへきよしを議したりしに、其
事を老公へも申上たる由にて、當時老公の御小姓頭取にて、奥御祐筆を兼たる、茅根伊豫
之介といへるは、文學も壯年輩中の舉白つゝにて、沈着篤實の人物なれハ、何事を打明しても、
心おかれぬものにて、老公も寵任し給へるちれハ、彌次郎か留守の程ハ、此者に申談せよ
といへり、さて彌次郎ハ、師質かまた往かぬほとに、圓四郎と申談せし事の中に、三ヶ條の
緊要ありと聞えて、彌次郎か醉中の忘却を恐れたるにや、酒宴之間に、圓四郎ハ、しばし

中根安島平
岡圓四郎ノ
邸ニ會ス

彼三ヶ條を、出立前にといへる事をいひ出したりしか、酒漸く酣になりたる比、又申出、就
中一大事の件をと、懇に説話に及ひぬれと、師質は關る事にもあらねは、聞くともなく傍に
黙止在りしを、彌次郎氣の毒にやおもひけん、師質に向ひていへるは、かく迄大事をも語ら
ふ中にて何の隠し申事の候はん哉、いまた來まさぬ間に、圓四郎と申合ひぬる事も、尊藩
へ御苦勞の儀を願はんとの談合にて候也といへる故、師質前々方別段の御懇家と申、近來
ハ殊々御親敷御事にて候得ハ、何事にもあれ、適ふへき事にたに候は、承候はんと申た
りしに、彌次郎、イナ弊藩の事を頼み參らせんとの事にハ候はず、天下の爲に、尊勞を願ひ
奉り度こそおもひ奉れといへる故、夫なれハ更に當りかたき事ある上に、内證殊之外六ヶ
敷候へハ、長く在府なと致候半にハ、殆困窮極り可申こそ候へなと、種々難澁せしかハ、兩
人のいへるは、事別る尊勞もあらせらるへき御事なれハ、御勝手向の指支へぬほとこの事は
なくて適ひ候はねハ、御心に懸らるゝまでも候まし、唯御不才杯の故を以、今更御謙遜な
とあらせらるへき事とも覺え候はず、太守公の御素志ハ、天下の御爲に、橋公を立らるへ
きとの御事なるに、橋公已に御固辭の際になりて、公も御避遁あらハ、天下は如何相成
へきや、橋公を立られんの思召御眞實ならむには、公先つ宰輔に登り給ふべし、天下の爲
に、公議を執行給へる名公の御一身の故を以て、一簣に其功を空敷ささせ給ふ如き御未

慶喜ノ將軍
繼嗣固辭ニ
就テ議ス

安政五年三月八日

一三三

練なる事ハ、いかてかはあるへきと、正論を以て強辨し、師質に口は明けさせず、果ハ是迄
 隠然たる御周旋の御功力さへ、如此盛大を極め給ふあれハ、現に大任に當らせ給ひての御
 鴻業の程もおもひやられて、翹望に堪へ候はずなといひ出て、在延の諸有司なんとも悉く
 依頼し奉りて、此事を仰欽せるよしを物語れり、師質ハ論ふへき辭も塞かりて、いふ事もな
 くて止め、師質情兩人のいへる様を考るに、圓四郎か三條中の一大事といへるは、橋公の御
 辭讓、次第に事六ヶ敷なりなんにハ、水老公も彼是御言副らる御運にも相成へし、其節老
 公の御心付として、公を御後見に舉給ひ、夫によりて橋公も御請に及はるへき様に、老公
 の勧めものし給はん事を、彌次郎と密議して、もし彌次郎か在らぬ程に事の爰に及ひたる
 時、老公のよく御心得ありて、しか議らひ給ふへく、彌次郎か申上置けといへるなるへし
 とそおもはる、圓四郎か工夫、周密にして、此策を老公へ獻せし事、師質か推量、恐らくハ命
 中なるへくおもへは、翌日其由を公へ申上たりしに、もしさる事となりなんには、如何に
 かはせんと、限りなく憂ひ思召御旨なりき、

〔徳川慶喜談話〕○子爵澁澤榮一所藏本
昔夢會筆記所載

予を、御養君となさんとて、種々周旋する者ある由は、かね／＼諸方より聞き及べるのみ
 ならず、（松平慶永、蘭井藩主）越前守及川路左衛門尉・岩瀬肥後守、又は（忠愛目付）松平薩摩守などよりも、同じ意味よりし

て、學問の必要なること、身體を大切にすべきこと等につきて、注意を受けたることあり、
 且圓四郎よりも、切に御養君たらんことを勧めたれども、西丸へ入りたりとも、何の見込
 も立たねば、固く之を辭したり、但、圓四郎が、越前守を後見たらしめんととの條件を以て、
 勧めたることはなかりしと覺ゆ、又「伊賀・大和に斷りて濟みたり」といへりとは虚説
 なり、尤も堀田備中守へなりしか、（宗廟、備中守）本郷丹後守へなりしかは記憶せざるも、御養君一條は、
 固く御辭退申すといひしことはありしやに覺え居れり、こは備中守の上京前なりしか、上
 京後なりしか確ならず、

予が、斯く御養君となることを嫌ひしは、當時の幕府は、既に衰亡の兆を露せるのみなら
 ず、大奥の情態を見るに、老女は實に恐るべき者にて、實際老中以上の權力あり、殆ど改革
 の手を著くべからず、之を引受くるも到底立直し得る見込立たざりしによれり、されば、
 予は眞實御請はせざる決心なりしなり、（故一橋慶壽夫人）徳信院様、いづれよりか予が遠からず、御養君た
 るべき由を聞き及ばれ、一夕共に晚餐をしたためたる席にて、「折角年頃馴染みたるもの
 を、又々外へ移られんことは、如何にも心細し」と、しみ／＼仰せられしかば、予は、「さま
 でに思召さるゝは有難けれども、自分は、御養君の事は決して御請せざる決心なれば、御
 心安かるべし、ついでには、さる仰せ出されのなき中、前以て御斷り申上げ置くべし」とて、

慶喜將軍繼
 嗣辭退ノ理
 由

安政五年三月八日

一三六

「此事、若し眞實ならば、御やめに相成るやう願ひたし、」との書面を認め、徳信院様の手を
經て、老女萬里小路徳信院様を、京都へ御迎ひに行きたる人にて、斯かるものは、いと親しき間柄なること常なり、へ遣はしたるに、「斯かるものを御
差出にては宜しからず、但、御趣意の程は、上聞に達し置き申すべし」とて、徳信院様へ返
し來りしことありたり、此頃大奥の様子を探り見しも事實なり、

たとひ御養君の御沙汰を蒙るとも、決して御請せざる決心なる由を、予より烈公へ、書面
にて申し上げたることはあれども、此事について、烈公より御書を下されしことは曾てな
かりき、又御養君一條に關しては、一度も上書したることなし、事總べて自己の身上に關
すればなり、

〔昨夢紀事〕

三月朔日、水筑州水野忠徳が呈書あり、如左、

水野忠徳ヨ
リ松平慶永
ヘノ書翰

前略、偕は御内々一見被仰付候御秘書、私云、三條 公建白、則兼る奉申上置候永井尚志玄蕃へ内々爲相見候

處、當今樞要之秘策にて殊之外難有かり、決る他へハ漏洩不仕旨申聞候、尤同人へ相廻
候事ハ、尊館へも入御聽候故、自然拜顔等被仰付候節ハ、御直ニ申上候るも不苦旨申聞
置候、勿論格別之思召柄ニ有、段々被仰下候趣等も差含、及内話候事ニ御坐候、右文中に
も相見え候通、御上洛之儀など、若彼地々被仰下候義にも相成候節ハ、是非共御請被仰

繼嗣問題情
勢全ク不明

上候ハ勿論、其節に及候へハ、諸事 叡慮を御直ニ御請等不被仰上候るハ不相叶儀、外
夷之國王重臣等相越候上之儀よりも、尙又不容易次第、右等ニ付るも、内外万機御直裁
可被爲在、儲君一日も早く御治定之外他事有之間敷處、今以因循、當御屋形田安家頼なるも、其後
更ニ御沙汰も不被爲在、廿八日ニハ、左近が御目見を相願、今日は又丹波も御逢被遊候、
此節ハ此登城度毎ニ、必御用懸りへ御直談被爲在候得共、御模様柄更ニ相分り不申候、
御側懸りへも内々承候得共、更ニ不相辨旨申聞、乍然不依何事大抵御模様柄は奉推察候
事之由、半十郎なども兼る承及罷在候處、更ニ不存旨、殊ニ召出等も無御坐趣等上六も
と申聞候、何分疑惑仕候義、殊更此節ハ於眞崎稻荷何歟盛ニ祈禱有之趣外評承及申候、
其御用柄も更ニ難相分、此節柄別る他之響も如何可有之哉と彼是心配仕候、尤虚實共、
未暇と突留候義にハ無御坐候得共、若哉兼る御心配被爲在候とハ、表裏之事共にも御坐
候るハ、實ニ恐入候義と奉存候、尤、亞人一條ニ付るハ、深く御心配も被遊候御事故、右
等無滞相濟候ため等之御配慮にも可被爲在哉とハ奉存候得共、時節柄之儀、若他評有之
候義を御承知不被爲在候之爲メ極密奉入御聽置候、前文拜借之御秘書は、則奉返上候、
御落手奉願候、以上、下略、

尙、中略、下田之亞人も、病氣追々快候る、此程觀光丸ニ迎ニ相越、明後日比、船路參府

安政五年三月八日

一三七

慶永松平直
侯ヲ訪フ

風説書拔萃

候趣ニ御坐候、已上、

一、此日、御兼約にて大和守殿へ御出あり、其節御借用ありし、水府老公々大和守殿へ御廻しニ相成御秘書共之内、風説書拔萃如左、但、朱書ハ老公之御注釋ニ、

一、此節尾張様御本丸へ御入込御相談、御政事向可被遊と申事頻ニ御沙汰、十五日にハ、竹腰兵部少輔尾張々歸府ニ候御目見之由、多分何歟相發可申候、西丸一ツ橋様彌相究り

可申との事、此節要路之者々承り申候由、〔朱書〕右壹通、午二月廿八日寫處、無名月日なし、

〔朱書〕竹腰義出府之節ニ、途中ニ有、竹腰ニ逢度由ニ有、二時計咄合候由沙汰有之處、若々

何か

御所々尾州殿へ、御内々何とか有

叡慮様の事か、又ハ尾州殿存意を咄候事歟、

平和之時にも候ハ、格別、ケ様危く相成たる天下を、刑部卿殿手際ニ治候事可相成哉、尾張殿・田安殿立場といひ年比といひ、右ニ有天下を指揮せられて可然、又御家門ニ有も、越前守杯賢君ニ、是等可然御事ニ、若年の刑部卿杯、如何して此危き天下を治候事出来可申哉、萬々一ニ有亂し候てハ、天朝及ひ日光山へ之御申譯も相成間敷、當人ハ勿論、於我等も不相濟事なれとも、道路の取留も無之説を以、公邊へ申義も相

若年ノ慶喜
天下ヲ治メ
得ズ

成兼、又ハ如本文脱漏の虚實も不分義を以申も難相成、心配せるなり、去ル甲辰ニ有御疑心を蒙り、又近比、我工夫の大船を、於何レの港ニ成とも製度故、何レより成共、百万兩之金子被下製造致、若大坂ニてよろしく候ハ、右船製し居候内、非常の事も有之候ハ、京師御警衛をも心得候やう云々、認出候處、於公邊叛逆の企との事ニて、又々甲辰の節如可被仰付との評議ニ相成よし、或人來りて告たりき、予か思ふ處ハ、大坂ニて大船を製候片手ニハ、大坂海岸の御臺場をも指圖し、又宇治・伏見・山崎・淀等の川邊迄も臺場も指圖し、夫々配當する大中炮をも、彼地に居て親しく指圖し、又若狭々京へ入る道へも仕法せハ、大方京ハ御安心なるへけれハ、予退隱の身分故、右地へ行大船製造の片手わざにしたきと思ひ居たれとも、叛逆を企候との事ニ有ハ、無己江戸近海のみを嚴重ニ被成候ても、京地の方を籠ニ被成候ハ、征夷の御任ニ如何と思ふなり、先ツ天朝の方を御手厚ニ被備、次ニ江戸も國々迄も、手厚相成候か順道ならん、然るを叛逆なといふ見込故、天朝を輕蔑するより此度の如き關東の恥辱をハ出す事ならん、口をしき事ニ、予を叛逆人といふ上ハ、如本文沙汰ハ有之共、西丸ニ一橋ハ不相成事と安心せり、

安政五年三月八日

譬へハ、右臺場ハ其邊の小大名又ハ社家等ニ持たするもよし、大諸侯ハ海岸を持たす

安政五年三月八日

一四〇

へし、内川へ全くの用心なれハ、小大名・社家等へ命ても可然歟、夫にても内川になき
にしかさるべし、

三月三日、師質、安島彌次郎が許を訪ひたりしに、此頃京師知邸鶴飼吉左衛門を申越せし
由、備中殿上京以前、雲上こゑハ、建儲已に橋公に定りて、老公にも御満悦たるへきの旨、
縉紳家々吉左衛門へ内諭ありし由、此縉紳ハ議奏衆の内なるへしと考へたる由、彌次郎物
語れり、

慶永永井尙
志ト會談ス

一、三月三日、例のことく上巳之御登城あり、於營中永井玄蕃頭殿へ御逢ありて、内 勅の
有無如何と御尋ありしに、先比三條家々御附武家へ之沙汰計にて、其後内 勅といへる程
にかとある事ハ聞えさるよしを申上らる、又後宮其外の形勢を、土岐攝津守殿を平岡丹波
守殿へ討論に及ひしに、丹波かいへるハ、後宮も初の程ハなへて南紀に傾き、丹波も左様
に思ひしかと、追々の時勢將た人望の歸する處を考察すれハ、逆も橋公ならてハ適ふまし
き事と見定めて、異論も無之由を申せし由を御物語申上られたり、土丹州を被申上しハ、
於京都被仰出しハ、大坂開港致間敷事、京師守護を可被命事、今後定見有無の事共ありし
由、是ハ夫々御答も濟ミ、列侯赤心御尋の儀も御答濟たりしか、猶又關東へ申遣せとの御
沙汰ある故、此比急便來往せるとぞ、又關白殿下より御内々御沙汰ありしハ、兩殿下・傳

慶喜繼嗣ニ
決定ノ説アリ

議兩奏を始大抵御同意なれと、天意實ニ難計、是ハ青蓮院法親王の御説 禁脔に行はる
れハなり、されハ總て關東にて御引受と申趣にたになりなは、勅許にもなるへくもやと
密旨ある由、又傳奏限りの内意として、何分關東とても追々省略の筋其他改革あるへき
事なれハ、副將軍なくてハ適ふへからず、もし其人ふくんハ、當今の處賢明の仁器を擇ん
て、儲君を立可然との事なる由、如此次第もありて、凡ての形勢もはや橋公に決してハ候
得共、猶急かれ候へハ閣老へハ混と申上る由を御物語被申上たり、水筑州の被申上しハ、
田黃門卿の毎度御側衆へ御逢ハ何事なりしやと、前勤中の因ミもありて懇意なれハ、朝甲
州を平丹州へ問見たるに、越前侯を初此節専ら申立らる、一條ふれと、委敷事ハ申難しと
答へたるよしなり、

三月五日、○中
略、

一、同日、水筑州を呈書あり、

前略、同日は、於營中御目通被仰付、難有仕合奉存候、例之一條、其比も厚く御沙汰も被
下候故、旁以最早沈黙可仕候、乍併一体ハ御爲筋第一之儀こゑ、田尊館に被爲取候る本
然之御筋合こ付、尙此上をも心懸可相成はと奉存居候得共、上六近豫を初、内外一同悉

水野忠徳書
翰

安政五年三月八日

一四一

安政五年三月八日

く(橋原)を防ぎ紀を助け候而已こゝ、是皆爲にする處より起候人情、迪も此上行届兼可申、平夏兩輩との御密談ハ、御明察之通りこゝも可有之歟、其上にも助紀之御意味難計奉恐察候、

一、右一條も、上老御内探之御模様委曲に御内書被下置、誠こゝ難有仕合奉存候、先以右之次第こゝあるハ、彼兩輩限りにて表之方へハ不相響事と奉推察、左候へハ、少々安心にハ御座候へとも、兩館御不和之趣等既こゝ承知被致居候趣ハ扱々當惑之至こゝ奉存候、尊察之通り、城狐之徒、同館を能き應援と致候に相違有之間敷、扱々遺憾無此上候得共、館中之形勢前書之次第故、宜哉と嘆息仕候、

一、御別紙御秘書私云、薩州が相廻ル大奥之祕文なり拜見被仰付、毎々不一ト方御懇命之程身こゝ餘り難有仕合奉存候、再々拜讀熟考仕候處、是則南紀ノ策略後宮宦々に徹し候より、遂こゝ此の如くこゝ至候事哉と奉存候、若此上浸潜膚訴増長仕、此一大事を彼か爲に誤られ候に至候ハ、長歎息之極こゝ御坐候へハ、猶昨今迄之形勢をも内探可仕と、宦々別懇之者に密々模様相探候處、更こゝ不相分候得共、南紀推戴にハ相違無之相聞候、尤當時奥向之儀こゝと世上へ漏洩候こゝ付、營中表方之徒と面晤こゝと見合候様奥勤之向へハ、何れよりかハ不申聞候得共、沙汰有之由こゝ、是迄と違ひ、そこゝ之躰こゝ御坐候、右等こゝ勘考仕候へハ、

此秘書は秘中之甚秘、要路之徒は内心ハ反覆も有之哉こゝ被察候へハ、私限りとも奉存、再々愚考仕候へとも、當時拜見而已こゝ、別こゝ其甲斐も無之、兼こゝ御沙汰も有之、且申上候通り、報國赤心無二こゝ誓候心知之朋友こゝ付、則極密永玄へハ差遣し、即時一覽返却申遣候處、則返書も差越候故、奉入尊覽置候、御一展後御投炎奉願上候、尤自然何等之妨害を可生も無御坐候得ハ、全ク同人之胸中限り相含居候迄こゝ、如此之書一見之事こゝと、決こゝ口外仕間敷旨、誓こゝ申遣置候事故、其段ハ御安慮奉願上候、右返書之趣こゝハ(字不明)私云、返書 大こゝ心得こゝ罷成候哉こゝ、餘程の都合こゝ可相成哉と推考仕候、胸中清こゝ公明正大、以天下爲己任候心底より一見仕候へハ、實ハ當今之樞要候得共、人心反覆離計一毫も私心難脱候得ハ、却こゝ奉一同志之徒こゝ、如斯之樞密尊館迄も御承知こゝ相成候事杯、自然不心得之輩有之間敷こゝ無御坐候故、然る時ハ、此上之御模様柄、尙御内探之御不都合等こゝ可相成も難計、前段宦々云々之折柄こゝ付、此上別人へハ御見セ不被遊方可然哉こゝ奉愚考候、尤奉申上候迄も無之、御明察御手心被遊候事こゝハ奉存候得共、任御懇命不顧思召申上候、

一、眞崎の事、是迄御覺も被爲在候由、貴訓之通り、此節柄實こゝ歎息仕候、右之次第故、此度こゝ不限、惣こゝ御不爲之事而已不少こゝ至り可申、尊館御配慮被遊候御義、實こゝ御尤至極

安政五年三月八日

と乍恐奉存候、兩館御親睦之義ハ、何とぞ舊冬已來種々に心懸、私限一館同僚とも内談仕候得共、双方共内外楚人而已如何ともせん方無御坐、只々互に短を數へ能を嫉と佞媚をのみ極候事、此一條ハ就中一難事奉存候、何卒一公之寛大を以、宦々俗吏之常情を洞察有之、聊御顧慮無之、御友愛を御加被下候は、從來田尊館之御美質により、乍御感動も可被爲在哉と奉存候、此儀ハ何卒御含置被成下、可然御周旋奉願上候、出仕已前差急別る草布、下略、

平岡圓四郎ノ談話

三月七日、平岡圓四郎、師質か許へ來りていへるハ、去ル朔日夜、橋公、圓四郎を召れて仰ありけるハ、此比御祝事ありて、(故一願舞位夫人)誠順院の尼公、徳信院の尼君、御一處にて御酒宴ありけり、其節兩尼公の仰けるハ、此比世間の風説にてハ、公の御評判よろしくて、恐悅の御事と申難有事にハ思召とも、年來御馴染なされたるか、又外々へ御移りにては、如何にも御心細く思召されるレ何とかなされんやうハ、有ましきやと宣ふからに、夫ハとり留ぬ世間の取沙汰に候はん、私なんとか中へさる事あるへくも候はずと御請ハ申上置たれと、猶心にかゝりたる故、御本丸の後宮を探り見しに、上分之所あるハ、紀とハ云ひ橋と云ひ一定ならず、中より已下にてハ、何れと分く方もなく、唯近き程に西丸の立せ給へハ、婦人の御召抱も有るへしとて、部屋子杯を抱へ込む趣にも聞えたり、昨年の冬、登城之折柄、老中共

慶喜繼嗣辭退ノ決意ヲ平岡ニ告グ

か申聞たる事もありしゆへ、圓四郎云、此事は、昨年ハ如何伺ひても御渡しなかりしに、此時始て御發言なりしとぞ、其節ハもはや老中共の口の明かぬ程に申とちめ置たる事なれハ、夫切にありしとおもひしに、かゝる風説あるハ以之外なる次第あり、其方杯も兼々色々申聞願ひ居る趣にハあれと、如何に考へても此衰世に逢ふて、我等如き不肖不才、曾て其任に當りかたければ、猶又老中共迄嚴敷斷らんとおもへハ、其方共も最早念を斷つへしと仰ある故、圓四郎申上げるハ、夫ハ例の仰にて、一通りハ御尤こ伺候て、乍恐御才力も 神祖にひとしく御十分とも不奉伺候得共、如何仕るべきや、外に御當撰の御方も不被爲在候ゆへ、強ても願ひ奉り候、唯に御前の御爲のみにてハ候はず、天下の御爲と思ひ奉りての事に候と申上るに、イヤ、有徳公の兩卿を立られ候ハ、儲君之御扣の思召にて、兩卿を選れ候ハ相當の事なれとも、夫ハ尋常の時にこそあるへけれ、當時ハ常をもて語るへき節にハあらねと、先づ大統を承續すへき家を申さは、一ニ尾州、是は年長なり、次ニ紀州、是は幼年之、次に水戸、是は埒明す、其次にハ田安と我等也、田安ハ先輩と申、御續柄も近く、此人こそ相當ならめと宣ふ故、圓四郎又申上しハ、是も一應は御理りにハ候得共、兼々も負けさせ給ふましきとの仰もあり、將御身を外に置かせられ、御傍觀之思召にて御考被爲在へし、件の御五方の御内にて、御前に勝らせ給へる御方の坐さぬハ申迄もふく候へハ、天下の御爲に御苦勞を願ひ奉るにて候へ、田安

慶喜ノ辭退
ハ推賢讓能
ト云ヒ難シ

安政五年三月八日

一四六

の卿にハ是迄御令名も伺ひ奉らす、御美事も聞えず候へは、推賢讓能の御趣意とも伺ひ難くと申上げるに、如何にも田安ハ格別の事もあけれど、田安にハ越前といへる後見あれハ大丈夫なりとおもへるなり、田安のみ孤立してハ危けれど、越前あれハ安心なる故に申そと仰らる、圓四郎、越前との御後見ハ御尤の思召付にハ候へとも、越前公ハ田安公の御後見ならてハ適ひ難く候や、とりも直さず御前の御後見を御頼にて、御相談の上御大政を執り行はせ給ハ、御充分之御義に候はすやと申上るに、申セハ左様に候へとも、如何にしても此方ハ不堪なり、是非斷らおくと仰せにて、聞入れさせ給はねハ、圓四郎たまり兼、御謙遜も事と品により申へし、かゝる天下の形勢を御覽しなから、十萬石を御素餐被遊候て御慊く被思召候哉、此節さる御評議となり候も、第一越前公の天下の爲に心力を盡され御周旋の次第ハ、前代の記録にも見聞仕らぬ御誠意にて忠誠絶言語候御事なる故、驥尾に付て諸侯・諸有司・閣老衆迄も、遂に左祖に及ひたるにて、草莽之士庶に至るまで、有志の輩ハ推戴希望仕候はぬは候はぬに、さる言ひ甲斐なき思召にてハ、有志の缺望解体も眼前にて、天下は爲すへき事の候はす、夫ハ如何に被遊候哉と申上しかハ、越前の心底ハ世に頼母敷、又我等か身に取候ても、此上もなき果報願ふて出来る事にはあらず、兩親の歡ひ家への追孝、天下へ對し面目の至り、人間に生を稟て是程の本懐、餘にあるへき事とも思

有志者ハ慶
喜ヲ推戴ス

虚譽ヲ求ム
ルハ奸雄ノ
行爲

はれねとも、如何にせん才徳其器に非されハ、徒らに耻辱を増進するまでなり、近く老公を見申さすや、廿餘年來打拂之御持論にて、夷狄に日本の地は踏せましとの御素志なりしに、只今とありては、老公の眼前に夷人の登營を初條約の始末等、老公之御論ハ一ツとして行はれねとも、安閑として御傍觀の外ハあらせられぬハ、如何に老公の御耻辱ならすや、過激之事にて申も恐れあれと、癸丑以前、夷人のいまた來らざる程に御下世ならんにハ、御盛名不朽に傳へ申へきものを、御長生は可歡事の限りにはあれと、此方にして申さは懋に御生き延び被遊、如此御耻辱に逢はせられ候事、於我等も血涙の至りにて殘念無此上事共なり、我等萬一西城へ入らハ、老公と等しく生前に耻辱をさらし、末代に汚名を傳へん事はさし見えたる事にて、其際とありて我等か耻辱ハ神州の耻辱となるへき事にて、老公の如く、御一身の事にハ止るへからず、天下を経綸すへき定見なくて、いかてか尸位を偷むへきと仰あれハ、圓四郎、さまで強辯なさせ給ふ上ハ、申上へき辭ハ候はねと、勝れる己を忍んで、劣れる不肖に讓るハ、虚譽を求むるハ奸雄の行ひにて、魏の曹操か比にて候、御前にハ思召すや、御一身の御勞を被爲厭、天下を御放下被遊候てハ、人主の御本意とも不奉存と申上れハ、事果しなけれハにや、猶御考あるへきとの御事にて、此夜ハ御前を退出せり、同三日の夜、又圓四郎を召て仰有けるハ、此比の一條如何に考へても見詰あ

安政五年三月八日

一四七

かりし故、已に西城に乗込たる身となりて工夫せしに、先夜も申聞たる如く、越前初之推薦も、我等を人かましくおもひ、西城にてもなりたらハ、天下の爲めによき事もあるべきとの見込なるに、唯今假令西城へ入れんとて、上様御盛んの御事なれハ、五年七年口さし手出しも致さぬ筈なれと、流石に兒輩と申すにもあらねハ、老中共も大事ハ相談可致、其節ハ上様へ伺ひたれハ、思召ハあらせられず、此方にハ如何と申へ候、其時我等か、上様にハなくとも我等にハあるとも申ましき事なれハ、此方も存寄なきよしを申へき事なり、かくさまに仕向けて、老中共好みな事を致セとも、何とも申さぬもの故、我等も承知同意と申廉にて、品々不都合の事共も出来て、夷人の事一ツも段々深入可致、夫も我等同意思召と申もの故、我等を頼もしく頼もひし越前初も案に相違して見限り果、人望忽ち離れて暗愚の汚名を取るべきハ眼前也、斯くて五七年も経ハ、天下の勢愈下り取り所も亦く、人心ハ益背きて國賊も同様におもふ時分になり、丁度大統を承續候様にならんハ、今にてもあくみ果たる天下か、年を経て十分衰亂に及び、有志の助けもなき獨夫となりて如何すへきや、いよく適はぬ事に決心せりと宣ふ故、圓四郎申上げるハ、仰御尤々奉候へとも、御前御一人西城へ被爲入候ハ、仰の通りなるへ候へハ、此比も御意ありし越前公へ御後見を御頼みになり候ハ、御前にハ御恭黙被爲入候も、何れも思召

慶喜松平忠
固等ニ意中
ヲ告ケ

よりも宜程にもなり申へく、御無言の間に天下爲すへき事ありと申如く、越前公にて基礎を堅められ候上にて、大統之御承續にも被爲成候ハ、夫方ハ表向の御相談にて、征夷の御大任も思召儘に御行届可被遊、御重任を唯御一人にて御擔當被遊候御工夫にてハ、乍恐御充分とハ不奉存、名宰相たに被爲得候ハ、左迄に御苦勞ハ被爲在間敷と言上しけれハ如何にも夫も一策なり、されと唯今申ことく、思慮に及はぬ事故、今朝登城し伊賀・大和に逢ひて斷りて濟たりと仰あり、圓四郎、夫は如何御意被遊しやと申上る、伊賀・大和へケ様の沙汰を承りしか虚實如何と問たるに、兩人、何方より御耳に入候やと申せし故、大奥向にて聞たるといひしかハ、左様の事は曾ても候はずと申なれハ、そハ幸の事なれ、ありたる上に御辭退ハ難儀なれハ、なき程に能心得て、萬に一つもさる事のあらん時に、去年も申たる如く堅く御斷に及ふと申たれハ、辨した氣なりしか、兩人顔を見合せて、畏りたるよしを申せしかと、今少し事足らぬ心地もすれハ、書付て遣ハさんと思ふなりと仰あり、圓四郎、既に御沙汰あらせられたる上ハ、如何ともせんすへなく候へとも、此頃も申上候ひし如く、此御一條ハ越前公無比の御盡力被爲在候御義候へハ、兼る御懇之御間柄一應の御相談も被爲在候ハ、御信義も被爲立候半ものを、越公の御盛意も無詮事と相成候姿にて残念至極に奉存由を申上しかハ、イヤ越前の厚意は可謝時節も可有之、左程迄存

込候越前侯へハ、唯今及相談し迎いかて聞入可申哉、我等か申處は聞えたれハ、先ツ黙止居候様との事に可有之、其上にて申所を用ひざる時ハ、却る信義を失ふなり、我決斷之立たる義を相談ハ畢竟無益ならずや、されハ御住居も、此比之御沙汰ありし一條ハ、たとひ何様の嚴命にても、この御館を離るへき所存無之候へは、さる御沙汰なんとハ無之様、御本丸へ御取立し被仰上ん事を願ひ上たりしに、尤至極なりとの御事にて、早々御城へも申上られたるに、老女共も、早速 上様へ申上候半との事にて、聞受も殊によるしかりしとの事なる故、聊降心なせしと仰ありけるとぞ、かくて、圓四郎か師質にいへるは、卿如此に坐しませハ、追々御内命あといへる事になりても中々御請引あらせらるへき御氣色にも伺ひ奉らす、夫につけても尊勞には候得共太守公にも御補佐之大任を御荷擔不被下候半ハ、努々御承引は被爲在間敷歟、太守公に御出現あらせられんにハ、卿も御安心も遊はされんか、卿の御心を動かし奉ん事ハ、此策の外に出る事ハ候はず、さる折にもなり候はんには、水老公よりも、いつれは御推奨あらせらるへく候へは、豫め其御心構に被爲在度、是迄ハ西城公の大統御承續と一處に、宰輔の位に登らせ給ふ様にと、窃に願き思ひ奉りしかと、時迫り事急にあり候へハ、くれぐれ尊勞の御儀ハ察し奉りぬと申せる故、師質も、卿の物語の思の外なる處へ轉り來り一驚を喫せしかと、さらぬ躰にて、寡君の大任を

慶永輔佐タ
ラズバ慶喜
モ承引セズ

負ひ候半事ハ、卿の西城に入らせ給はんよりも百倍して當りかたく候半歟、寡君は如何に申されんか量りかたく候へ共、察する處決して御請に及ふへき事とハ存し候はずと答へたるに、圓四郎夫にては、卿も決して御請あらせられまし、卿を辭し給へるまゝになしたかれんにハ、兎も角もに候へとも、是迄太守公ハ、天下の御爲に卿を御推舉あらせられ候と承り候に、事御身の上に及ひ候連、天下も卿もさしおかれ、御一己計御通れあらん様成事ハ、兼ある御高誼にも御似合なき御事候得ハ、太守公にハさる御未練なる筋ハあらせられまし、左様にの給ふハ、遠慮に過たる賢兄なんとハ憶度にこそ候はめと、辨論を盡して歸り去りたり、翌日、此事を公へも申上、政府を初、事に關る向ハ物語しに、卿の御穎悟御敏才に嘆服し奉るは申もさらなる事ながら、夫に付て 公を擧げ奉らんといへる圓四郎の議論も亦間然しかたき筋にハあれと、さる事となりてハ、實に當りかたき大任なりと、公にも御恐懼少なからず、執政初も如何にかはすへきと、額を擧めて呷き合たる事なりき、

〔永井尙志書翰〕○水野克
讀所藏本

○三月十二日水野忠徳宛

拜讀仕候、如來示、氣候整兼候得共、愈御清穆被成御座奉并欣候、昨日と於

安政五年三月八日

一五二

營中拜顔、暫時ふのら心中御談申上、大慶此事之御座候、其節御内話相伺候越前家探索秘書、早速一覽を御許難有、志のし是以御同然自己之事之無之、實之國家之大關係、當節何分御六ヶ敷御時節、只々國本相立、中興之大御事業御挽回を祈候外無之、御來翰之趣之逐一謹承、小拙限秘見、京地之心得之可相成儀也、(昔稱忠實)肥後迄寫遣し候ハ、自然備中守殿京師之御引合御都合も可然と存候、是又只々國家之御爲之事之御座候、格別忌諱之觸候様之條々相省可申候、右一條之付る御面話被成度候間、明日頃御光來可被下哉之由、幸明日之故障有之登、營不仕候間、御入奉待候、併態々御入之る也、何共奉恐入候得共、國家之爲之也、御同様起居之勞なと更之勞之無之候、只今來人中早々御請計、秘書六通之明日御入迄拜借仕置度、固より天に誓一切漏洩不仕候、且御端書被仰下候越前家へ兼テ御心知之段、猶御物語之上、時宜之寄尾州より直之小拙之内話有之、彼邸へも參候様成都合之可被成下段難有奉存候得共、是こそ少々云々も有之候間、先今一應御勘考被下度、此儀拜顔委曲可申上候、頓首、

三月十二日

水野盟兄

尙志拜

〔昨夢紀事〕

三月十三日、今朝安島彌次郎か許へ招かれて行たり、此比彌次郎かいひし、上京留守中機密を談すへきよしにて、茅根伊豫之介を引合せて相識とふしたるなり、年の比三十四五にて形貌逞敷男なり、沈着にして才略には乏しく見えたり、篤實いふ計なくて、漏洩の憂なとの絶えて有ましくおもはれたり、酒酌かはして東西の事とも議論に及ひたり、師實ハ安島上京の上にて、川路廷尉へ談して鷹司殿を初、久我殿なども御親姻の由、其他樞機の諸卿へも推參し、公然として、公武御和熟の周旋あらハ、嫌疑もなくして、御双方の御爲然るへからん歎といへる儀を申出たり、

三月十四日、○中略、

一、此日筑州方師實へ一書を被投、直様入御覽、如左、

不順之時令、先以益御清健奉賀候、扱は過日之御書類、則及御内話候通、極密相廻候、尤書通等之るは意味徹底致かたく候故、得と面咄に申述置候、尤何れ太守君兼々御面會御坐候兩輩へハ、密之爲心得、且廟堂へも同斷之取計可申哉に申開候、尤全ふは拙方遣候者限之る、其他ハ夫々勘辨を加へ取計、決る御迷惑不相成様心得候趣之御坐候、彼地も申來候趣も有之候得共、中々右書類之如くにハ相分り不申、實は廟堂にるも、かく迄とも不被察哉之相聞候へハ、大之都合にも可相成、尤彼地へハ尙更差略を加候上、樞要

安政五年三月八日

一五三

安政五年三月八日

一五四

之條々は可申遣趣に御坐候、扱又青蓮院家へ御一書之儀も、則存念及相談候處、御家臣之面謁を被仰遣迄候へ、別御故障に相成間敷、若嫌疑に涉り候次第、御認加に無之ぬは差支候事候へ、追ぬ右御書をは、御取戻し置に相成候へ、全く一時面謁之路を開候爲迄の相濟可申哉に付、是迄御手を被爲懸候上へ、迎もの事今一段をも十分御探り相成方、尙更御都合も可相成哉之旨、於拙も同斷に奉存候間、先此段申上置候、前書次第故、右書類ハ今暫く彼方へ拜借仕置度趣に付、戻り次第に早々可差上候、且太守君より向後右等御直に御談判、殊に寄被召呼候義をも及内談候處、此節少々云々有之候て、却る右之ぬは、御不都合に可有之哉之旨申聞候、右之意味ハ書中に難認取、書類戻候節持參、御直に申上置候様可仕奉存候、且過日之内一綴も返上仕候、宜被仰上御差出願上候、何も申上度要事迄、文略、頓首、

三月十五日、○中略水野筑州へ御逢あり、筑州申上らるるへ、此頃之御書面共玄蕃熟覽いたし、猶考へ見候に、忌諱の廉々もあれ、悉く除き去りて、玄蕃の手して寫し直し何方よりともなく手に入たるさまして、閣中へ指出度おもへる由、例の同志へ御家より出たる事を明し聞て、其上にも差略して、在京の有司へ廻し遣はさん心構へなるよしを申上らる、又玄蕃のいへる由にて申上らるるへ、閣中更に無策なるのみならず、京師之事ハ惣る

慶永水野忠
徳下會談ス

永井尙志ノ
策

備中へ委任して、なるへき様になるへしふといへる有様にて、兎や角思慮せらるる体にも見えざるよし、(永井尙志)鴻臚の策ハ、朝廷より二百年來御渡の政權へ御手を入れ、時會の遷延も御斟酌ふき様にてハ、今後共に萬機之御政務、於關東御處置なされかたければ、將軍職之御辭表を上ケらるるか、又は備中殿ハ程よくして歸府せられ、勅使下向之節諸件を下らる様にとり揃て、扱此地にてハ於營中列候と共に群議し、高祿の武威を以て壓倒せんなど、の激論ふるよし、又鴻臚の公へ謁見の事を憚り候へ、近來海防掛之面々頻りに西城の事を申立候故、伊賀殿ハ聞くを厭ふの氣色あり、其邊よりして丹州ハ、越前初諸候を後楯として申立、強き由杯を申されて、丹州の首尾宜しからぬよし、夫故に玄蕃杯も深く嫌疑を避居候へは、御館へ參候に付、閣老衆へ申さてハ得參られず、營中にも耳目を恐れ候へハ、御逢の事ハ遠慮仕るよしを申上られたる故、さらハ事あらん時には、師質を遣はされ度よしを仰聞られたりしとぞ、○中略

水野忠徳ヨ
リ中根へノ
書翰

一、此夕水筑州より師質迄一書を投せらる、早速入御覽たり、如左、
不順之時令、先以彌御安寧珍重奉存候、今朝も於營中御目通被仰付、難有仕合奉存候、其頃蒙御沙汰候條々、則、玄蕃へ及内談候處、先日之御書類に付、京地へ申遣候共、決る尊館より之御手續等ハ、相響不申様取計可申、左内方直に於彼地引合可申儀も、其心得

安政五年三月八日

一五五

可申遣候故、肥後守方へ相越候共、又は文通こるも宜趣こ付、同人方へ其旨早々申遣置候様談判致置申候、右談判中御逢こ相成、貴君直こ玄蕃方へ御越等之義ハ残り申候、其後は面會不致退散故、今日文通こ猶又申遣置候積、是ハ聊子細無之事こ奉存候、左内名前も肥後へ廻し置候様、拙方申遣置申候、尤要用こる、機會こ後候るは不都合こ候條々ハ、直こ彼地こる及引合候義可然候へ共、度々出入等致候る、自然縉紳家へ響き疑惑を受候るは、又不都合をも可生哉こ愚考仕候故、其次第こよりては矢張是迄之手續こ致し、可成丈嫌疑を避候方可然哉、申上候迄も無之事こ候得共、當地なと、違ひいかにも狹隘之地故、御含迄こ申上置候、宜被仰上可被下候、何も差急候事故、退出不取敢走筆、御推讀可被下候、頓首、

三月十五日賀

三月廿四日、○中略、

一、先比、京狀及三條公の建白草等、(松平直侯、川越藩主)大和守殿迄御廻しにて、水老公の御意見を被爲問しに、大和殿迄の御答ありしを、今日御廻しに相成たり、如左、

水戸老公ノ意見書

忝拜見仕候、事濟候義ハ文略仕候、先以無御障大賀、度々之地震に御坐候、平山謙

へ杯又承り候得ハ、下り候こハ無之との事こ御坐候、左候へハ、跡をけし候爲に一寸下り云々初之申所こるハ、無相違様に候得ハ、爲念御咄申候、

一 御返し之分落手仕候、

一 先日拜見之品、一々爲見候様との義何も承り申候、并はなしも、但、寫を拜見候故、本紙ハ返上仕候、一にも他言無之様ニ申遣候、

勅答ノコト

一 勅答不日云々如何様之事に候ヤ、袖浦註に認候事杯こ無之様仕度候、右註ハ、御覽後、直に咄無之様致度候、方々一、三條之方へ聞候るハ如何と存候、

註

何レモ正論感心仕候、其中上洛云々杯、實こ君臣の大義こ候へハ、可止筈ハ無之所、相止候上ハ、御初こも相成義こ候は、かゝる大義、何故こ止候哉と申所を、見極候上に無之てハ、容易こ御初こハ相成兼候半と被存候、虚實ハ如何可有之哉、拙老こる承度候ハ、姫君御參内被成、至て御親しく被成候所ハよろしく候へとも、右様被成置候て、日光の宮を御下向被遊度御願有之候處、甚六ヶ敷、漸々賄賂等莫大の事こて、御願相叶候よし、さて關東方右様重キ御願御聞濟こ相成、日光の宮御立被遊候事故、五畿内を御所の御收納こ被遊度由こて、將軍家御上洛こて、御前へ被爲出候節、御直ニ 叡慮被爲在候故、其御場ハ奉畏候よし御直ニ御答被仰上、追る五畿内方少々被進候かのよし、夫方御上洛ハ相止候様にとの事こ相成とのよし、全くハ姫君を被爲上候所よりして、天海坊主の計策こて、日光宮さへ出來候へハ、追て御上洛杯ハ、如何相成候てもよろしきとの策とハ被察申候、姫君御入内ニ相成、御懇ニ被遊候事のみ候へハ、實以恐悦ニ候所、右姫君を御さし上にて、其御養といたして日光の宮を御願ニ相成候様覺申候、此方計策を以、右様之事被遊候故、御所方も亦云々の事出候半奉存候、夫故二度御上洛ハ御止と承及申候、何様日光宮を此方へ御立、何ぞの節ハ云々といふて天海菴僧の計

安政五年三月八日

策ハ直ニ相響候故、五畿内云々之事も出候半と存候事、依てハ、初候にハ止候元をよく見極候上ならてハ、御初ハ相成兼候半と被存候、

一、公武被仰合候云々、是亦正論ニ御坐候得共、關東にいつも明將軍のみ被爲在候事に候は、格別ニ候へ共、永キ御代いつも明將軍、明閣老と申計ハ安心不致、又公家の方とても、只今の如く勘弁も有之、天下の御爲厚く存候人計有之義も安心不致、万々一こも、永キ中ニ名將軍并名閣老等無之節、外様等々色々様々、京師へ惡智惠付候事も有之候ハ、如何いたし候者か、徳川の天下の御爲を奉存候てハ懸念いたし候、畢竟ハ此度の様なる天下の大事を此方切て御決斷ニ相成、其上て、京師へハ御届而已と申様ニ相成候へハケ様之論も出候半、公武の御間か常ニ御親しく被爲在候様仕度、京師の御備も御手厚く被遊度、常々之御義も御不自由無之様被成進、扱又金銀吹かへ以來ハ、諸大名とても諸色引上り難儀致し候へ共、小祿之公家の別る之事ニ候へハ、家柄名家等は夫々に被成、元和頃方見候へハ、諸色引上り候へハ、元和頃之思召ニハ大ニ相違いたし候半、常々御所と御懇に被遊、御所とても御悦び、公家とても難有様御仕向ニ相成候ハ、天下へ拘り候此度の様なる事ハ格別、他ハ是迄之通とても可相濟哉と奉存候、御所とても公邊とても、後宮の引張之方は、兎角得ニ有之候、後宮ニ手つる無之時ハ指支申候、

大名にてハ、公邊後宮ニ手蔓有之者ハ、申候事通り易く候へハ、公邊てハ御所へ御手つる有之方、事情も分り何かの爲御得と存候、兎角ニ御所をハよろしく不被遊候てハ、將軍家御損に御座候半、ケ様之世中ニ相成候ハ、別るの事と存候、御手つる有之候へハ、内々公邊へ申上候人も可有之候、

一、紀淡々内并五畿内近く、又鳥羽ハ伊勢神廟近く候得は、於

叡慮も宜しくとハ有御坐間敷歟、譬へハ日光・久能杯、近くハ商館を立、邪寺建立いたし候と有之ハ、於、公邊も御濟せハ有之間敷歟、左候へハ、於、京師も、

天照大神に被爲對よろしきとハ有御坐間敷哉奉恐察候、

一、阿片之義、墨夷ハ云々申候へ共、日本人ハ如漢人ニは欺れ申間敷、尤毒ニ候へハ禁ハ可然事ニ候得共、拙老ハ阿片ノと申候ハ阿片を表向嚴禁いたし、日本人の爲を存候様見セ置候て、邪教の方ニて術をとげ候事と存候、彼等之持來り候小端炮杯天下を乱し候道具ニハ可相成、禁し度事に候、日本人ハ阿片ニてハ欺兼候といふ所を早く見て取り、却る爲にいたし候様ニ阿片を禁し候て、外の事ニて彼か運を開き候半歟、

一、兵端の開け候を公邊人恐縮致しなから、御備向の方をハ籠にいたし、交易のみ益ニ相成と存張込候様子ニ候處、此方之御武備御手厚の上も候ハ、交易を被成候とも

御益も可有之候得共、御武備御手薄にて、交易初り候ハ、決て御益所ハ無之、御損計にて益御武備も出来申間敷と存候、

右ハ、袖浦註ニ相認申候故、極密入貴覽候、

ケ様天下の安危ニ拘り候節ニ候ヘハ、實ハ於 將軍家、二條の御城ヘカ、又ハ大坂の御城ヘカ被爲成候て、京地御警衛成し不被進候はてハ、實ニ 大將軍御任ニハ如何と奉存候ヘ共、當時の有様左様にも相成兼候半、左レハとて、所司代・御城代位平和の節同様にてハ、

齊昭製艦ノ議

京地御尊敬の處ヘハ相當不致候ヘハ、拙老先年々大艦を製造いたし度、百萬兩余もかゝるヘク候處、日本國中の富民々千兩か百兩か、其者にて痛み不申程、數十方持候人ヘ千兩と申位ニ候ヘハ、願之上出させ申候る、右大艦大坂にて製作いたし、右製造中御城代申痛ハ致し申間敷、同所之臺場を始淀川迄も、所々にざつと臺場拵ヘ、是ハ、一ヶ年にて出来可申候、右ヘ指置候大砲等も、指圖致し候て拵させ、此砲ハ、御所の御警衛ニ候ヘハ、可申拵、工夫は致すヘキカ、於公邊ハ、叛逆云々との義にて致方のなき世態ニ、三家・三卿・御家門拵を叛逆と存候上ハ、逆もこわくて何事も出来申間敷、將軍家にて可被成の處、江戸も御明兼故、御名代として云々拵有之候てもよき程の事なるヘシ、然るを叛逆拵との評論、衰世といふ

へし、如此危キ天下を、目之ある人々は何カハ可好歳、人の赤心も無ニ成也、右叛逆との評議有之候も、其實は拙家の姦人より出したるもの也、右風聞は手本ニ有リ、右ニ考る時ハ、去ル甲辰叛逆のよし拙家姦人を出せしと同しく、多分拙家の姦人より出したる者也、我工夫の艦并砲共、於公邊御製造あらハ、三百萬もかゝるヘシ、又所々の御臺場等も、我被 命拵ると、於公邊拵とハ是亦三倍すヘシ、是等の次第、一々申ハ余リ惡口する振ナレハ、不言、大小砲等御製造も、同斷ニ、

右御覽後、直ニ御火中可被下候、

一、袖浦ニ西丸云々、賢明之輩云々有之候處、御血脉ハ、紀伊殿當 將軍ニハ御近く候ヘ共幼弱、尾州殿此度早く御登リニ相成候由故、是ハ相當の人と存候、左も無之候ハ、御家門にてハ田安ニ候ヘ共、是ハ賢明と申ニ無之候ヘハ、(松平慶志)松越殿ニ可有之、(藤須實壽)阿州ハ將軍家ヘ血脉ハ近く、且又賢明ニても、松越殿と一ツニハ有之間敷、松越殿ニ候ハ、申迄もなく、萬々一、尾ニても紀ニても、若又田安なれハ御實弟の義、兎角松越殿ニハ後見とか御相談とかに無之候ては、徳川の天下ハ六ヶ敷と被察申候、又世間ニ一橋といふ沙汰も有之よしも聞及候ヘ共、若年として殊ニハ叛逆可致故、又々慎可被仰付調ニ相成候者の子可相成謂ふしと安心せり、御火中ニ、

〔防海雜記〕

〇水戸藩記録
公爵徳川團順所藏本

一京師之儀、當月四日、參内之積之處、

繼嗣ノ人選ニ就テ

安政五年三月八日

一六二

一 事記外題

禁裡に御法事有之、十日あらてハ參内不相成、十日こそ進献物指上、十一・十二日方、右相伺に相成候半、夫々

二 事記外題

御勅諭出申候分ある、いつも今兩三日過不申候ると相分申間敷、相分次第井上信濃守登城御用相伺、直に下田に發足之心得に有之由、

三 事記外題

此節、尾張様
御本丸に御入込御相談、御政事向可被遊と申事頻に御沙汰、十五日こそ竹腰兵部少輔尾張より歸國に付

御目見之由、多分何れ相發し可申候、

西丸 一ツ橋様彌相究り可申と之事、此節要路之者とり承り申候由、
右壹通、午二月廿八日寫處、無名、月日あし、

四 事記外題

欄外記事一

〔朱書〕本文、御法事といふハ、仁孝天皇二月六日の崩御なれハ、右之御法事ならん、

○同二

〔朱書〕前文、應接書出之といふこと考ふる時ハ、兩三日よて可相濟共不被思事之、

○同三

慶喜繼嗣ニ決定ノ風聞

〔朱書〕堀田備中守上 京之節、竹腰義出府之節に、途中にて竹腰逢度由にて、二時計咄合候よし、沙汰有之所、若々何の御所を尾州殿へ、御内々に何との有 叡慮様の事の、又ハ尾州殿故意を咄候事の、

○同四

〔朱書〕平穩の時こそ候ハ、格別、ケ様危く相成りある天下を、何として刑部卿杯の手際を治候事可相成哉、尾州殿・田安殿、立場といひ年比といひ、右の天下を指揮せられて可然、又御家門こそ越前守杯、是亦賢君にて是等可然御事之、然るに、若年の刑部卿杯、如何して此危き天下を治め候事出来可申哉、万々一よも亂し候ハ、天朝及日光山への御申分も相成間敷、當人は勿論、於我等も不相濟事あれ共、道路の取とめも無之説を以、公邊へ申義も相成兼、又ハ如本文脱漏の虚實も不分義を以て申も難相成心配セル之、去ル甲辰こそ御疑心を蒙り、又近頃我工夫の大船を何れの湊にて成とも製度故、何レ成共百万兩の金子被下製造致し度、若大坂にてよろしく候ハ、右船製し居候中、非常の事も有之候ハ、京地御警衛をも心得候やう云々認出し候所、於公邊叛逆の企との事にて、又々甲辰の如節可被仰付との評議に相成よし、或人來りて告りき、予の思ふ所ハ、大坂にて大船を製る片手に、大坂海岸の御臺場をも指圖し、

安政五年三月八日

一六三

慶喜ノ將軍繼嗣ハ不可

安政五年三月八日

一六四

又宇治・伏見・山崎・淀等の川邊へ迄も臺場を指圖し、夫々へ配當する大中砲をも、彼地へ居て親しく指圖し、又若狭々京へ入道へも仕法セハ、大方京へ御安全あるべけれハ、予退隱の身分故、右地へ行、大船製造の中、片手習さこしあきと思ひされと、叛逆の企との事にてハ無已、江戸近海のを嚴重に被成候ても、京地の方を籠に被成候てハ、征夷の御任に如何と思ふ也、先ツ 天朝の方を御手厚に被備、次ハ江戸も國々迄も、手厚く相成の順道あらん、然るを、叛逆杯いふ見込故、天朝を輕蔑するが、此度の如き關東の恥辱を多出す事あらん、口をしき事、予を叛逆人といふ上ハ、如本文沙汰ハ有之共、西丸に一橋ハ不相成事と安心セリ、

譬へハ、右臺場ハ、其邊の小大名又ハ社家等を持するもよし、大諸侯ハ海岸を持すへし、内川ハ全くの用心されハ、小大名又ハ社家等へ命ても可然然、夫までも内川こそきこ志のさるへし、

〔清籟舎遺書〕

○公露徳川 國順所藏本

〔朱卷〕 安政五年三月廿一日 養君内狀ノ件

茅根伊豫之 介書翰

十九日之御細書如拜肩拜見仕候、愈御安健奉敬賀候、近來事狀大概之所、昨日相認御連名にて得貴意候間、御推覽可被下候、扱貴論之趣、逐一御尤、只今にてハ、皆そよへ落入候よ

水戸ノ神發 假名

ハ困り申候、國本云々、御尤之御論、過日も袖(袖門、高橋多二郎)より申來候所、中々左様ハ相成り兼申、其所思ふ様ニ參る事なせハ、何を申事も無之候得共、どつよひ參り不申候、諸方ニ好風もそせ、滿居候、又正論中も底にハ各鎌を帶居り申候、あとへハ、アサヨレ人アナムテナムチ可致と申ヌエツセムワエツコウキムエムユエ、又マナム御直りにて宜敷と申意味有之、又ヌマナムヤタクヨ立場へすへ度との下組も有之ろに相聞へ申、其上トサヨにて此節奸説行に候ハ、クヨナヨよりイ子ヌムテホサ御獻上、右をトナヨへ給り、トレコムミ子ル致候者、食傷致候との説行に候様子、旁此先餘程難場可有御坐候間、左様御承知可被成候、併尾公・越候ハ、三藩并御家門に有之、一橋公ハ三卿(池田慶徳、高取善忠)あり、相州君大藩に御扣、其外藩にハ薩州・宇和島有之候へハ、正氣掃地候事も有御坐間敷とハ存候へ共、行路難に御坐候、色々得貴意度候へ共、筆頭難盡、草々頓首、

三月念一

二白、北堂君御始へも、宜敷御致意可被下候、以上、

野村野之介

卿 賢 兄

茅根伊豫之介

拜

九日 權中納言正親町三條實愛ヲ議奏加勢ニ補ス。

〔非藏人日記〕

○東京帝國大學所藏本

安政五年三月九日

一六五

三月九日、乙酉、○中、當番議奏加勢中山大納言殿其餘參集、久我殿、坊城殿等不參、傳奏衆、參侍、

一 關白殿御參、

正親町三條中納言

議奏加勢被 仰出、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記
宮内省圖書寮所藏本

三月九日、晴、○中

申渡有之、加勢中山大納言、近習番頭四辻中納言（公覽）に被示、

三條中納言

議奏加勢被仰出、加勢中被免近習小番云々、尤小番未勤親族中江茂、可申傳云々、兩番所、同被

申傳云々、

傳聞、中山大納言ハ、本役久我大納言稱所勞引籠云々、眞實雖非所勞、異國一件、夏六ヶ敷間、議奏辭退出云々、三條中納言

ハ、坊城中納言眞實所勞（後見）に付、加勢云々、

〔菅葉〕○五條爲定日記
宮内省圖書寮所藏本

三月九日、乙酉、晴、○中、夕景、自菅三位、亦回文到來、正親町三條中納言議奏加勢被 仰出

之旨、加勢中山大納言被申渡、今日、四辻中納言被演說之由、被示、共觸出于相番中、

〔非藏人日記〕○東京帝國大學所藏本

三月十日、丙戌、晴、午後曇天、當番議奏大藏卿殿其外惣參、久我殿、坊城殿不參、傳奏衆、參侍、

一 右大臣殿御參、

正親町三條中納言

昨日、議奏加勢被 仰出之旨、奉行西洞院殿被申渡、令壁書了、

〔廻文備忘〕○伯爵橋本實顯所藏本

三月十日、從唐橋到來、小倉高橋に傳達、

正親町三條中納言

從今日議奏加勢被 仰出候旨、加勢中山大納言被申渡候趣、四辻中納言被演說候、尤番

々且小番未勤之輩に之、從親族中可申傳由に候、仍申入候也、

三月九日

時 晃

右之通被告候旨、菅三位被示候、仍申入候、（五條）、也、

翌十日

爲 定

朝議アリ。關白九條尙忠ノ上奏ニ係ル外交措置ヲ幕府ニ委任スル旨ノ

勅裁案ヲ議セシム。左大臣近衛忠熙、内大臣三條實萬、疾ト稱シテ朝セズ。右大臣鷹司輔熙、權大納言二條齊敬、忠熙、實萬ノ邸ニ抵リ、其參朝ヲ促ス。實萬、參朝ス。 議遂ニ

決スル所ナシ。明日、更ニ三公以下納言・參議ニ命ジテ各所見ヲ上ラシ

ム。十一・二日ニ互リ、權大納言中山忠能・同大炊御門家信・同廣幡忠禮・權中納言四辻公績・同正親町三條實愛・同正親町實德・同三條西季知・參議八條隆祐・同日野資宗・同庭田重胤・同中院通富・同橋本實麗・同野宮定功・連署奉答書ヲ上リ、案文ノ變更ヲ請フ。

〔孝明天皇宸翰〕○維新史料編纂會所藏本
孝明天皇宸翰寫所藏

○三月六日左大臣近衛忠熙へ

時候御用心願入候、風前よて認、

散紙墨付恐入、大々亂書高免、

御推覽願入候事、何モ荒く、

御兩人御出御承知、吳々も

願入候事、

快晴候、

倍

尊公御安泰令賀候、只今若玉章拜見候処、誠大變之御書之趣、實ニ力落當惑仕候事ニ候、

此事何共合点ゆらば、大不審之至リニ候、

扱先關白面會候処、如別紙關東返答、言上候間、私申候者、かゝ返答振ハ元々心配致居候

關白ヨリ關東ノ返答ヲ奏上ス

今一應推シテ關東ニ申遣スベシ

將軍ノ嚴命ニテ無理推付ハ不可

叡慮ノ兩條申テ兩役以下談合スベシ
關白ノ所存如何太閤ノ同意モ心配ノ至

事ニ候、然於此方見限承知トハ、如何躰も難申候、何卒今一應おいて御申遣ハ成間敷色く申談候処、關白被申候ニハ、私もおるも實ニ恐懼之至リニ候、然か様申參候者、何レ堀田細工ニ無相違被存候、何分此返答甚六ヶ敷、人心居合老於關東以何様ニ引請いゝ之之文言、當時愚昧之大樹ト申者こちら内話之事、表向大樹之事故、征夷大將軍之いゝ躰も引受ルト被申候を、こちら何共申遣難譯ハ無之、乍去此通りよて御承知之旨ハ申遣候譯合無之間、先天聽ニ達シ置候ト計返答ニ候、何卒備勃歸り候事成間敷いゝ被尋候間、其辺至極尤ニ可有之乍、其よてハ於關東も早許容ニ成候ハハ大事故、何卒私了簡ハ、先引受之処ハ、鳥渡此書付よてハ、多とい承知不承知之者も無差別、大將之嚴命よて無理うらよてもお一付候様見候、左候ハ人和ニハふらば、元より歸服候謂無之候半哉、其邊深心配之譯合ニ候間、右引請ハ被成候段ハ、安心之模様ニ候得共、實々一等人和よて無所存事ニ候や、後難有候ハ以何ト申処ト、又如斯次第ニ候ハ所全六ヶ敷義故、神奈川許容、五畿内近海ハ固無用ト申ノト兩様、一先書付、猶又兩役勅問之人ニ、右返答書付ト兩方よて御相談可然哉、猶得御思案、後難無之可然ト答置候、全躰關白之所存ハ、眞實之処以何哉、私申候故御附合ニ候や、又太閤之御同意よてハ甚以心配仕候至リ、約條之通逐一許容よて宜事ニ思召哉尋候処、私ハ始々申通、御許容よてハ近患元々不好之事ニ候ハ

共、時勢變革、右之返答振次第よきハ、頓ト詰り致方無之仕合、又格別嚴敷被仰候御受ハ申さば、公武之御隔間ニ成候ハ、今日之事ニ掛り、甚心配之至リ候、役外之人ハ所存通づ、と申上候へ共、役人ニ成候ハ心ニ以ケ程思候共、又々左程ニモ致しうとく、心配之旨申居られ候間、何分よも、前々兩條よて、得ト可有御配慮申置候、其余數話ニ候へ共、一々ニ難書取、要計認申入候、

扱青門邊の処も、何ぞ噂有之故ト存候へ共何モ無之候、私存候ハ、是限りよて御引移よてハ、實々心配仕候間、毎之通御入來之程頼入候、其故先暫ハ、青門御參よても、是迄ノ様ニ議奏杯共、御話合ハ御止、只々是迄通思入候へ共、私伽ニ御出ニ候ハ、元々太閤も承知之事故無子細ト存候、万一關白ても私へ何卒被申候ハ、頓ト異件之話ハ無之、是迄も申候通とよニ御出之工合ニ申候、且此節大心配鬱氣之時節故、青門よてもまさらに御出有候てハ誠ニ困り候間、此節ハ毎々多く招候様ニ申置候間、何卒御安心よて御入來之様、尊公カ得と御さとし希入候事、

實ハ又、此間話致うけの事モ有之候間、何レ七・八・九日之内、關白入來無日御出之様、尊公カ得と御諭、吳々も頼入候事、今日之次第、御書よてハ不分候間、委細ニ承度、明後日之内、尊公御出願入候、青門ト同日よて、此方可然存候、

主上ノ御伽
ニ青蓮院宮
ノ參内ハ太
閤モ承知

不慮ノ發念
計リ難シ

御兩人共御出實々頼入候事、左様無候ハ、私一身茲ニ極、不慮之發念難計候間、何卒其邊御推察よて、青門へも得とく御教諭、是非く願入候事、

御承知承度候事、實々此上ハ、又々御あがり承候半乍、私も所全難居位歎ケ敷至り候事、

何分御兩人共御日違、關參無日、御來臨頼く入候事、

青門之処、外之咄とよニ參ふれハ何も不差支、此段承知被致候やう、吳々も

尊公之御力拜願候事、

何モ荒く、

御返之品、被爲有候御書取乍、御一封之外何モ不被有候、若御取落し、恐入候へ共承度候事、任御申、御書返上候事、

吳々も御推察、是成安心之様、頼々入候事、

大々急、別ノ乱書

恐入候事、

三月六日 未半刻、

左 大臣 殿

極 密

此 花

安政五年三月九日

一七二

○別紙

老中

奉書寫

今度爲

御使上京之上、委細傳

奏衆を以被及

奏達候処、去月廿三日、兩卿并議奏衆、御自分旅宿に被行向、此度之義、深被爲惱

叡慮候、至此期候ると、人心之居合國家之重事之候間、御三家以下諸大名之赤心之聞召

度思召候、今一應被下台命、右所存爲書取、入

叡覽候様、關白殿・太閤殿御沙汰之趣書付被相渡候之付、右書付被差越到來候、則及言上候

処、

叡慮之趣御尤之御事之被 思召候得共、人心居合方之儀者、如何様之淺關東之御引請被

遊候間、被爲安

叡慮候様被遊度旨被 仰出候間、此段傳奏衆に、早々可有通達候、恐々謹言、

三月朔日

老中三人連判

堀田備中守殿

右一包、

切番

内藤紀伊守儀之、病氣不參之付、連名不仕候事、

右一番、

手紙

去月廿三日被相渡候御書取之趣、則關東に申上候処、別番之通被 仰出候間、其段御心

得、宜 奏聞可被在之候、且又右一条、追々時日相延ひ候内、亞墨利加掛合同差縫候放、

或者英吉利船等渡來致し、如何様之混雜を生し可申越も難計、左候る者、國家之御爲甚

以不可然候間、可相成へ、早々御沙汰有之候様仕度候事、

右一包、

以上

右書付、極内々入

尊覽候、何レ表向、可有廻覽と存候事、

御序之、青門へ御見爲願入候事、

安政五年三月九日

一七三

安政五年三月九日

一七四

御覽後、御返頼入候、

不急申候事、

〔左大臣近衛忠熙上書〕

○孝明天
皇紀所載

○三月六日上書

傳奏ヨリ青
門内府等ノ
會合ヲ差止
ム

○上、先日以青門拜見之書付奉返上候、扱關東ヨリ御返答申上候趣傳承候、今日ハ言上ト、乍
恐御心配様實々御察奉申上候、昨夕、當職ヨリ廣橋ヲ以テ、青門・内府・忠熙等會合、種々話
合、不穩儀、御政事向御差支ニ相成候趣、以後其心得會合ナト致間敷、御直ニ言上無之様被
示候、青門へモ同様、世話卿ヨリ申渡、内府へハ、當職へ家來招ニテ被申示候趣ニ付、青門
モ今日本坊へ引取ニ候、右之次第故、勅書ナト賜候モ、甚如何恐入候次第ニ候申上置候、且
青門キヒシク申上置候御次第モ内々承候、尤ニハ候得共、コトニヨリ善事ニテモ、天下大
亂之基ニ相成儀モ在之候儘、其邊ハ深御勘考不被爲在候ハテハ、不相成ト乍恐存上候、誠恐
誠惶謹言、

善事モ天下
大亂ノ基ト
ナル

尙々、恐入候時勢、何共難申上盡奉存上候事、青門之處、甚案思候事ニ候事、是ハ誠ニ誠

ニ極秘々、何卒此獻書、御覽後早々返給候様分テ相願候事、

極密々謹言上、

忠

熙

〔孝明天皇宸翰〕

○九條
文書所載

○三月七日關白九條尙忠へ

時候御用心可被成存候事、如例大々乱書、高免御推覽頼入候事、

快晴春色増加候、倍尊公御安泰令賀候、然之、昨日段々及御尋問候關東返答書之事ニ付、今
一應趣意書出來候様、又若前之趣意書再應遣し候歟、兩條之義愚存申入置候、右趣意書出
來候事哉、一大事之義、輕々敷致落手候も以何、可成丈入念可然存候、然乍、最早出來候
事哉、大概何日頃御隨身御入來候哉、御尋申入置候、昨日も申入置候通、出來之上ハ、三公
兩役已下過日勅問之人々召設、得と書付こゝる爲見、兩様何レ可然哉、又若趣意モ可有之、御
尋問之上、猶其趣ヲ尊公承り、又々御相談申可然哉ト存候、此度之義ハ、一大事故、弘ク
趣意尋可然、非常之事ト存候、此義ハ、昨日も申入置候得共、猶又召設之御都合も可有ト、
再應申入候、必前後いゝさぬ様、尤御執計御行届、御美名之段、頼入候事、猶又御入來之砌
委細申上候事、毎々御面働之段、不願憚申入、死罪難逃候事、何モ荒々々、

三月七日

執柄殿

貴机に

此

花

安政五年三月九日

一七五

關東へノ勅
裁案ヲ三公
以下諸卿ニ
示シ意見ヲ
徴スベシ

〔孝明天皇宸翰〕○維新史料編纂會所藏本
孝明天皇宸翰寫所藏

○三月七日左大臣近衛忠熙へ

時候御用心可被成存候事、

吳々も宜敷御配慮之段

承度候事、

何モ荒く、

連日快晴候、

叡慮安カラ
ズ御安眠ナ
シ

倍尊公御安泰令賀候、昨日ハ一封進候處、早速御返翰之趣何為承候、昨日モ申入候處、段々六ヶ敷成候時節、各左様ニ退身いゝされ候るハ、實々多勢ニ無勢、私一人商量辨別、實以難行届、誠以大ニ心配、昨晚寢兼心配仕候、余り心配候余り、同敷事乍再三申入候、

今日議奏モ寄合よて、今一段押る遣趣意書改候筈候、未不分明乍、明日ハ關白入來之程難計候、尊公御入來モどうか、明日當り御詠艸御持來之旨、昨日

御一封ニ被為有候へ共、若關白入來るハ、又々御逢申道も有間敷哉と存候間、今日ウ九日之中よても御入來可然や、然明日無入來者、明日

忠照ノ參内
ヲ望マセタ
マフ

尊公御入來願入候事、實ハ昨日之御一封之次第、頓とく難解、以何成譯合候哉と誠心

昨夜徳大寺
公純參内

配仕候、昨晚徳大寺ニ面會用談之節、徳大寺も其事私へ咄候事候、實ニ昨日も申入候通、尤政事ニ御掛りハ見る候へ共、是迄通り只々入來ふれハ、無子細存候事候、何卒私存候者、

青蓮院宮ノ
參内ヲ望マ
セタマフ

尊公廣橋へ御咄よて、何卒青門之処、如元致候方便ハ有間敷事候哉、何レ共、是迄通入來有様御配慮希入候事候、一向私廣橋ニ逢得と承、其模様よて關白申入候半共存候へ共、又無差といゝ、却る求瑕候次第ニ成候も、いゝと先差扣居候事候、何分宜御配慮之段頼入候、猶又御入來之砌、委細申入候事、

何モ荒く、

御入來日限之処宜敷御勘考、

御早方畏入候事、余り心配之余り、又々一封差進候事、

御面働之段、且大乱書等、御高免頼入候事、

太閤に内覽邊私文遣候事ハあゝ候や、又々御尋試候事、

彌生七日巳半刻認、

左大臣殿

此花

御机下に

安政五年三月九日

一七八

〔孝明天皇宸翰〕

○公爵島津忠重所藏本
孝明天皇宸翰寫所藏

○三月九日左大臣近衛忠熙へ

時候御用心專一與存候事、何モ荒々、

快晴候、

倍尊公御安泰令賀候、扱者只今

御詠艸拜見忝即返上候、扱御一封之趣、何モ承候御事ニ候、先刻關白面會用談之節被申候

ハ、尊公（三條實萬）内府、今日格別之評議之處、不參心得、何ソ申合之事歟ト被申候間、何モ無口合

申置候處、今日ハ、右府大將甚不安心之由、段々私申候處、

尊公江ハ、右府使、内府へハ一二之内使ニ而尋之様被申居候間、先左様申置候、只今評義眞

最中ニ候故、加様申候内、右府

御亭江被向ヤ難計、扱々不都合之次第、誠何共申様無之候、只今口ヲ替、關白へ申候而ハ、

又ハ疑心モ發可被存候間、万一右府使ニ被參候ハ、

御所存猶後日一兩日之中、可申入、今日ハ不申上ト而モ被仰候半歟、然猶又 御配慮頼入候、

於關白茂、武傳格別セキ立、大不承知ニ而ト一カ決定ハ、又今日モ延引、明日ニモ成候ヤ之

模様ニ候事、鳥渡此段申入置候事、誠ニ節格々々御一封之通ニ不成恐々入候事、何モ荒々、

近衛忠熙三
條實萬朝議
ニ參内セズ

輔熙近衛邸
ニ赴カン

朝議ノ決定
ハ明日トナ
ラン

大々急、輕卒御返答、大亂書高免頼々入候、猶委細ハ文通リ御參之節、今一應可申入候
事、然亦々模様替候ヤ難計、其邊

御承知頼置候事、

三月九日

左 府 殿 江

急 御 返 事

此 花

〔孝明天皇宸翰〕

○維新史料編纂會所藏本
孝明天皇宸翰寫所藏

○三月十一日左大臣近衛忠熙へ

不順時候、專一御用心と

存候事、

右之次第、御序ニ青門へも、

御沙汰頼置候事、

大々乱書、高免頼入候事、

鬱々敷天象候處、倍

尊公御安泰令賀候、先刻老御一封被送下何爲承候、先刻關白面會仕段々及敷談候處、頓シ

關白ニ面談
シタマフ

安政五年三月九日

一七九

ト、無全方、先々過日以右府

御所存承候一紙なる治定、右に添書なる、來十四日、堀田參内申付、兩役列座なる申渡に先々成候事候、色々申候へ共、無差斗余り強申候るハ、堀田之身躰に可掛、左候るハ、不憐愍之至、且ハ對大樹無申譯間柄にも可掛之次第、誠に必至難澁之義候、仍先々如右治定候、何返答又々可申來、其上なる強可申述哉、只今之処、何分を後使歸府之方可然哉之相談候事、扱又誠に不審之事出來候、太閤之処、昨今一封兩度計來、且右府入來、義奏に演舌之工合、誠に是迄之存念と表裏強被成候事、誠に珍重乍不審、且中々油斷ハ不出來と存候、且又菅卿之處、誠に内府働よて存外之次第、可成今日退役願書差出候由、表向私ハ披露ハ、東使歸府後よ成候半るハ、先々其邊ハ關白邊よて留置よ成候様子候、關白之処も、先々宜都合於候、鳥渡此段申入置候、且又青門之処、何卒入來有様、精々御申諭頼入候事、猶又御入來之砌、万々申入候事、

何モ荒々、

菅卿之処、矢張願書直に披露に成、直様開濟之事宜と尊公も思召、内府モ被思候事ナレハ、猶又其邊内府と御熟談、關白へ通候様頼存候事、

餘り強ク申サバ堀田ノ身體ニモ關ハラシ

太閤ノ態度一變油斷ナリ難シ

青蓮院宮ノ參内ヲ望マセタマフ

東坊城辭表ノ處置如何

彌生十一日申午過刻、

此 花

左 府 公 殿

御 机 下 に

〔青蓮院宮日記〕

○孝明天皇紀所載

三月六日、壬午今日以御世話卿、屢御參不被爲在候様、關白殿御内命之趣被仰上、

十二日、戊子今日以御世話卿、屢可被爲御參仕被仰出、御請被仰上、

〔中山續子日記〕

三月八日、

御機嫌よく御拜、關白を御參り、御對めん、○中略

九日、

御機嫌御よし、御拜、○中略關白を御參り、御小座敷にて御對めん、○中略

十一日、

御き嫌御よし、○中略關白を御參り、御對面、

〔非藏人日記〕

○東京帝國大學所藏本

三月七日、癸未、晴、議 奏當番萬里小路大納言殿宿退出、加勢中山大納言殿、其外參集、

青蓮院宮ノ參内ヲ止メ又參内ヲ命ズ

關白參内